

386
219



始



386-219



圍碁速進講義

大正
9. 3. 16
内交

序

圍碁は古來日本及支那だけに行はれる室内遊戯でありまして誠に高尚な遊び事の一つであります、女小供でも遊べ、殊に老後の娛樂として之に越したものはありませんそれで碁の打てるのは交際を求める近道にもなります。

圍碁の本も種々なものがありますが、初學者にとりて分り易いもの、特に將棋と違つて碁は始め入り難いものですから全く知らない人には非常にむづかしいものと考へられてゐます、本會は茲に鑑み所ありて、初學者に頭を痛めず、短時に碁の原理を會得して速く上進の出來得る様苦心慘愴して此講義本を著述いたしました。幸に熟讀玩味して其の眞髓を會得せられんことを希望して已まない所であります。

編者しるす

凡例

- 一、本書は専ら言文一致を以て記載しましたが、中には文を短縮する爲めに、普通文體を用ひたる箇所もあります。
- 二、次の目次に就いて御覽の通り、第一編より第四編までは小碁盤につきて講述しましたが、第五編以下は普通の碁盤について説きました。
- 三、第五編及第六編の定石及石立は最も重要なものであります。

目次

第一編 總論	一	第八 持	二八
第一 圍碁の沿革	一	第三編 圍碁に用ふる熟語	二九
第二 圍碁の階級	一	第四編 實地の打方	三六
第三 碁器	三	第一 打方の一例	三六
第二編 圍碁の一般及原理	五	第二 置石の置き方	四〇
圍碁とはどんなものか	五	第三 井目置碁全勝法	五一
第一 四ツ目提り	七	第四 五目置碁必勝法	五三
第二 石の生死	一一	第五編 置碁定石及石立	五四
第三 地提り	二〇	定石の事	五四
第四 劫	二三	置碁の打始め	五五
第五 攻合ひ	二四	一 小桂馬頂手	五八
第六 征	二五	二 小桂馬懸大桂馬受	六三
第七 門	二七	三 一間高懸	七〇
		四 二間高懸	七三
		五 大桂馬懸	七四
		六 大々桂馬懸	七五

石立の事……………七六

第六編 互先定石及石立……………七六

打始め……………七九

一 小目尖……………八四

二 小目一間夾……………八六

三 小目二間夾……………八八

四 小目三間夾……………九〇

五 小目高懸……………九二

六 高目……………九六

七 目外……………九八

八 締及締へ懸方……………一〇〇

互先石立の事……………一〇四

第七編 雜……………一〇

一 太閤碁……………一〇

二 長生……………一三

三 角曲四の生死……………一五

四 缺眼生……………一六

附錄 實戰……………二七

圍碁速進講義

圍碁研精會編

第一編 總論

第一 圍碁の沿革

圍碁の遊技は古代支那にて創めて考案せられたもので、我が國に傳來したのは遣唐使吉備眞備が彼地に渡りしとき持ち歸りたるものなりといふ。徳川時代に至り本因坊(ほんにんぼう)と呼ぶ人もある)、井上、林、安井の四家幕府より碁役を命せられ食祿を食む。明治となりて方圓社なるもの起り、現今本因坊派及び此の方圓社派が最も隆盛を極む。

第二 圍碁の階級

圍碁には角力と同じく階級がある、大角力の幕内力士として國技館の勝負の番附に

圍碁速進講義

上の所は圍碁では段の有る人で、初段から九段までである、九段は横綱の格なり、初段の下に一級から十二級までである。

今日日本で九段の最高段の人は本因坊秀哉といふ、九段は此人一人で八段が一人二人七段が二三人といふ風に初段が最も多い、初段以上が日本に五六百人はあらう。

九段	名人といふ	八段	准名人
七段	上手	六段	准上手
五段	高段	四段	巧手
三段	巧手	二段	巧手
初段	巧手		

一級初段.....十二級

然らば此階級は如何にして定めるかといふに徳川時代には碁役本因坊、井上、林、安井の四家に於て試験して免状を授けたが明治となりて方圓社も亦免状を與へることになつた。

次に段の有る人の手合はせは如何にいふに一段につきて半目違ひとす、即ち五段の人と初段の人とで初段の方が黒石を持ち二目先に置く(白から先に打つ)、初段の人と二段の人とは先々先又は先相先といひ初段の方が始めの二番は黒石で先に打ち三番目は白石を持ち後手で打つ、かく三番づゝ循環さするなり、これで丁度半目違ひといふことになるのである。

通常田舎初段といふ人は初段に先で行くか二三目置いていく所で、實際に初段の力量ある人に井目(九目のこと)置いて打てる人は素人として普通の所である此人にまた井目置いて打つ者もある也。

第三 碁 器

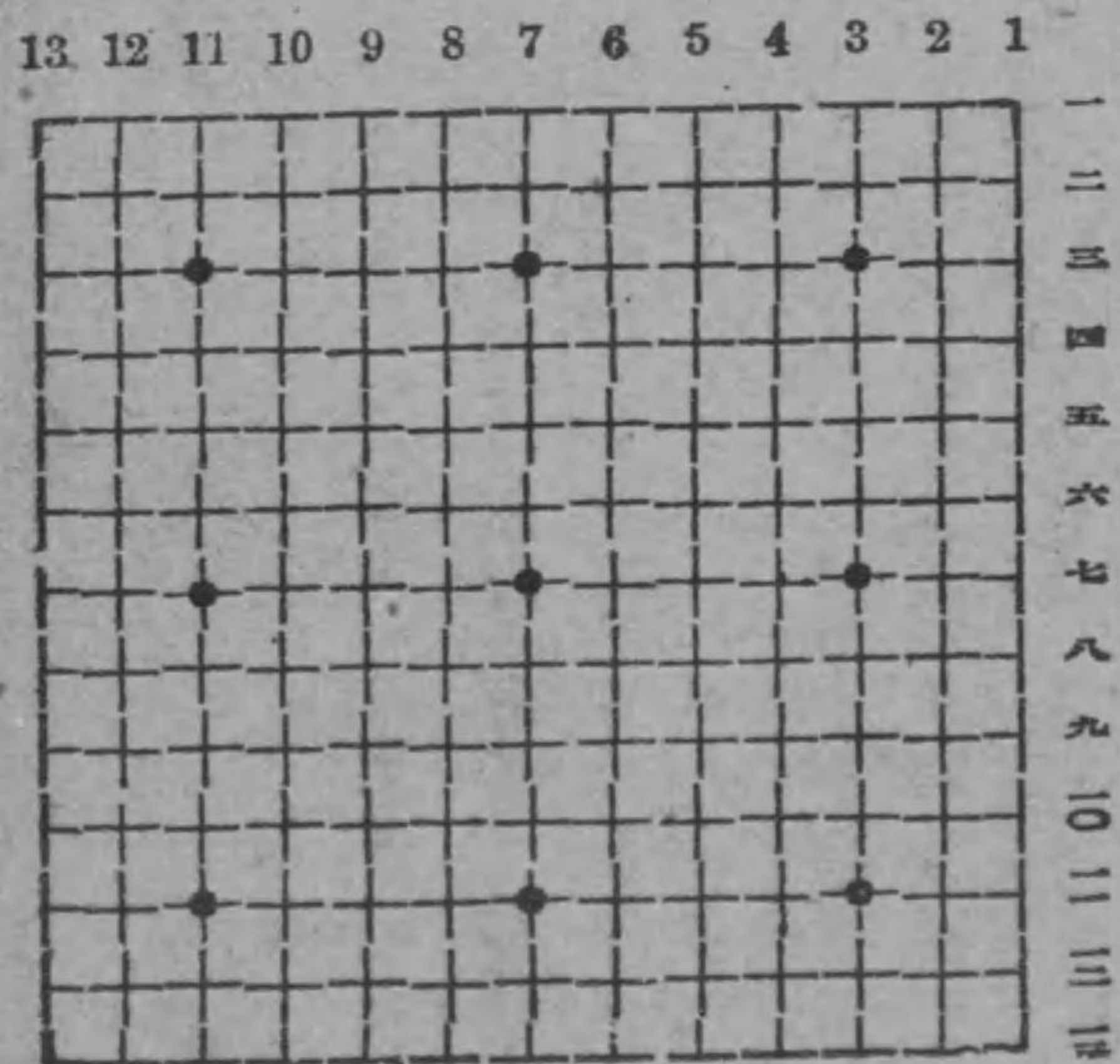
碁器は即ち碁盤と碁石なり、碁盤は榧の材を最上とし、銀杏にても造る、石は昔は木にて造りしが、黒石は那智産、白石は對馬産、蛤の貝を最も良しとす。

碁盤は縦横各十九線、全部で三百六十一路ある、従て白石は總計百八十個黒石は總てで百八十一個あるを常法とします。

下圖に示す盤面は縦も横も十三線で全部にて百六十九路あり(將碁は線の間に駒を置きますが碁は辻角に石を置くのです)これは初學者には普通の廣い盤面は容易にお終ひにならず非常に複雑なため初めは之にて獨特の講義を爲すことにした。

此の小碁盤は圍碁の大家でも輕便な所から研究用に屢使用するもので普通の大きい盤面と理論上何等變りはなく却て速く勝負がつき面白いものです。盤面上に黒點が九つあり、是は星と稱へ、四方の端に近い線を邊と稱す。

盤面圖



第二編 圍碁の一般及原理

圍碁とはどんなものか

圍碁とは定義を下げば、一定の盤上に於て二手に分れ場面の多少を争ふ遊戯なりとも言ふべきもので、碁盤を戰場とし白軍黒軍が戦争をなし占領地の多き方が勝です、即ち敵の石を包圍して擒となし、或は敵の石の侵入を防ぐため防備を嚴にし、或は味方の石を殺しても之より多き敵地を侵食する等千變萬化であります、是を一言にして云へば碁には石提りと地提りの二様の見方があります。

昔から圍碁のことを俗に「四ツ目殺し」又は「四ツ目提り」といひますが眞に穿つた語でありまして、地提りも石提りの變化したものと見られます、つまり圍碁は「四ツ目殺し」の應用されたものといつて宜しい、其の變化は石の生死、地取り、劫、攻合、征、門、持等となつて表はれます。今之を次の表にて一覽に便せん。

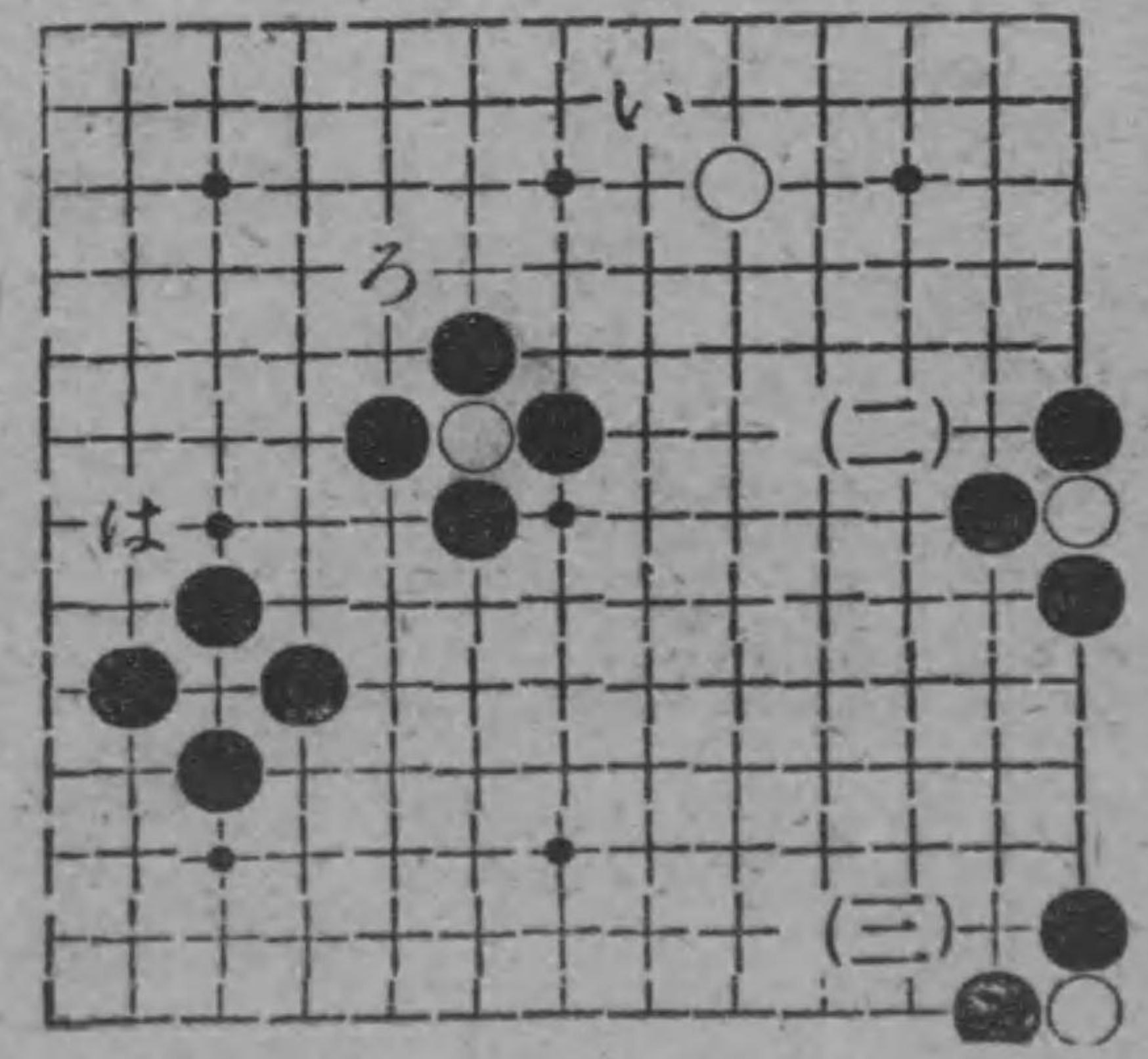
圍碁……廣い意味の
四ツ目提りなり

(八)	(七)	(六)	(五)	(四)	(三)	(二)	(一)
持	門	征	攻合	劫	地提り	石の生死	四ツ目提り 狭い意味の

第一 四ツ目提り

四ツ目提りは四ツ目殺しとも又は四ツ目抜きといふ名稱もあります、これは四ツ目の石で一つの石を提る（抜き取る）ことで、前に述べた通り抑これが圍碁の根原である、茲に第一圖に示す如く白の一子（一子といふも一目といふも共に石一個のこと）盤上にあり、之を如何にして抜き取るかといふに黒は、（ろ）のやうに四方を圍めば取れます、取つた後は（は）に示す通りです。白一目が邊にある時は（二）の如く三目にて圍めば足り隅角にあるときは（三）の如くに二目にて圍めばよし。

第一圖

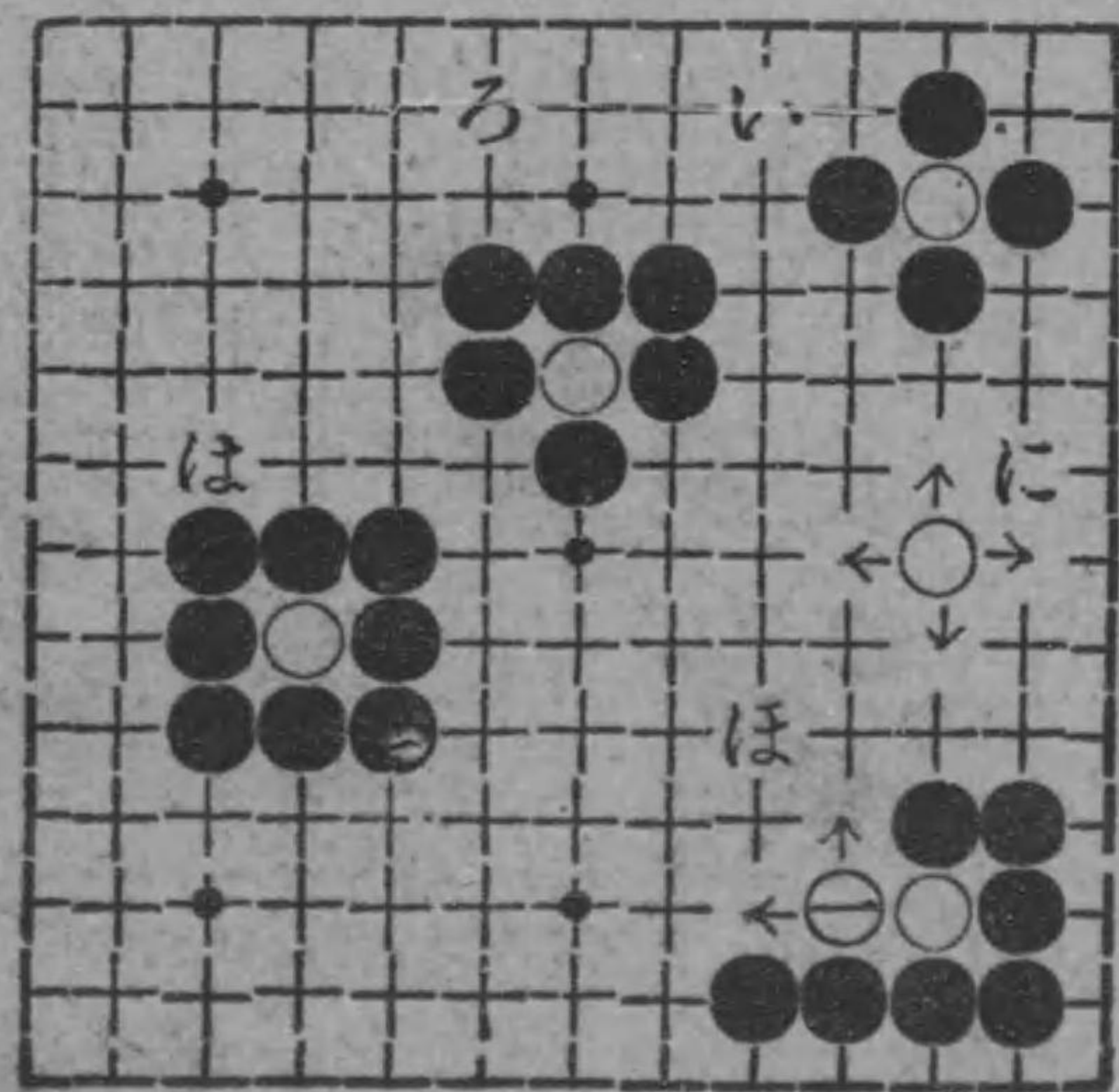


前に説く如く白の一目を打ち抜き取るとは其石の直線上の四方を包圍すればよろし、第二圖(ろ)は六目にて包み、(は)は八目を以て包んでゐますが斜にあたる石は打つに及ばない。

即ち石は(に)に示す通り直線上の四方にだけ生きて延びる力を持つが原則であるから四方だけ圍めば提ることが出来るのである。

若し(は)の様には假令多くの石にて圍みたりとするも一方に缺陷があるときは圖にある如く白に一と打たれたるときは猶直線上の二方面に活路を持たれることになるのであります。

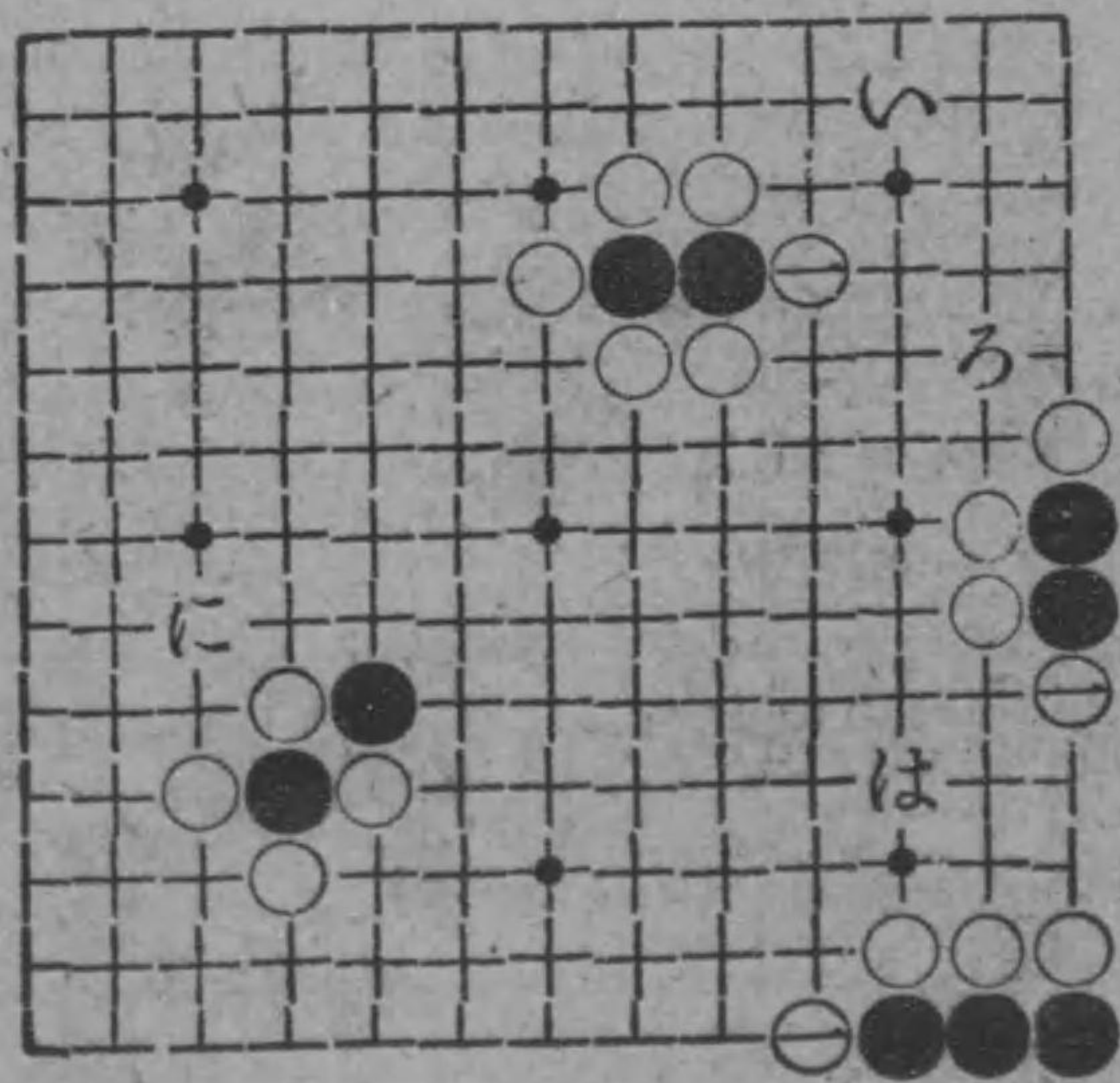
第二圖



第三圖

四ツ目提りは一子を四個の石で抜き取るばかりでなく第三圖(い)(ろ)(は)の如く二目以上でも直線上の四方を圍めば抜き取ることとは全く同一理由です。此抜き取るばかりにある状態を指してアタリ又は王子といふ。圖中一の石のない時の状態、此等圍碁に用ふる特有の語は其都度順次説明していきますから記憶を願ひます。

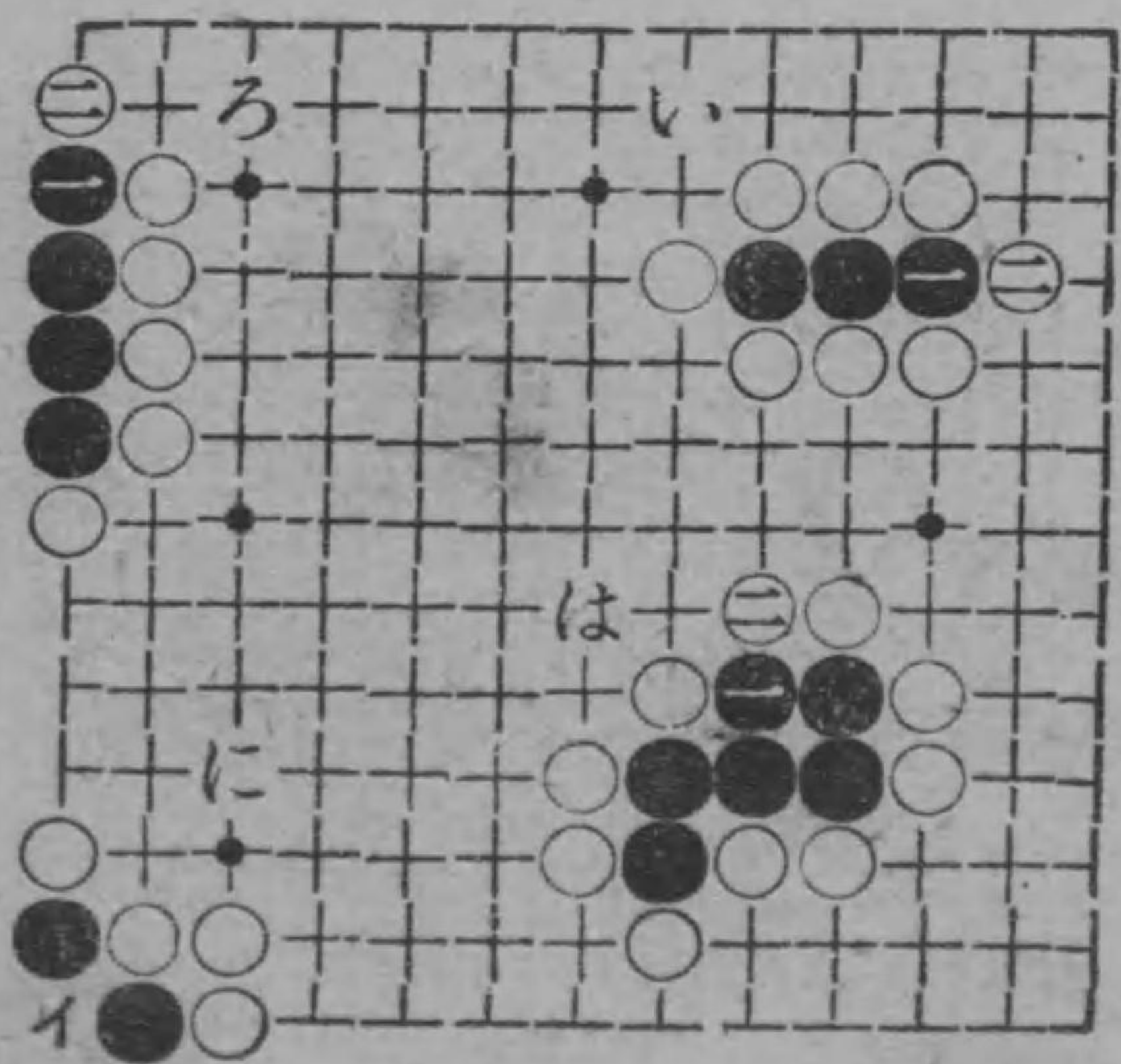
(に)圍は黒石が斜になつてゐるが、一子の四方を圍めば其一子だけは離して抜き取ることが出来る、即ち石は前にも説明した通り直線上の四方にだけ延びて連絡がつきますが斜には連絡がつかない、これは非常に重要な原則である。



第四圖——(い)は黒二目が白の七目にて包圍されて居ます、此黒二目は白の七目の爲めに提られたも同様である、なせなれば黒が活路を求めるには一と打つより手段はない、此時白は二と打ち合計三目抜き提ることが出来るのである、(ろ)及び(は)も全く同様にて逃げ出でる手段方法はないのであつて提られることに確定して居ます。

(に)に於ては黒は活路を求める手が無い強ひて打てばイに打つのですが、これは丁度イツバイにつまり、自分から抜き取られる形にするので、碁の原則として許さぬことになつてゐる、しかし白の方よりイに打ちて黒二目を提ることは出来ます。

第四圖

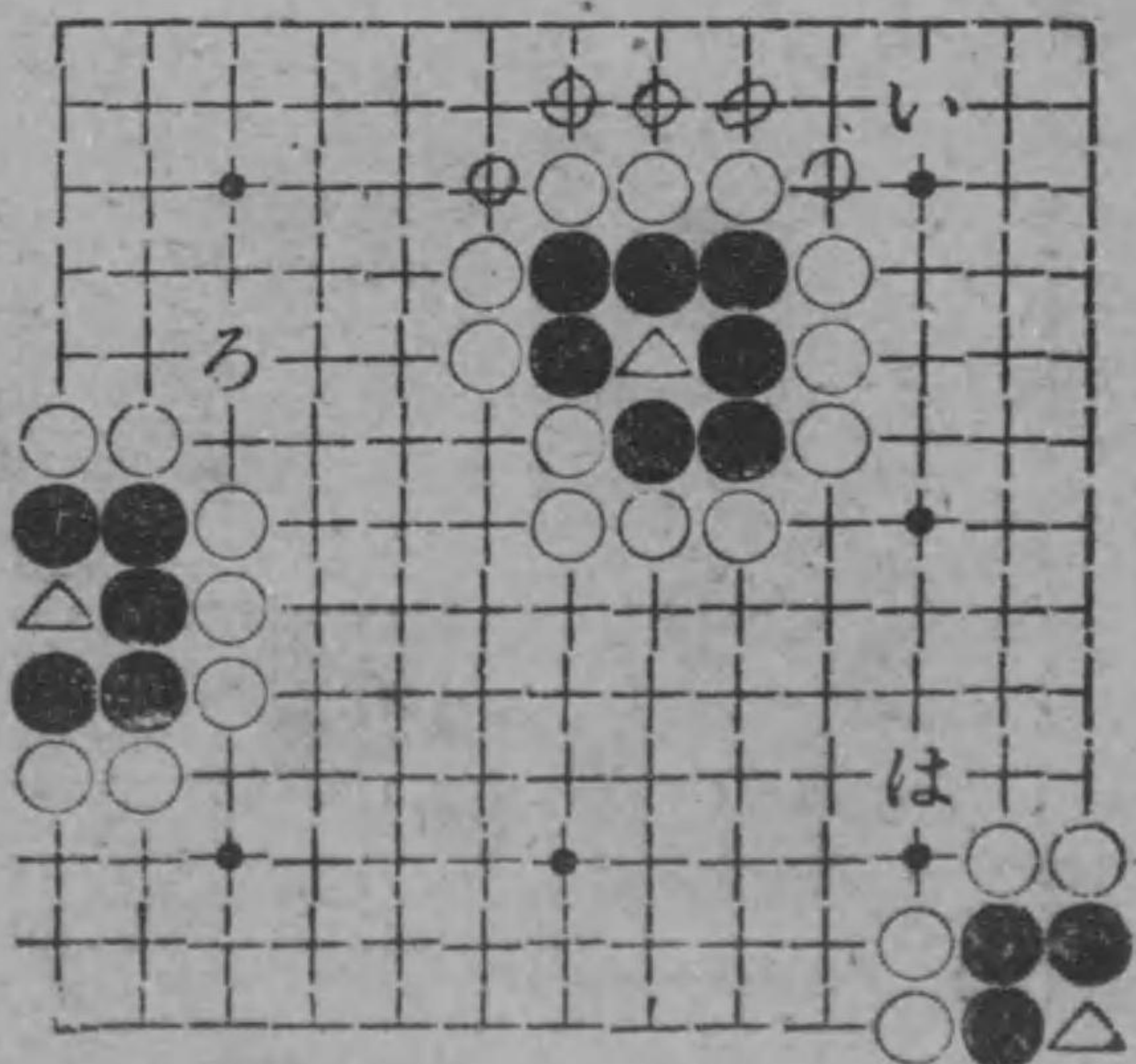


第二 石の生死

石の生(活)とも書く)及死は圍碁にて最も重要な問題であつて是を大要覺れば他は自然に分明する、そして是は第一「四ツ目提り」の應用されたものであります。

第五圖——(い)(ろ)(は)の三つとも△印の所に白を打ち込まれると黒は全部抜き取られてしまいます、此状態を指して黒石は死といふ、(い)では黒七目(ろ)では五目(は)では三目死んでゐる(提られるに決定してゐること)、即ち黒は白に殺されてゐるのである、すぐ前の圖(第四圖)にあるのも形は異つてゐるが黒は全部死です。

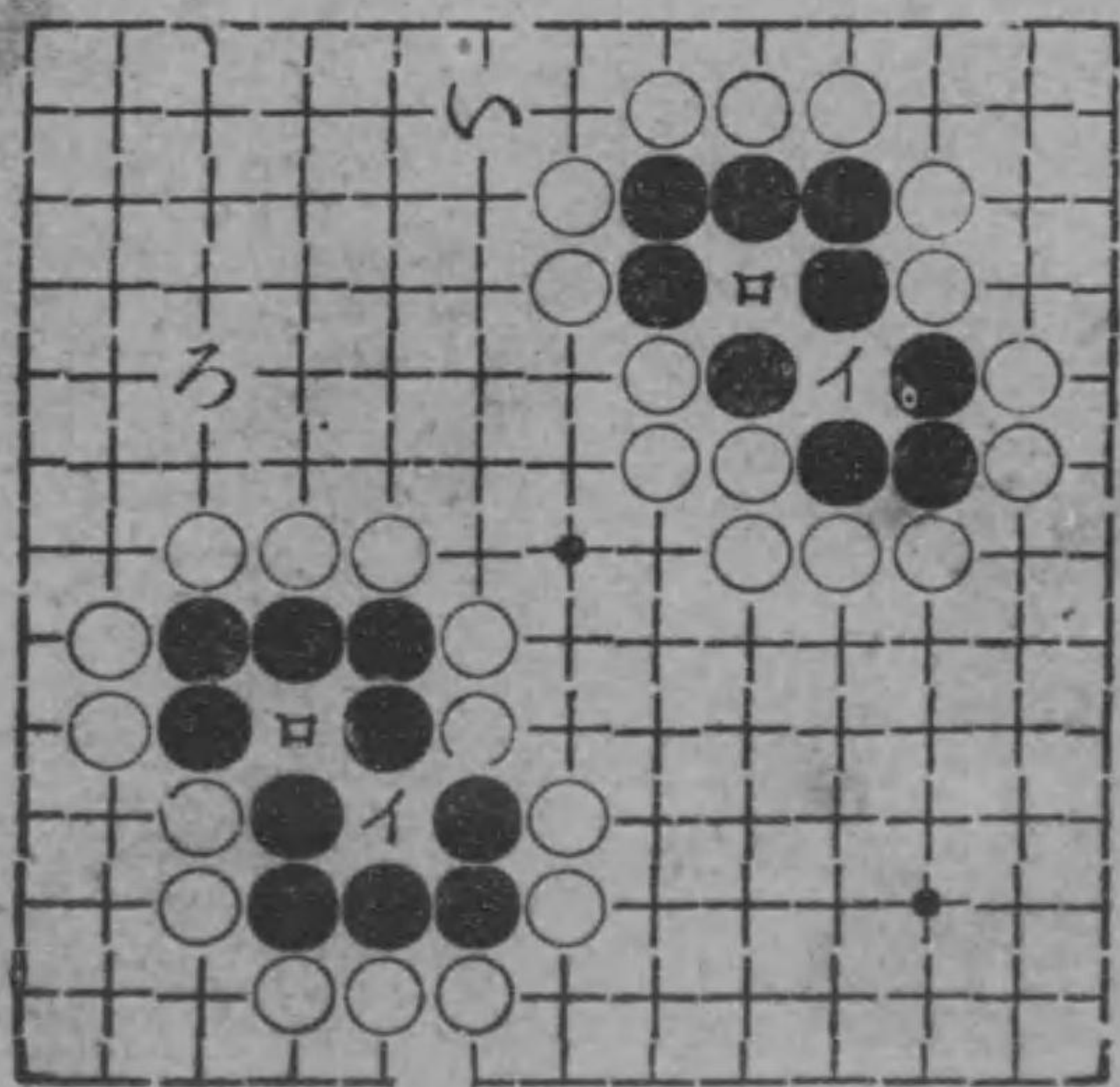
第五圖



第六圖——(い)の如く黒九子が白に全く包圍されたる時、白にイと打ち込まれると黒三子は提られてしまい、續いて口に打たれると又六子提られ結局黒は九子とも全部提られてしまふ、それで此黒九子は白にイ口と打たれるまでもなくやはり死んでゐるのである。

次に(ろ)は黒生の状態を表はすもので、(い)と異なり白はイに一目打ち入れても黒の一子をも提ることが出来ず、口に入れても同様なり、即ち白はイ及口に同時に二子入れなければ黒全部を提ることが出来ぬ、碁の法則として一子より多く一手に打つことが出来ぬものであるから、つまり此黒は

第六圖



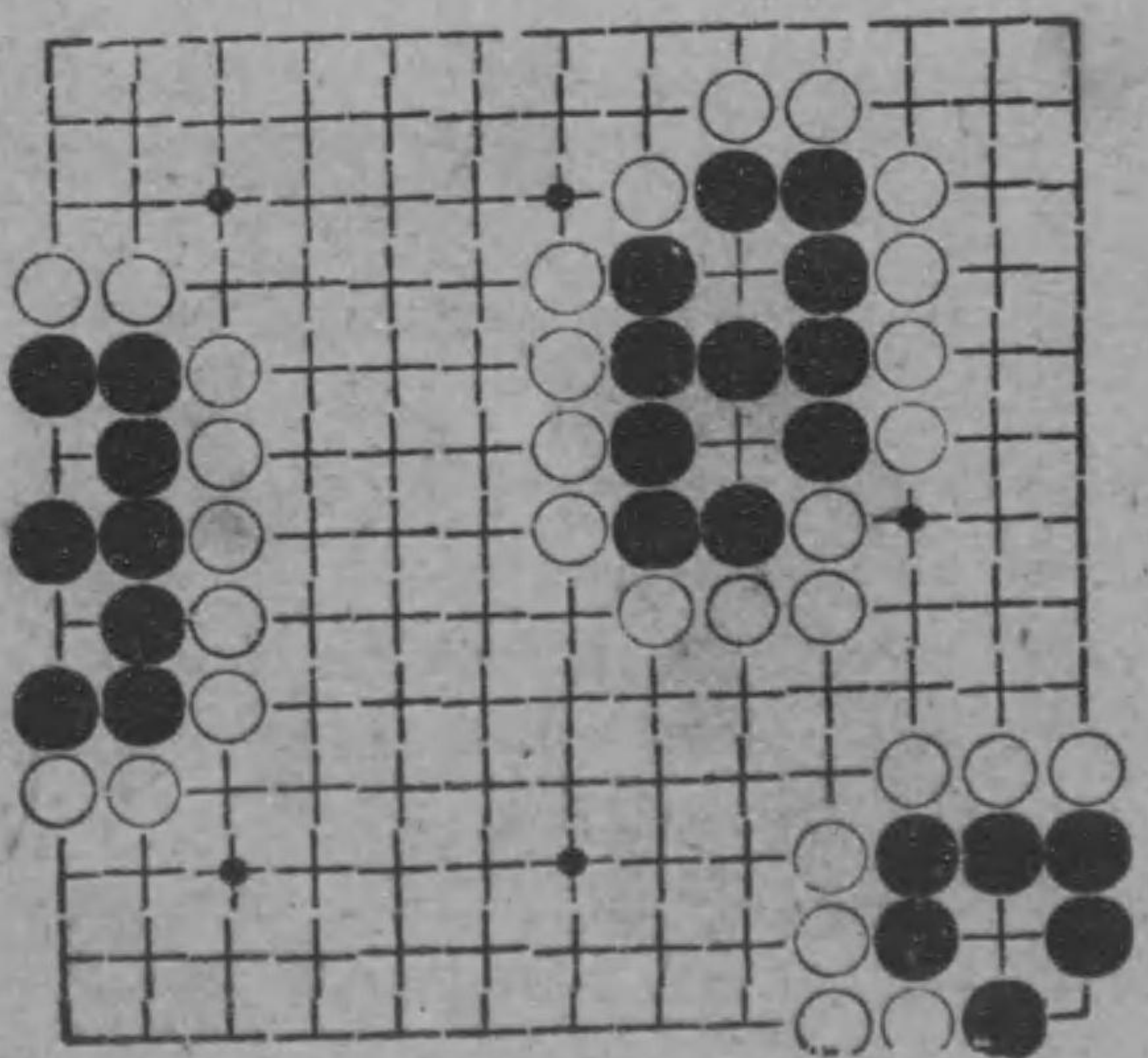
一目たりとも決して白に提られる憂がないこれを生と稱します。

第七圖——は三つとも黒の生を示すものにて最も簡單なるものを選びたり。

第六圖の(ろ)及び此第七圖の黒石の如く白より二子を同時に打ち込まねば提られることのないものを(前述の如く二子を同時に打ち込むことは碁の法則として不可能のことであるが)二眼を有すといふ、即ち生には必ず二眼以上を有することが必要條件なり、眼は「ガン」とも「メ」とも呼ぶ。

第六圖(い)のイは缺眼といふ(缺眼は離して抜きとられます、依て一眼は勿論死であるが、缺眼と一眼もやはり死である)。

第七圖

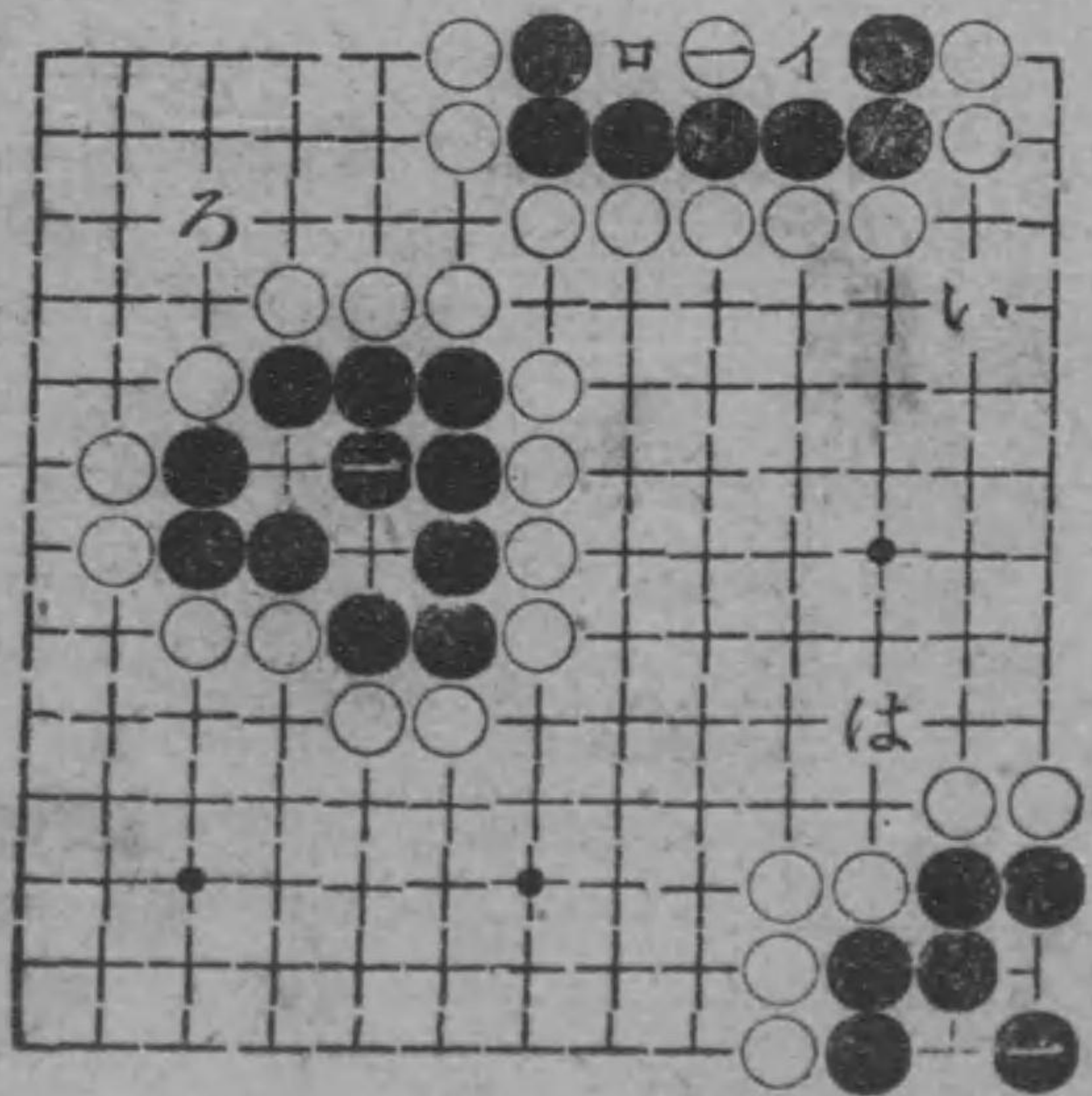


以下石の生死につき稍複雑なるものにつき説明せん。

第八圖——(い)の黒七子の中目三つある中へ白が一と一子打ち込むときは黒七子は全部死となる、なせなれば黒よりイロと打ちて白の一を打ち抜きて一眼となるからである(白よりイと打ち黒口と打ちて白の二子を提りても又白が一子中へ入れるとアタリになり黒が白の一子を提ればやはり一眼となるのである)、(ろ)は(は)も全く同様であるが黒から先手に一子入るれば完全なる二眼となり生である、即ち中三手は先手に一手入ると生になり後手になると死す。

(い)の白一の如く敵の要所へ打ち込み眼

第八圖



を作らせない手を中手といふ。

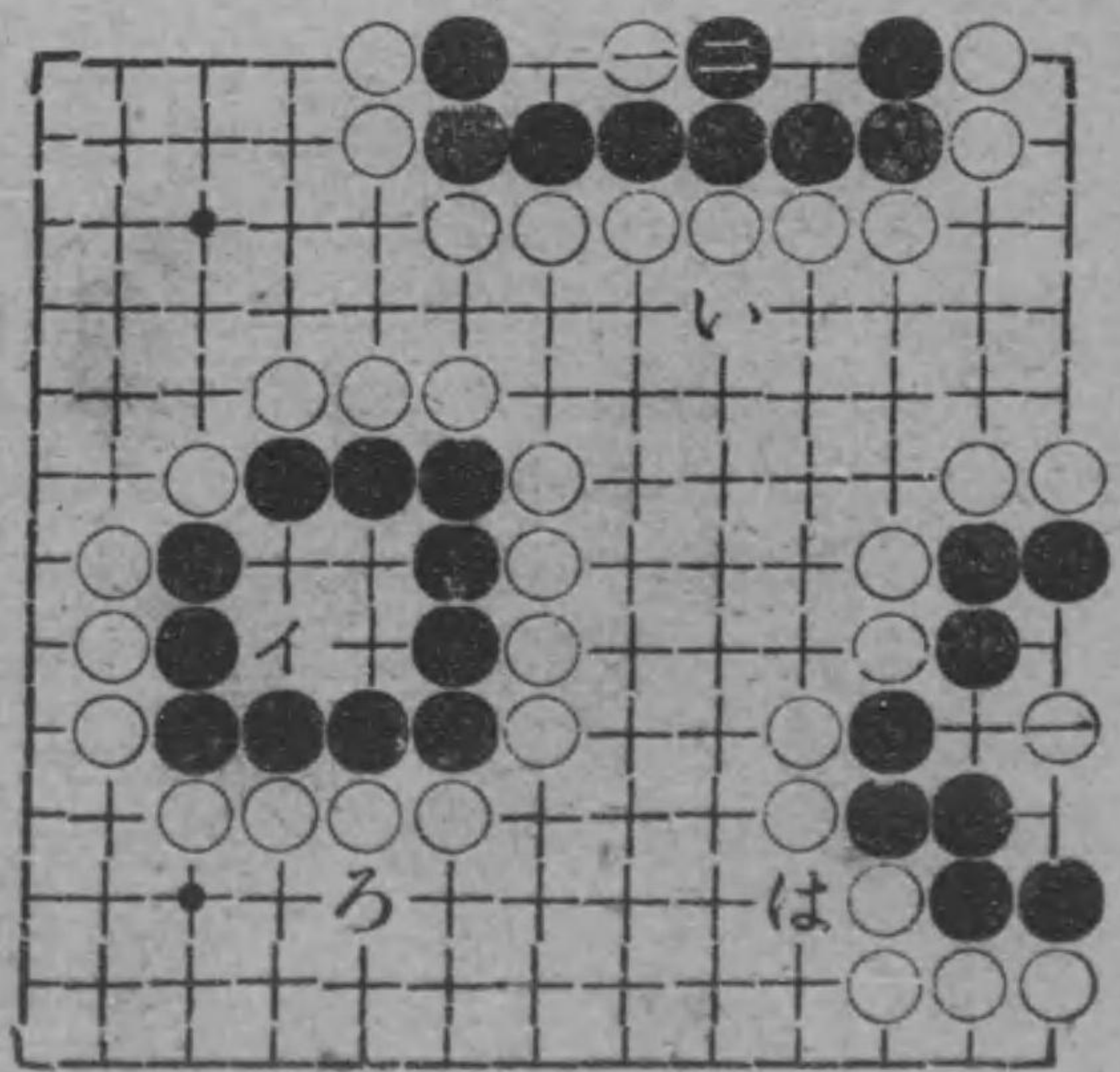
第九圖——(い)は黒中目四手あり、是は完全なる生である、何となれば白に先手にと打ち込まれても黒は二と打てば二の兩側に一つづゝ眼があります。

中目四手はカギの手になつたのも同様生ですが(ろ)及(は)は例外です。

(ろ)は中四手ですが、黒より眼を作らんとしてイに打つも中三手になり第八圖の如く白より一子中手を打たれると死す、つまりこの井桁四目は先手にいつても後手にいつても眼が二つない、即ち死です。

(は)は同様中四手ですが黒より一に打てば三眼出来て生となり、白より一と中手を

第九圖



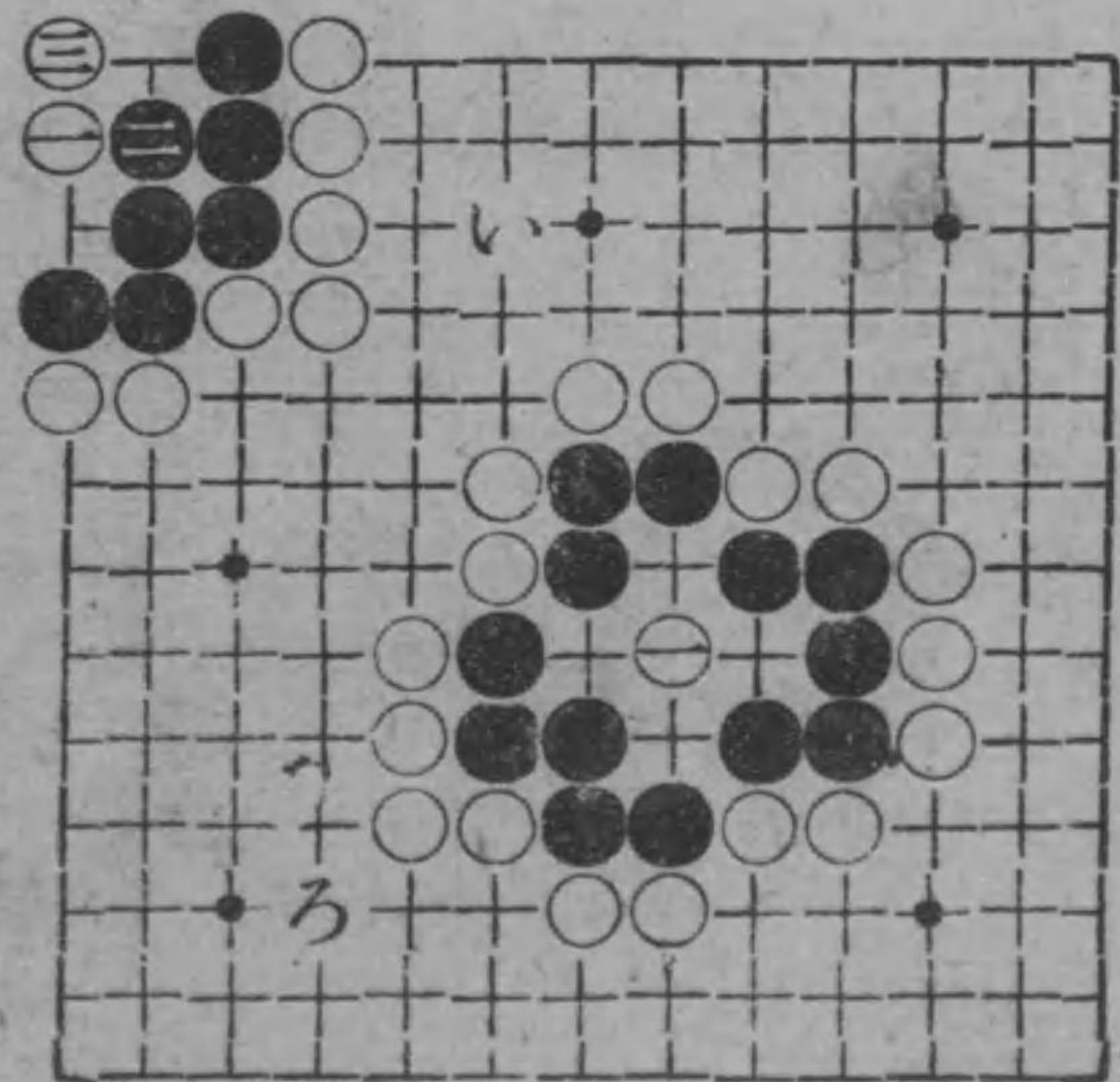
打たれると死となる。

中目五つが直線に並んでゐる時及びカギの手になつてゐる時は第九圖と同様に完全なる生でありますが、單に五つといふても次の如き例外があります。

第十圖——(い)の中目五手の黒は白にと申手を入れられると死となる、何となれば黒が二と應ずれば白は三と打ち結局黒は一眼といふことになるからである、しかしこれも黒の方から先手に白一の所に打てば儲なる生である。

第十圖——(ろ)に於ても白に申手を一と打たれると如何にしても二眼を持つことが不可能です。

第十圖

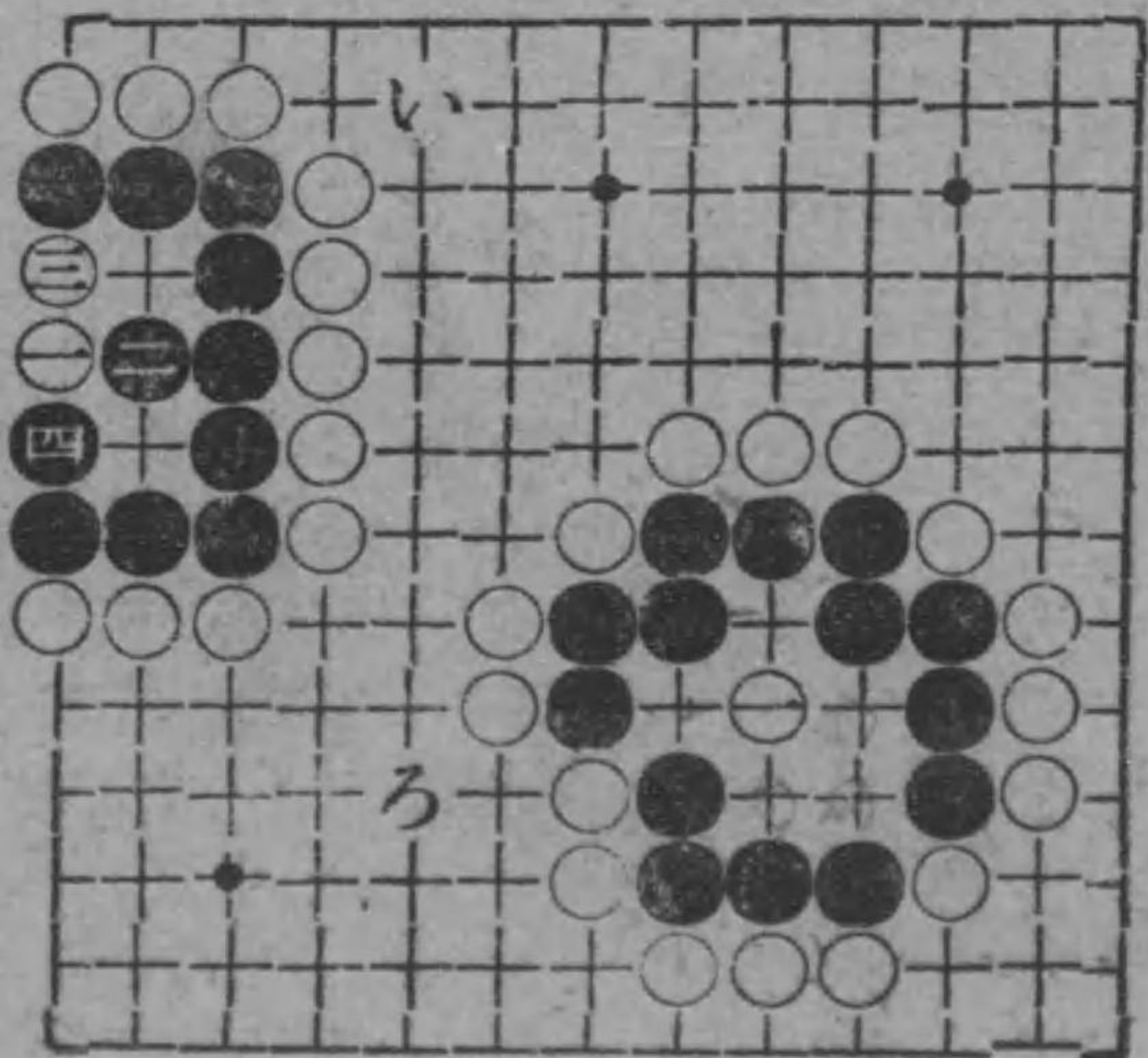


第十一圖——中目六手の場合も直線になつてゐる時及びカギの手に並んでゐる時は勿論生であります。(い)の如きも白一と打ち込みあるとき黒二と應ずれば白三と打ち來るとも黒は四と打ちて完全な眼となり生であります。

(ろ)は例外で白にと申手に來られると死となる、それで黒は此場合先手に一目入れて生とすることを忘れてはならぬ。

猶中目七手や七手以上はどんな形態をしてゐても、今迄の様に周囲の壁に缺陷がなければ皆生です、そして此中目は所謂占領地であり、此多少が勝敗になるのです、而して中目が三十手、三十五手といふ様に澤

第十一圖

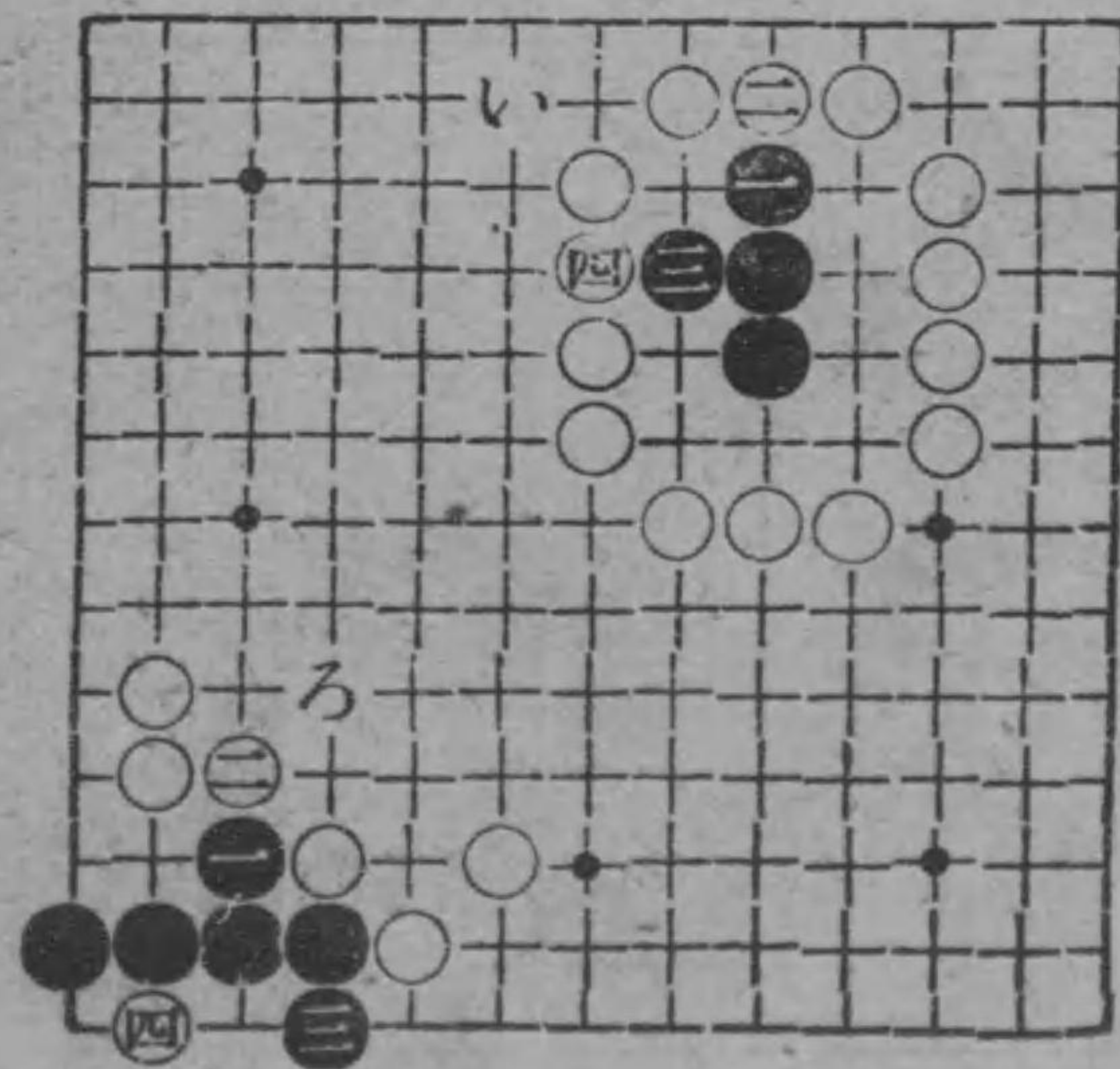


山になれば敵に侵入されて生られ味方の領地を奪取される結果となる、此點は特に重要なる所で充分了解を願ひます。

今迄は完全に周圍が出来てゐるものとして中のみについて説いたが第十二圖(い)の黒二目は周圍が少し空いて遠巻にされてゐる此黒石は如何といふに、一と延びれば二と止められ、三と延びても四と約えられ、逃げ場もなく又中で二眼を持つことが不可能である、即ち死である。

(ろ)に於ても黒四子は一に出でんとて二に約えられ、三と打ちて眼を保たんとし、ても白に中手に四と打ち込まれ結局生となすことが出来ないのである。

第十二圖

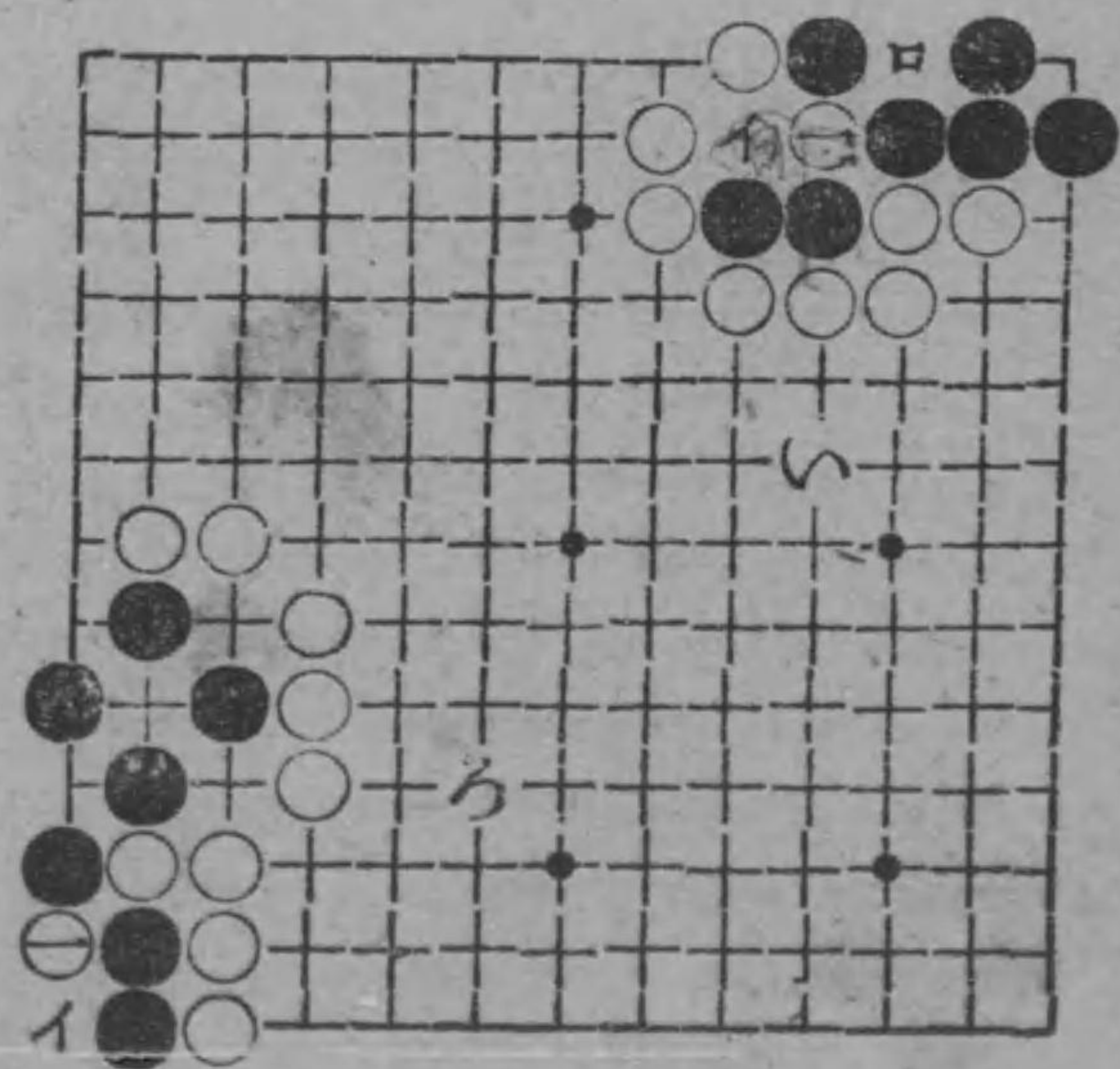


第十三圖——黑白が(い)の状態に在る時

白先手に一と打ち黒二に打ちて提れば、黒三目(イ)に打ちし一目を加へ)がアタリとなり白は再び一の場所に入れて今度は黒の三目を提ることになる、此を「撲がえ」といふ(一目打つて提らしておいて後にかえてとるからである)、黒は撲がえにされると又口の所が缺眼となり終に死となる、依て黒としては此場合先手に白一の所に打ち込みて口を完全な一眼とすれば他に一眼あるから生となるなり。

(ろ)も同様にて一に黒先手に打てば完全なる生なれども、白に先に來られ一と打たれると撲がえとなり黒全部死すべし。

第十三圖

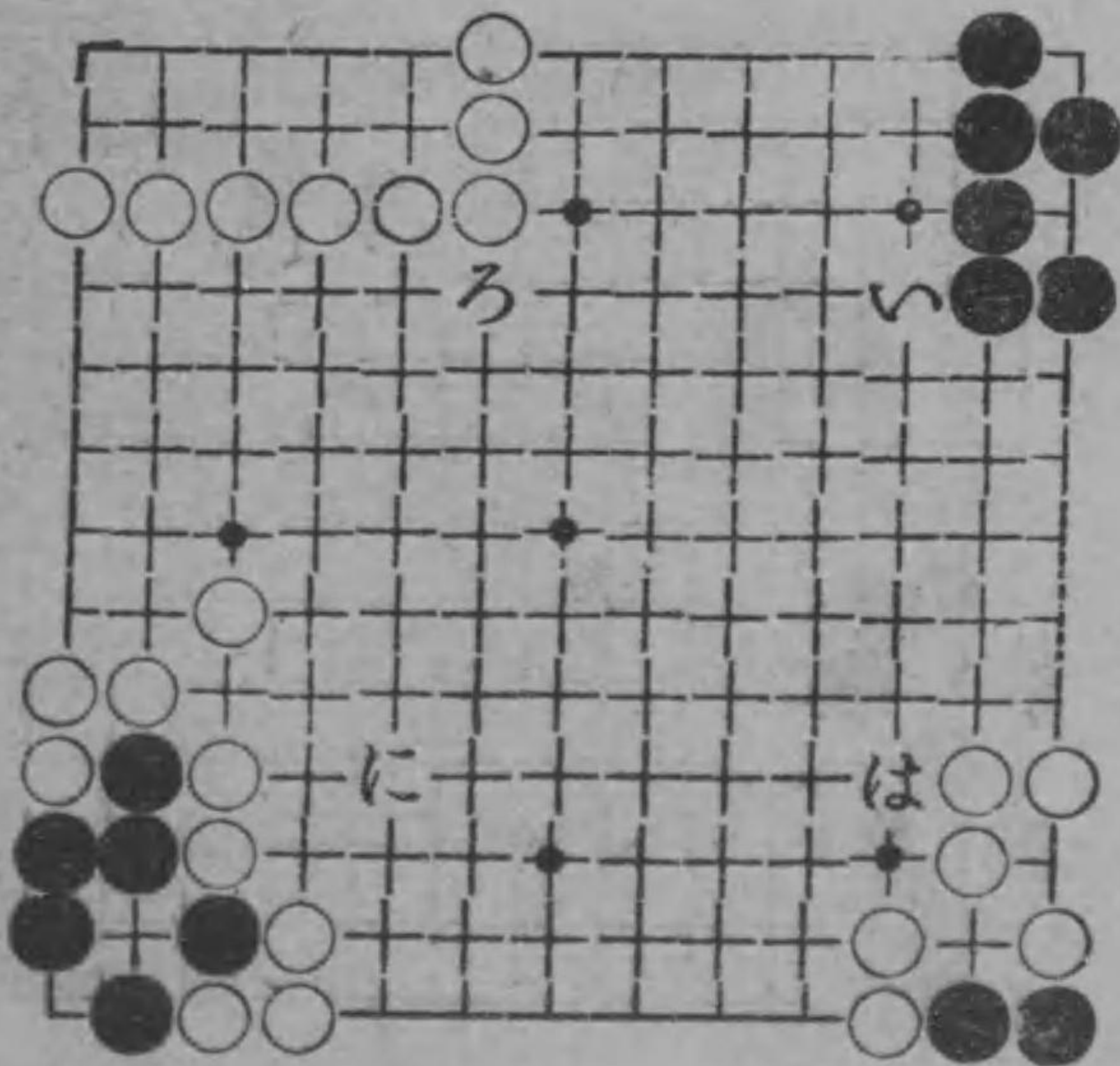


第三 地提り

敵に侵入されたり或は包圍されて殺され
 この決してない空地を「地」と稱す（廣い
 意味で單に包圍された空地を地といふ人も
 ある）、第二「石の生死」に於ける生の石が持
 つ二眼及中目何手と呼んだ空地で生である
 ものは此處にいふ所謂地であります。

猶茲に例を擧げんに第十四圖（に）は黒二
 目の地、（ろ）は白十目の地なり、（は）は黒
 二目死んでゐるから、白は四目の地と二目
 のハマ（殺して取りし石をいふ）あり、（に）
 にては黒六目は死であるから白の占領地と
 なり白は六目のハマと八目の地を有す。

第十四圖

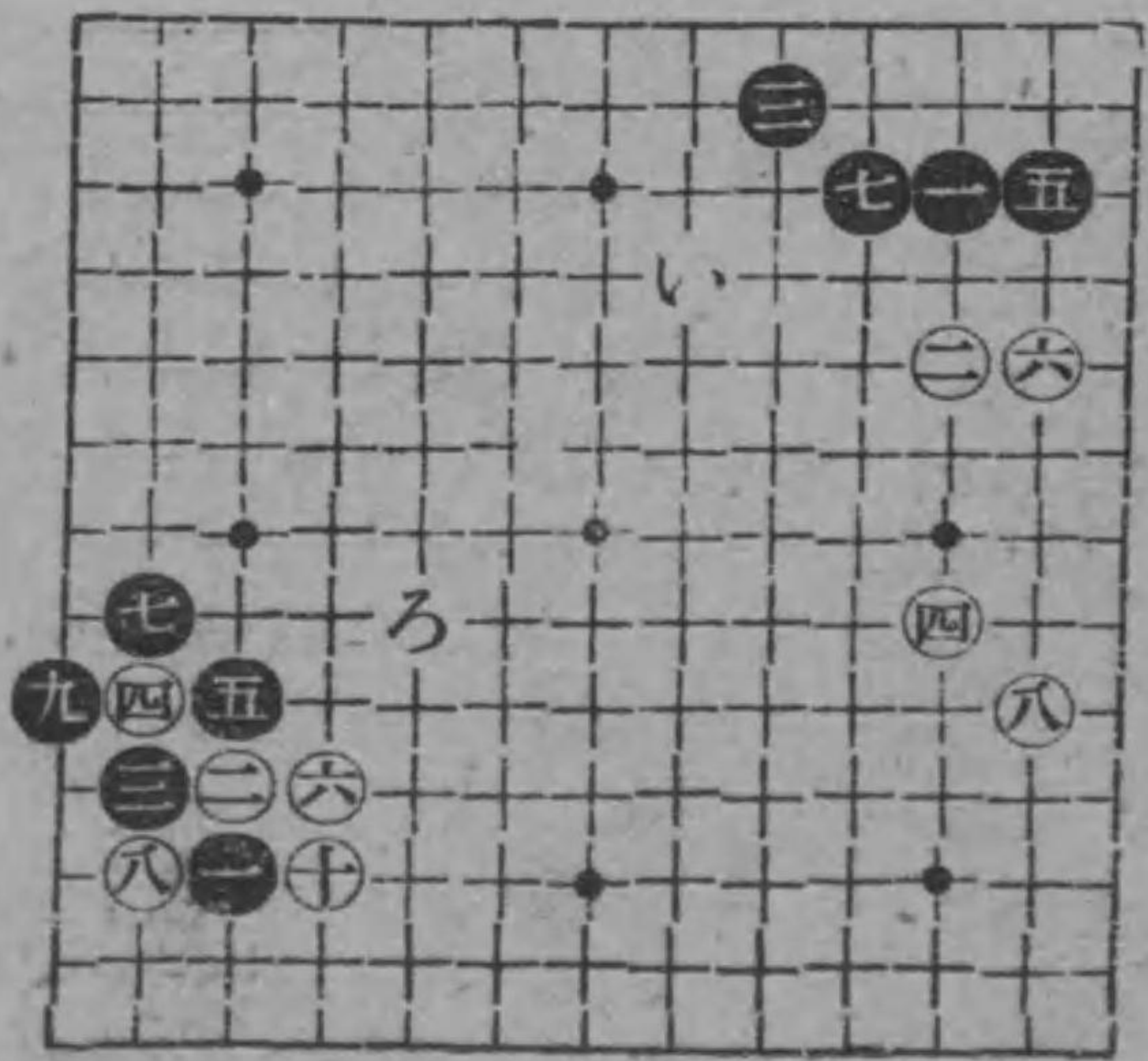


地提りは即ち地を提るのを目的として打
 つのであります。

第十五圖——（い）に於て観る如く黒は專
 ら隅角にて空地（地）を獲得せん目的にて打
 ち白は邊の所に地を占領（提ること）せんと
 して打つてゐますが、

（ろ）は白黒共に始めから接戦して敵の石
 を擒にせん目的を以て打つてゐるのである
 敵の石を提ることは一面から云へば地を提
 ることになるから畢竟碁は地を提り其の廣
 狭多少を争ふものなりといふことになり第
 二編の始めに下した定義に歸納されること
 になります。

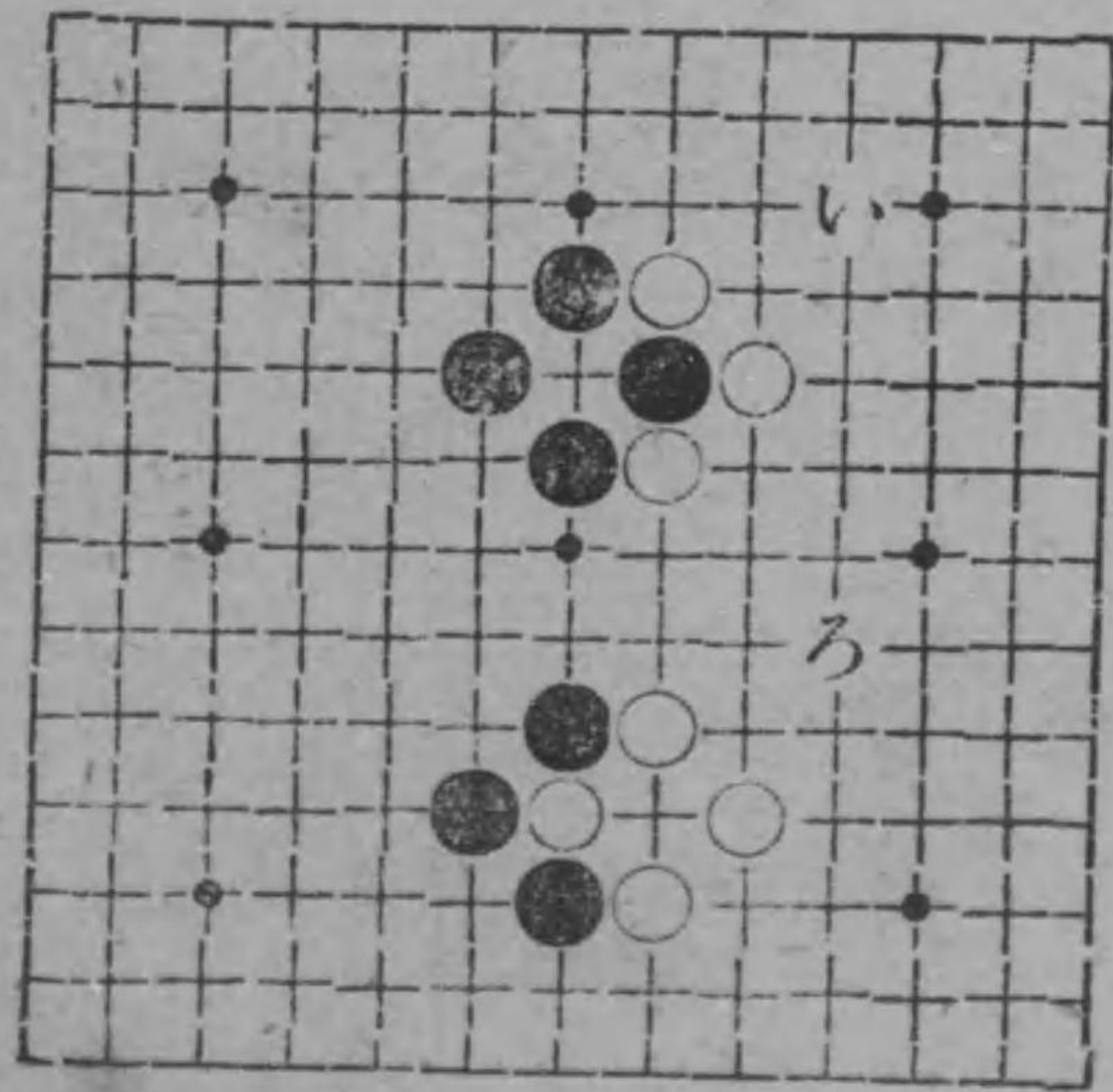
第十五圖



第四劫

第十六圖——(い)にて白は黒の一子を四目殺しにして提ると(ろ)の如くなる、黒も亦白の一子を提ると(い)の如くなる、即ち(い)(ろ)はいつまでも際限なく續く、此状態を指して劫といふ、それで碁に於ては此場合白も黒も一手他方面を打つてから取り返す法則になつてゐる、此一手他方面に打つ手、手抜きの手を劫立といひ、敵の急所をつくことが必要である、それでないと敵に一目入れられ劫は敗となるのである。劫は必ず一目に限り奪ひ合ふことですが周囲の形はかゝる簡單なるものではなく複

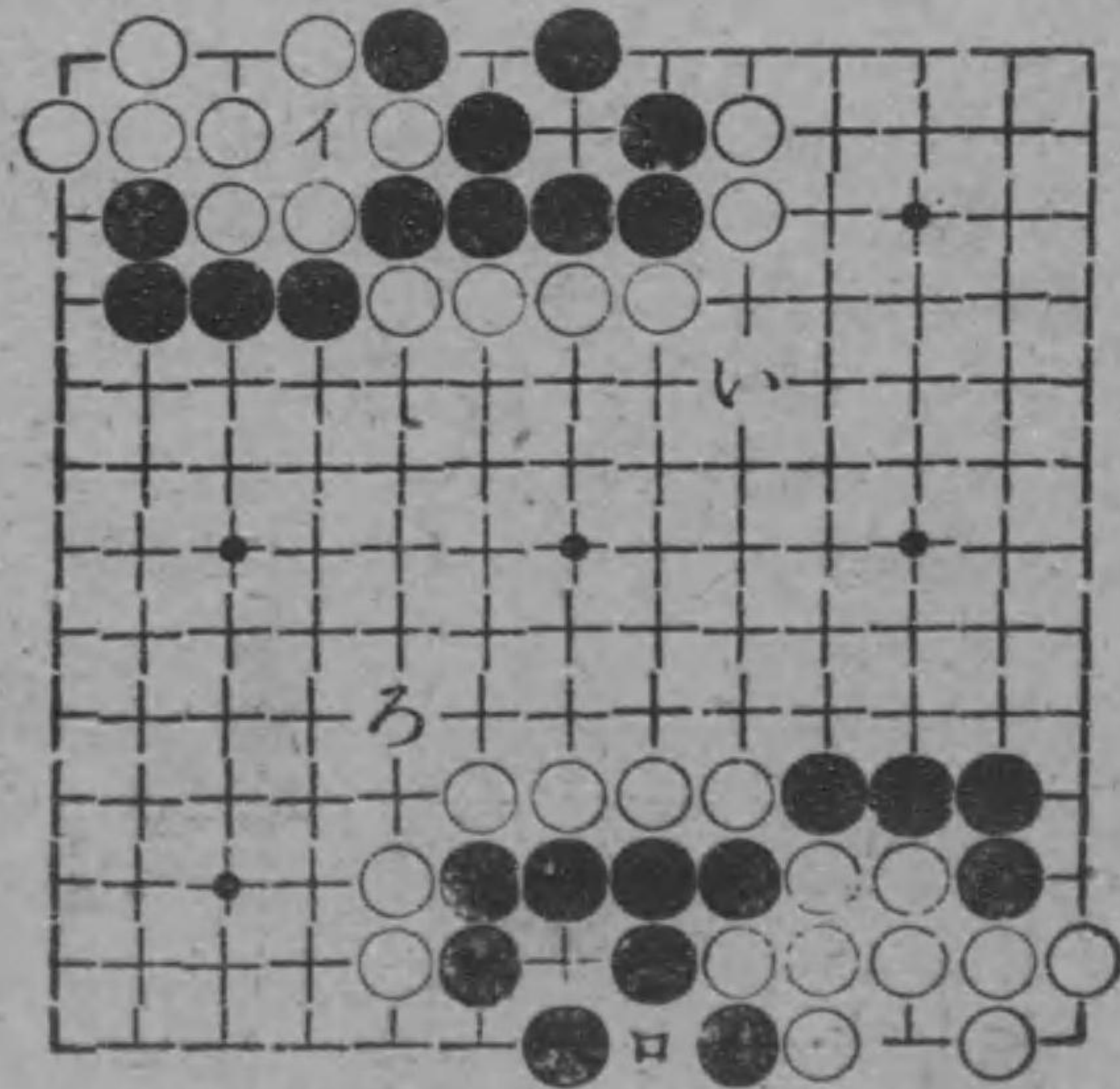
第十六圖



雑して表はれることが多いものです。

第十七圖——(い)にて黒が先手にイと取りし時白は劫立をせねばならぬ、此劫は白八目が死ぬか黒八目が死ぬかの大切な劫であるから、白は此處の勝敗より大きい勝敗に關する所にかゝり、黒がのつびならぬからついできて一手應ずる様な箇所に打たねばならぬ、黒が應じたとき白はイの黒を取る、次に黒も亦劫立をなし、劫立の種(劫種ともいふ)が盡きた方が此箇所は敗となり、眼がなくなるから全部死ぬのである。(ろ)は白が劫に勝ちイに打ちて完全なる生となり黒は口が缺眼だから死となつた形を示したものである(向は違ふが全く同圖)

第十七圖

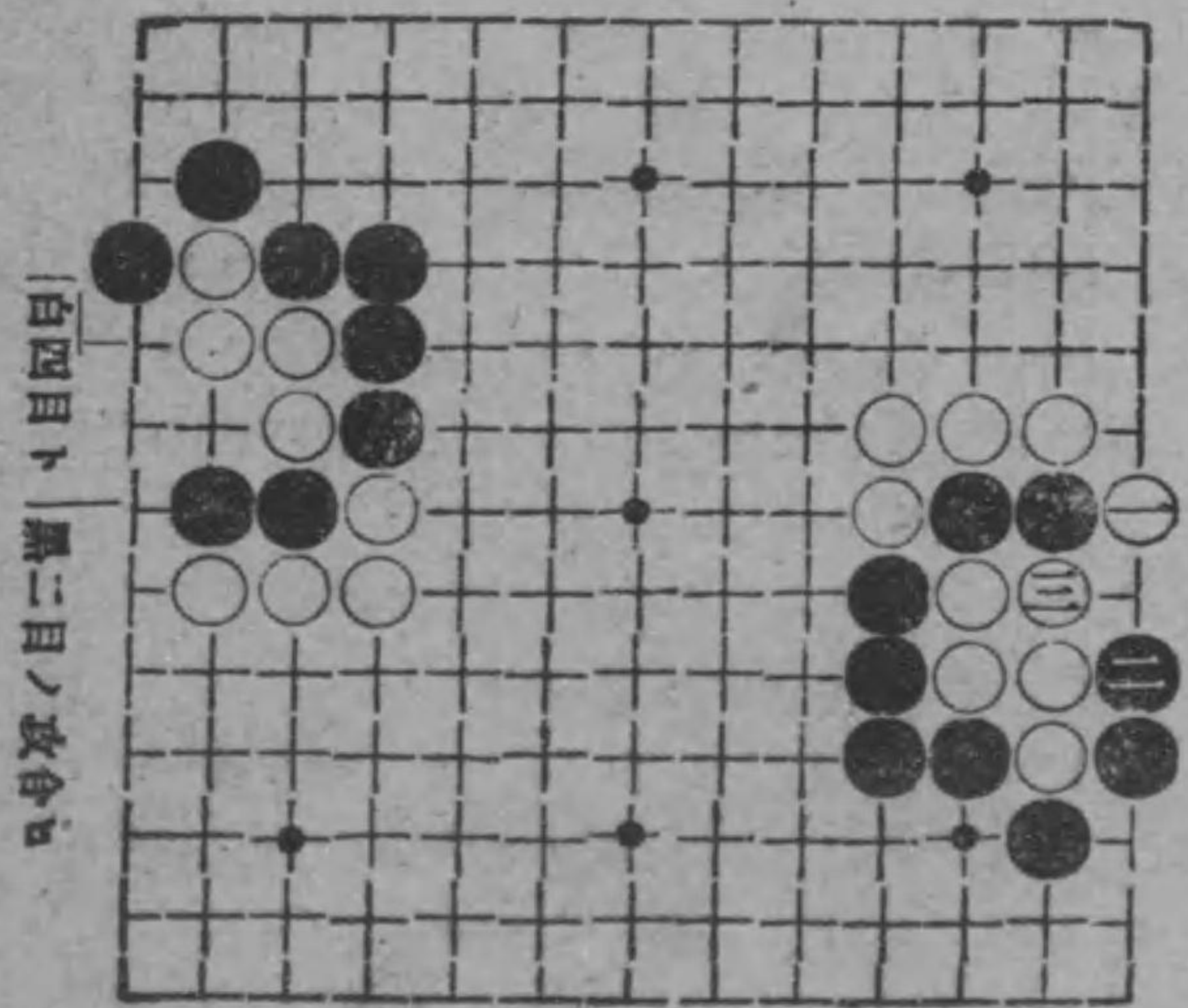


第五 攻合ひ

前圖第十七圖の劫の争ひより白黒の二者孰れか提るか提らるゝかまで秘術を盡して戦ふを攻合ひといふ、單に白黒對立してゐるばかりでなく白幾手黒幾手と、何れか將に奪取されんとする危険なる状態を指すのである。

第十八圖は黒二目と白四目との攻合ひを示すものにて(二つの圖は向が違ふだけで全く同じ石立です)、白も黒も二手づゝなり白先手とすれば一に打ち黒二と来る時三に打ち黒二目を提り白の勝となる、黒先手なれば白三の所へ打てば勝となる事明也。

第十八圖

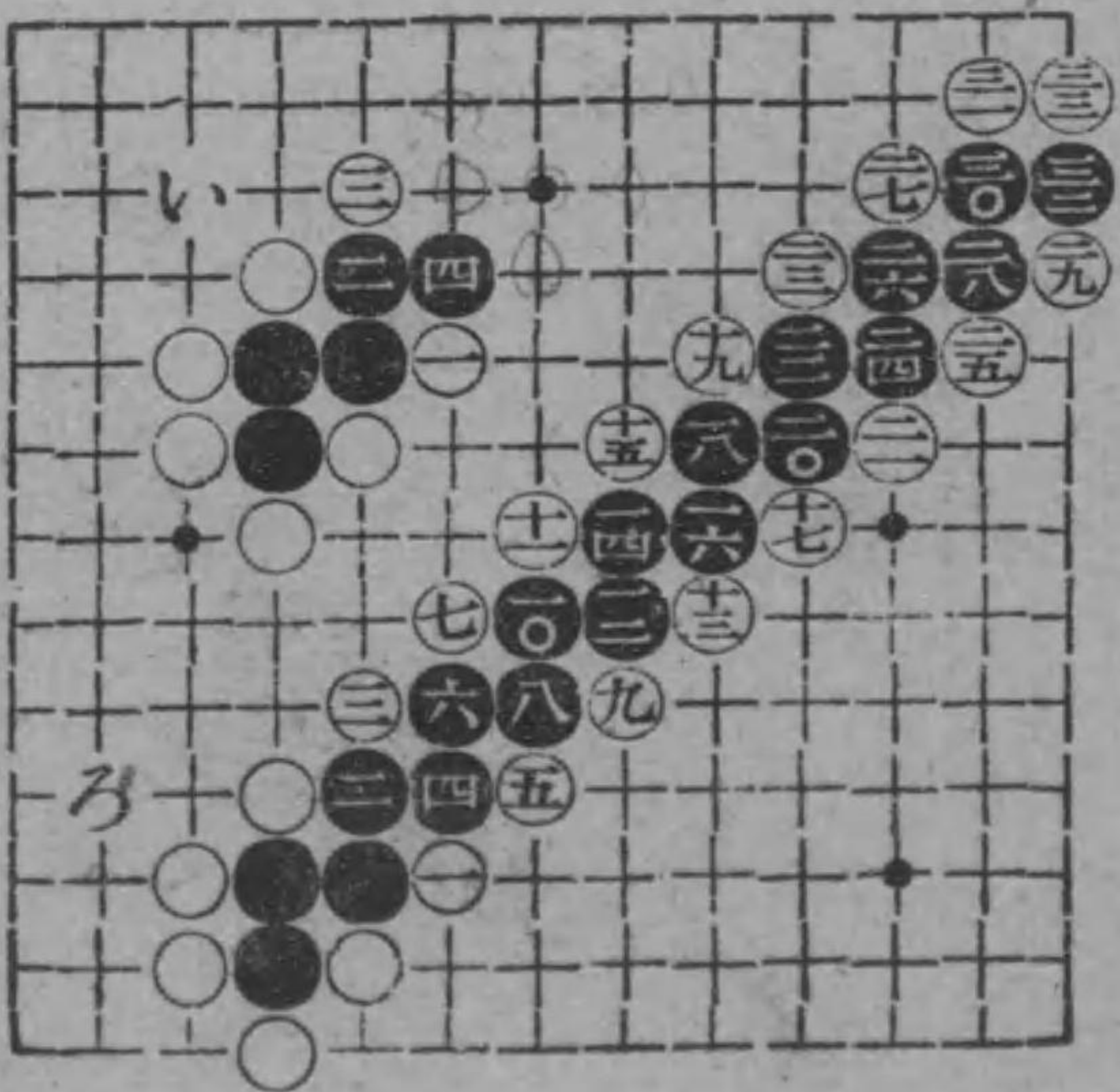


白四目、黒二目ノ攻合ひ

第六 征

第十九圖——(い)黒の子を包圍して提らんために白は一と打つとき黒は二と打つて活路を求むるより外に手段がない、此時白三と約え黒四と再び活路を求むるも白は一の手と同様に追ひ来るべし、即ち(ろ)圖の如くなり、盤の端に至れば遂に黒は全部抜き提られます、此状態を指して征といふ。此征に出遇ひて(ろ)の如く澤山の石を提られては實戦の場合に大敗を招くものでありますから、甚大の注意を拂はねばならぬ征に出遇ふ(征に懸けられるともいふ)事が分れば早く見切ることが肝要である。

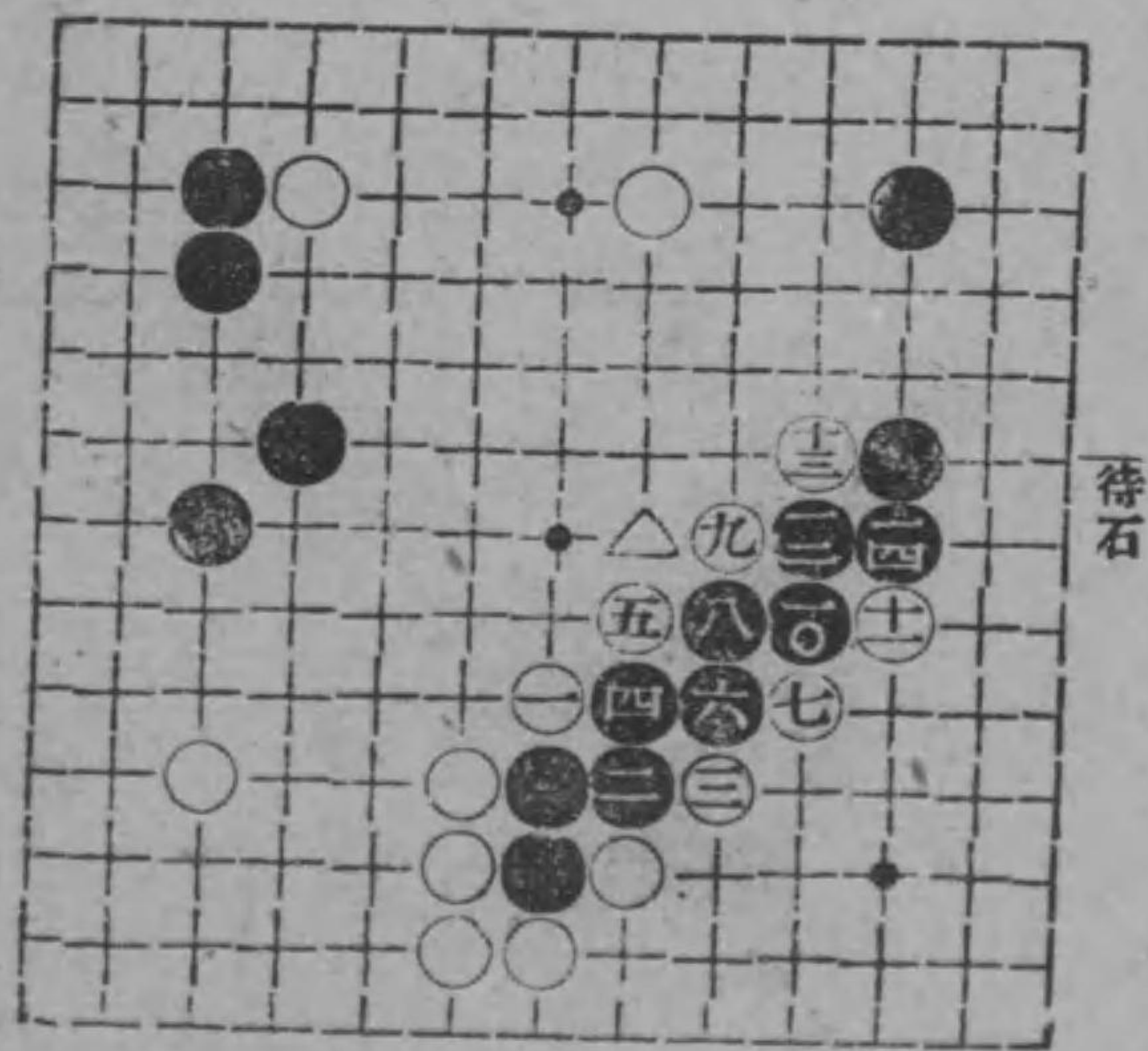
第十九圖



前の如く征に懸けられたる時は必ず提らるゝかといふに然るに非ず、第二十圖の如く待石といひて白が征に懸けて追ふて行く先に黒石が存在すれば黒は此待石と連絡が出来て助かる、是を「征クズレ」といふ。征クズレになりし場合は反對に白の方が總クズレになる、例へば黒は△印の處に一目打ちたりと假定せんに白の五及九が同時にアタリとなり黒は此等防禦の方法なき箇所を澤山に見出すべし。

實戦に於ては所々に敵味方の石が散在してゐる場合が多いから、征に懸けて提るか征クズレになるかは充分吟味して手を下さねばならぬ。

第二十圖



待石

第七門

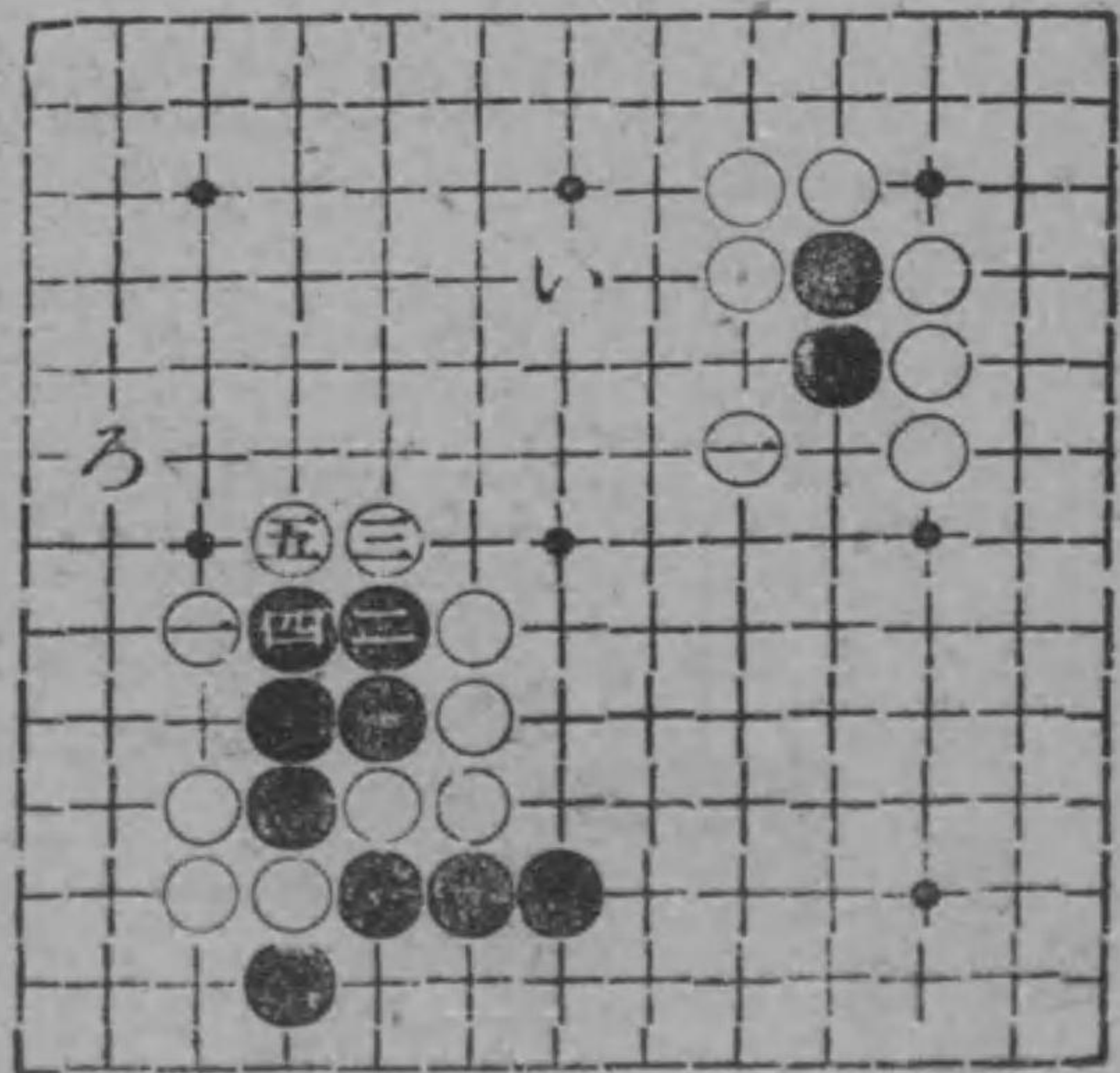
門はハカスともアシダとも讀む、其意味は敵の石の活路をふさぎ恰も門を閉ぢたる如くなるのである、大門小門の別あり、第二十圖(い)は小門、(ろ)は大門である。

(い)に於て白一は門に懸けたので、此がため黒は横に出ても下に出ても出鼻を約えられ逃げる手段はない。

(ろ)は黒二目が大門に懸けられた所で、黒は二と打つも三と約えられ、四と打つも五と止められ遂に提られてしまふ。

此門及び前圖の征は實戦上屢起る手にて石を殺す上に頗る功妙なる手である。

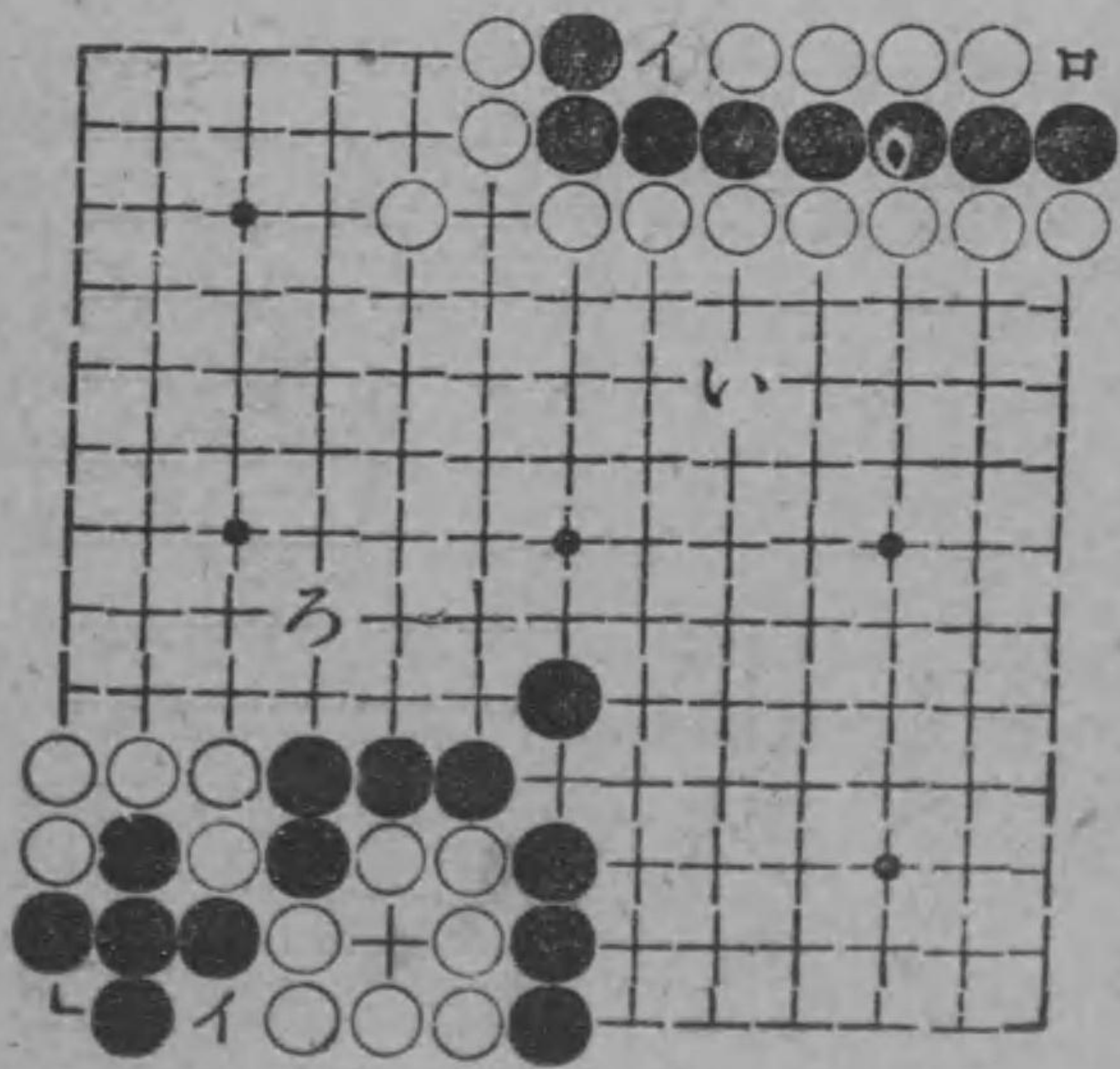
第二十一圖



第八 持

第二十二圖

第二十二圖——(い)にて白よりイに打てば黒は口に打ち込み白五目を抜き提り、黒は中目五目になるから完全なる生となる。又若し黒先手にイに打ち入れたりとせば、白は口に打ちて黒の九目を提り上ぐることもなる、即ち此場合黒より打つも白より打つも先手に打ちたる方が殺されることになるから互に手を下さずニラミアヒをなしてゐる、此状態を指して持といひ此場所にては勝敗なく計算外にする法則になつてゐる(ろ)圖も同様先手にイに打ちたる方負けなれば持として最後まで放任すべきもの也



第三篇 圍碁に用ふる熟語

熟語の必要なこと

第二編に於て圍碁の大要と其原理を説明したが、其中題目になつてゐるものは言ふまでもないが、左記圍碁特有の語(熟語)に就ても説いて居いたから總括して茲に示さう。

- 四つ目提り——石の生——石の死——眼——缺眼——中手——撲
- 地——地提り——劫——劫立——攻合ひ——征——征クズレ
- 門——持——アタリ
- 粘——切斷——盤——追落し——駄目——幹——ノゾキ——桂馬
- トビ——綽——尖——立——下——約(壓)

而して圍碁の實戦上未だ是だけにては充分なりと言ふを得ず、以下解説する熟語に關しても篤と研究する必要あるべし。

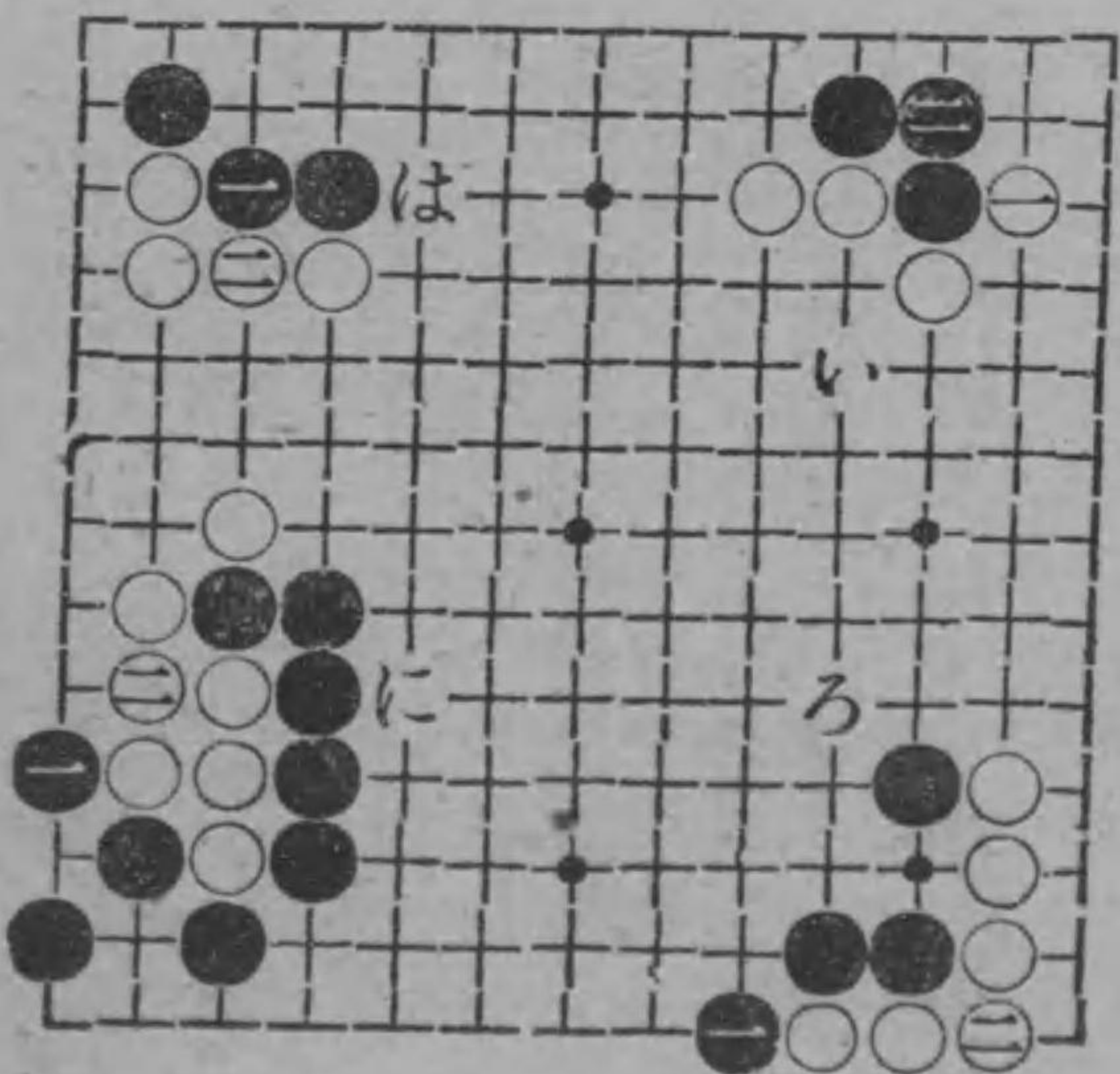
一、粘

粘とは味方の石が提られんとする時或は味方の石を連結せんが爲めに他の味方の石に接続するをいふ。

第二十三圖——(い)にて黒は一目殺されるを防ぐ爲め二に打ち(ろ)ではやはりアタリになつたから白は二と打ちて二目と三目を連結したり。

(は)では黒一と来りし時白は断ら切らせまいと二と打ちて二目と一目を連結した。(に)にては白四目アタリとなつたから餘儀なく二と打ちたるなり。
是等二の打手は皆粘或は粘手を稱す。

第二十三圖



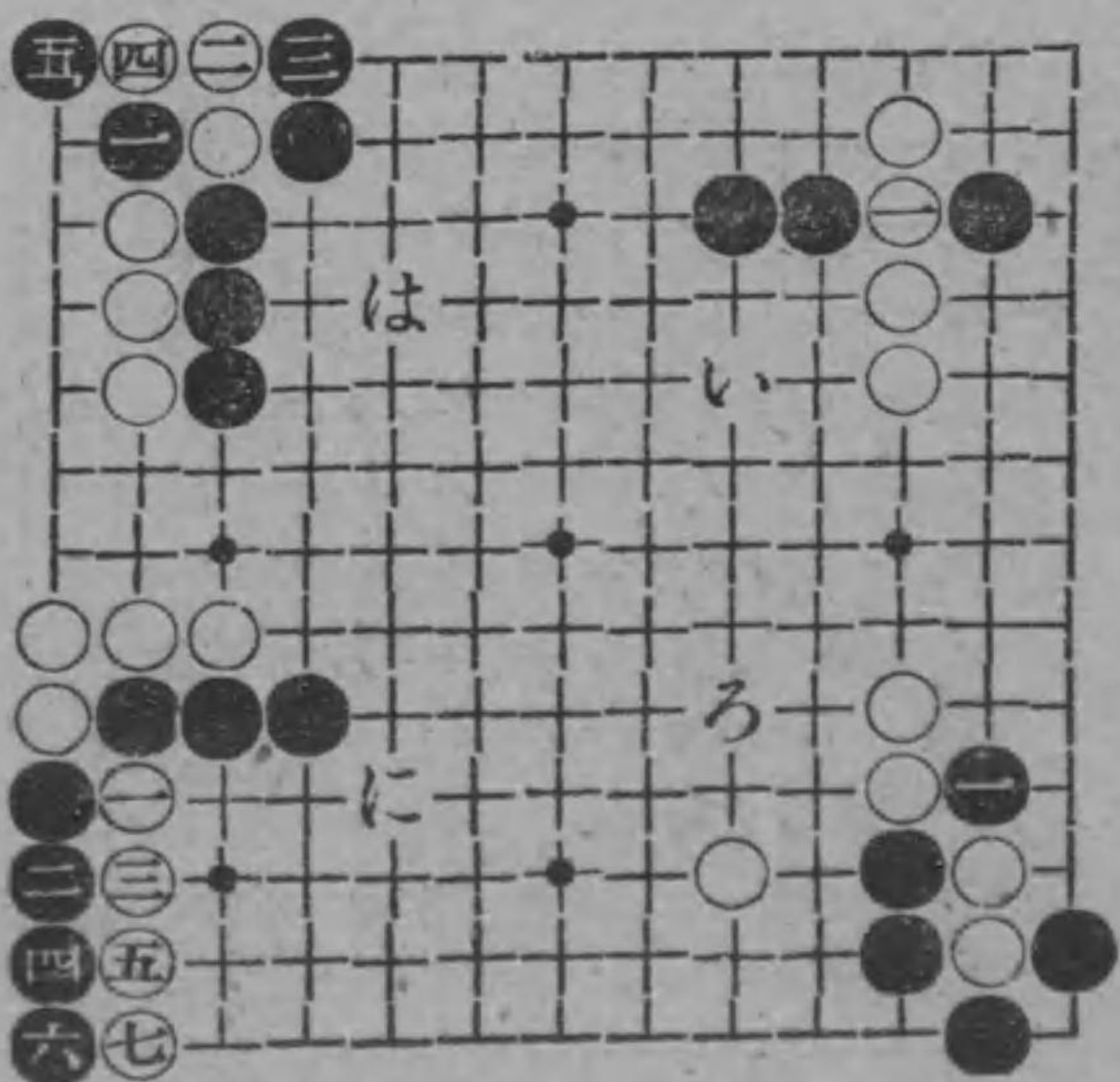
二、切(断)

第二十四圖——(い)にて白が一と打てば黒二目と一目は連絡を断たるべく、是と反對に黒が一に入ると白は離れ離れとなる此の如く敵の石の連絡を断つを切(断ともかく)といふ。

(ろ)黒は一に切りて白二目を提ることが出来る。

(は)黒は一に切りて白の一目を提り得べし、若し白二と逃ぐれば黒は三と追ひ白四の時五と打ちて三目を抜くことが出来る。(に)の状態にある黒一目も白に一と切りて逃ぐるによしなし、皆重要なる實例也。

第二十四圖

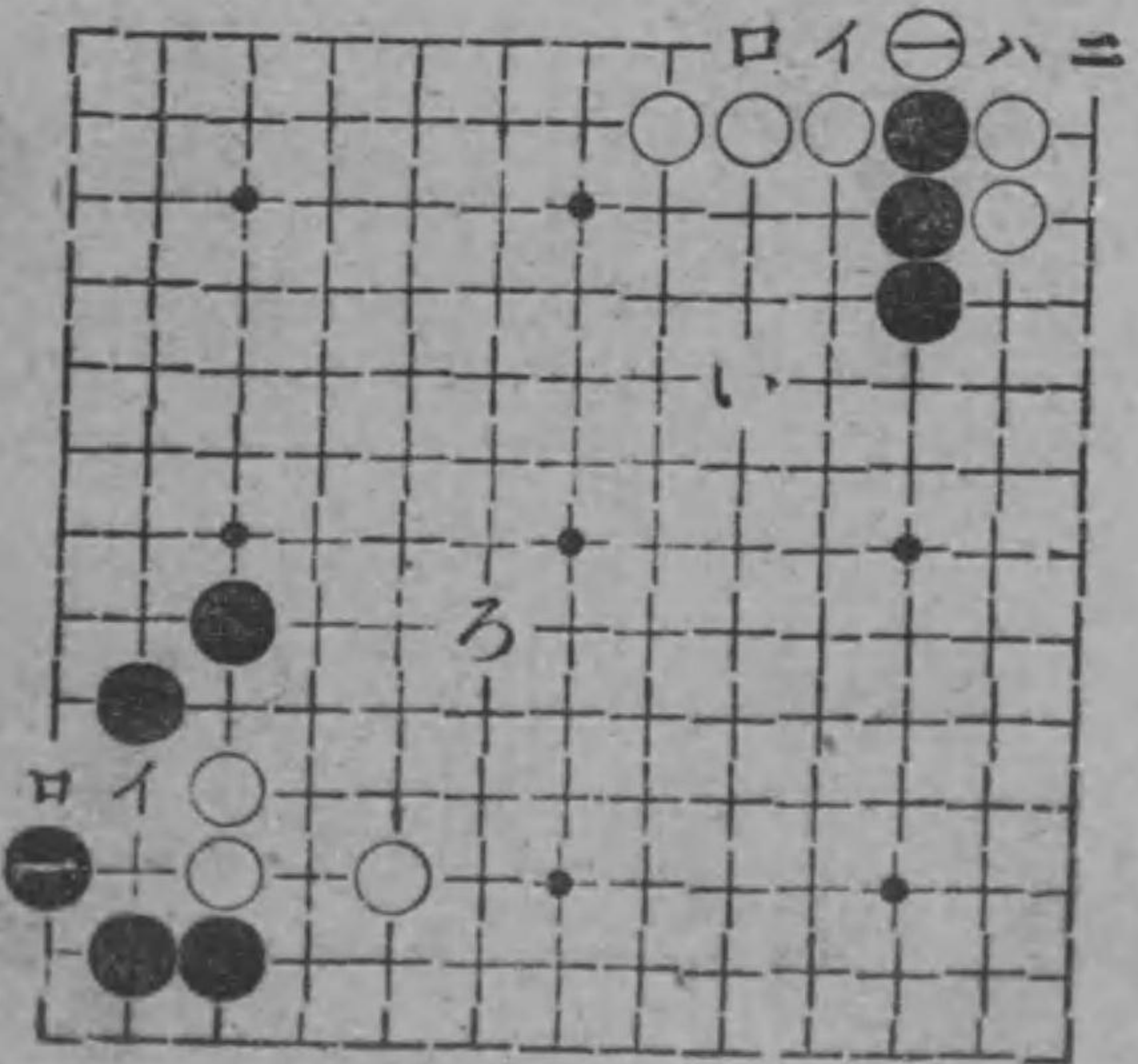


三、盤

第二十五圖——(い)白一の手を盤と呼ぶ是がため左右の白二目と三目との連絡がつく、何となれば、黒がイに切れば白は直に口に打ちて抜き取り、ハに打つも同様ニに殺し得べし、而して先に掲げたる粘の手と異なる點は粘は直線上に全く密接して(一目の間隔を置かない)連絡するのであるが盤は斜にか或は一目なり二目なり間隔がある場合にいふのである。

(ろ)に於ても黒一の手は黒の二目と二目とを完全に連結したるものといつて宜し、白イに来るとも口に打てばよい。

第二十五圖



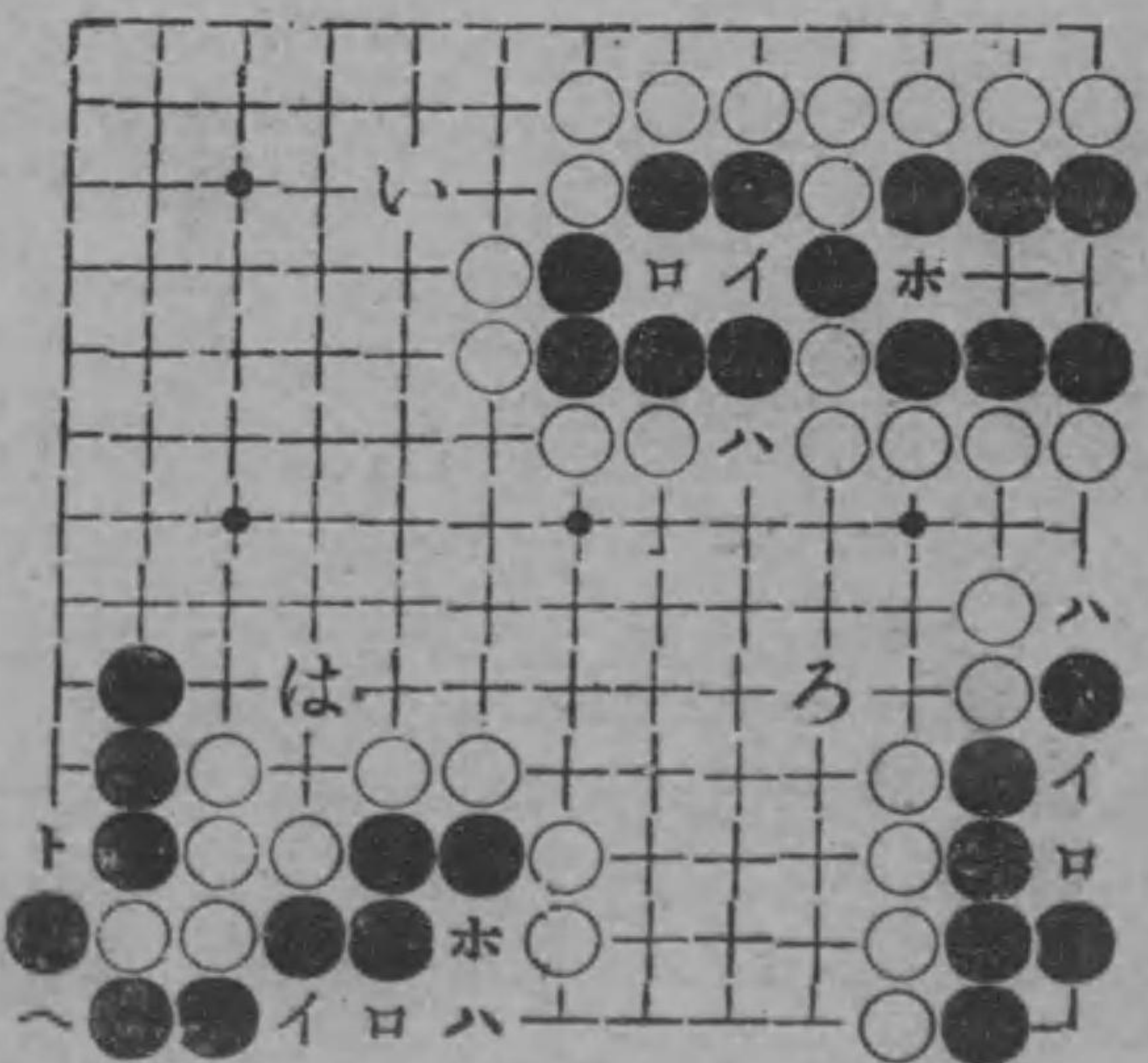
四、追落し

第二十六圖——(い)黒イの處に粘ぎ置けば黒は完全なる生なれど、白より先手にイと打ち込まれると黒口に提りし時白ハと押せば黒はアタリになりイに粘がなければならぬ、粘ぐと亦丁度ホの處がアタリになり結局全部屠(みなごろし)られる、此の如く追ひかけ追ひかけ提るを追落しと名ける。

(ろ)にて白先手にイに打ち込み黒口と提り、白ハと打ち黒イと粘れば再びアタリとなり黒全部殺されてしまふ、此場合黒としてはイに打らて一眼を作る事肝要なり。

(は)も白に先手にイと来られ追落さる。

第二十六圖



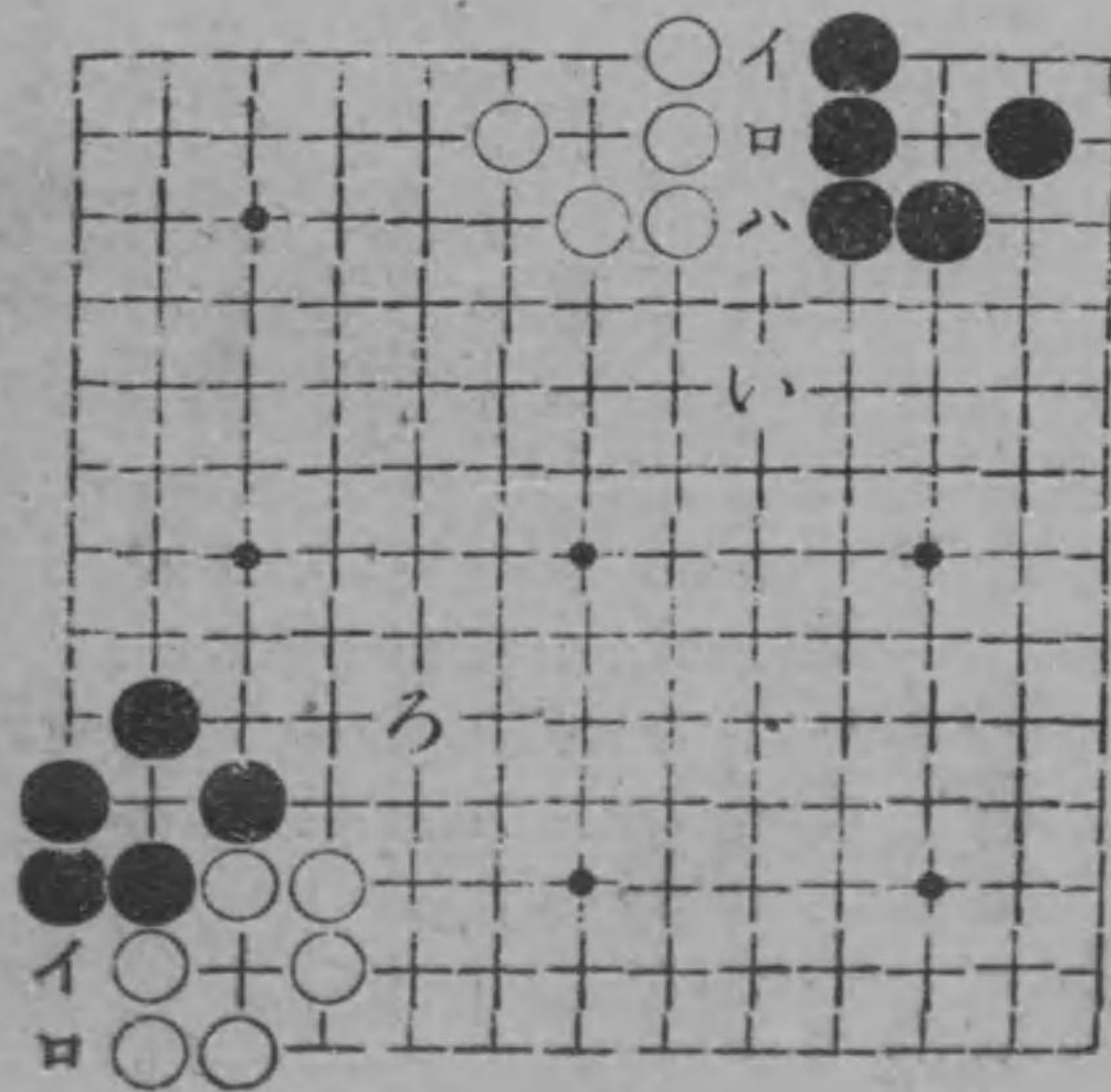
五、駄目

駄目とは白から打ちても黒から打ちても地を造る目的もなく、又生死にも關係せない空地をいふのである。

第二十七圖——(い)に於てイロハの三箇所は黒から打ちても白から打ちても一目の地も出来る見込みはない、即ちイロハは三つの駄目であつて、實戦上随分あちこちに出来るものであつて是は一局の終りに地の多少を計算するとき双方からウメます。

(ろ)に於ては白が先手にイに行けば口の所に一目白の地が造られるが、黒が先手にイにいつたとすれば、口は駄目である。

第二十七圖



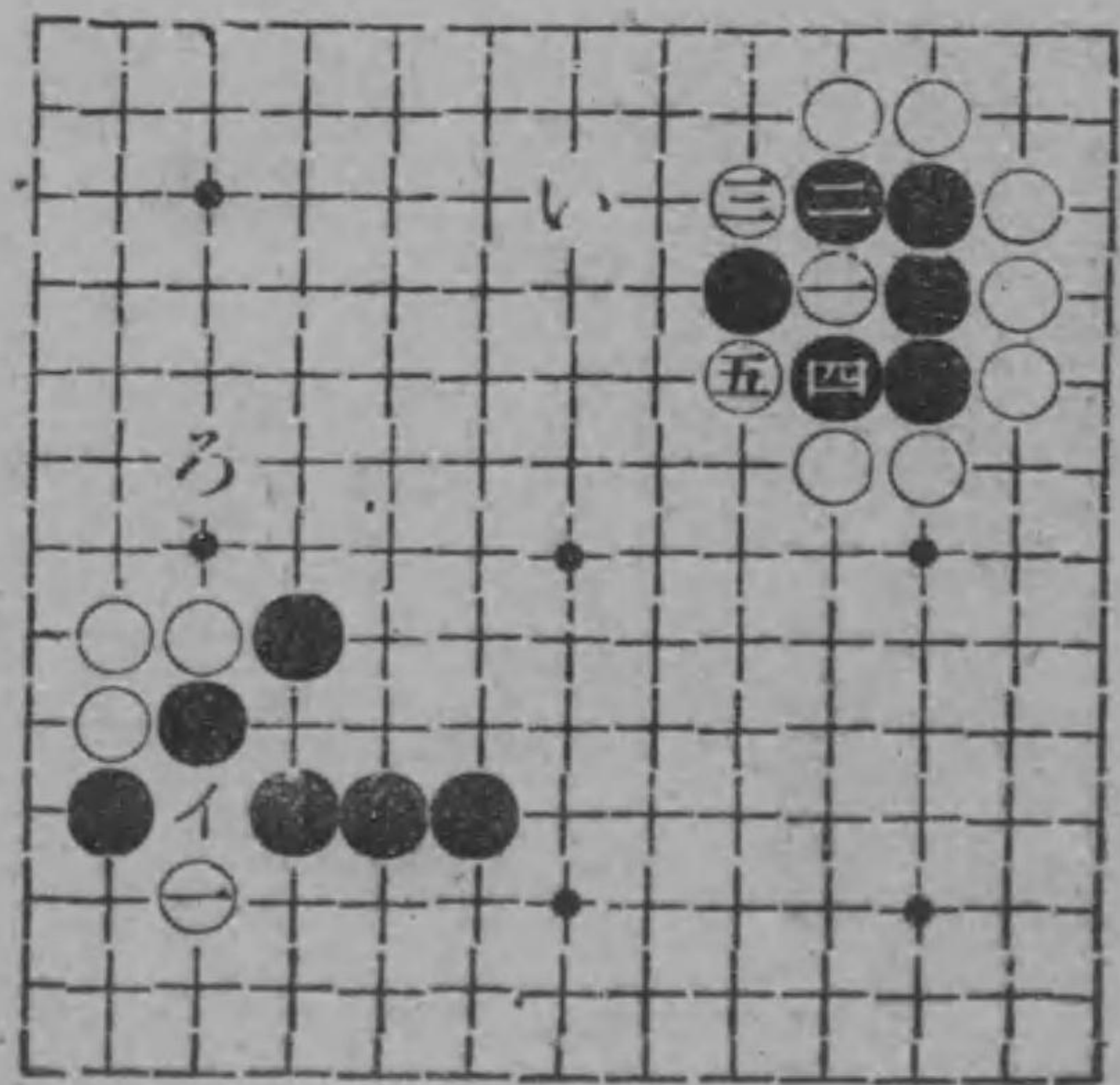
六、幹

幹とは文字の示す如く敵の石の間へクサビを打ち込むことで、二十八圖(い)の白一がそれである、是が爲め黒三目は致命傷を受け逃ぐる手段なし、何となれば、黒二と出でし時は白に三と應えられ、四に打ちて白一を提るとも白に五と追撃されると一の所がアタリとなり此處を粘ぐも亦アタリとなり、所謂追落しとなるのである。

七、ノゾキ

第二十八圖——(ろ)の白一は黒の弱點イを覗ふ姿勢を示す、此手をノゾキと呼ぶ。

第二十八圖



八、桂馬

第二十九圖——(い)星の上(うへ)に打(う)つてある黒(くろ)に對(たい)し黒(くろ)一(いち)は小桂馬(せうけいま)に打(う)つたといひ、白(しろ)二(に)は星(せい)の上(うへ)の黒(くろ)に對(たい)し大桂馬(おほいけいま)に懸(か)つたといふ桂馬(けいま)は又飛(また)の字(じ)を用(もち)ふる人(ひと)あり、大桂馬(おほいけいま)小桂馬(せうけいま)及(およ)び大々桂馬(たいたいけいま)(白三)の別(べつ)がある。

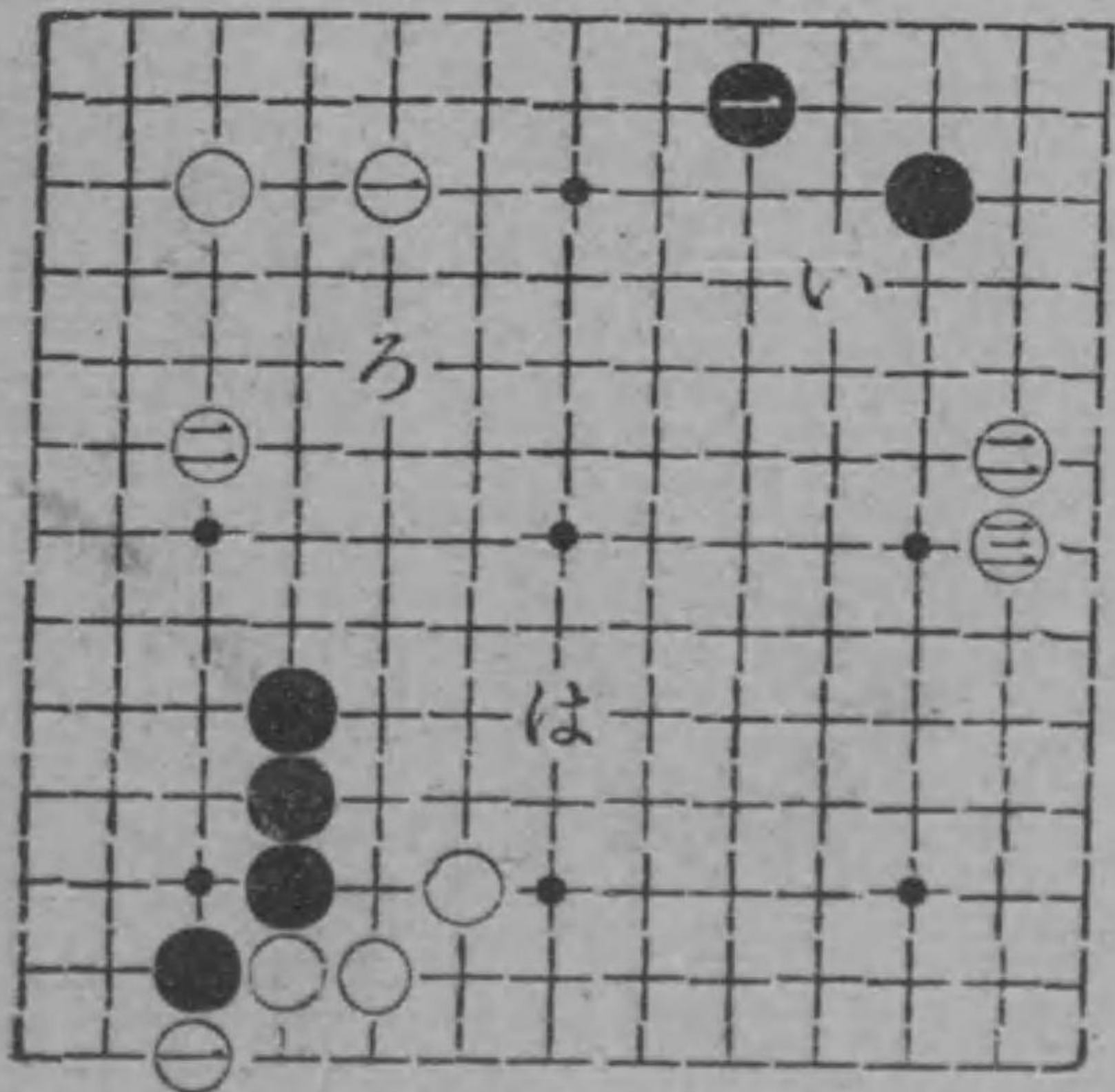
九、トビ。

(ろ)圖——星(せい)の上(うへ)の白(しろ)に對(たい)して白(しろ)一(いち)間(けん)トビ(とび)に白(しろ)二(に)は二間(にけん)トビ(とび)に打(う)つたのである

一〇、綽。

(は)白(しろ)一(いち)の如(ごと)きを綽(はね)といふ。

第二十九圖



一一、尖。

第三十圖——(い)の黒(くろ)一(いち)の如(ごと)く打(う)つ手(て)を尖(とすみ)といふ。

一二、立。

(ろ)圖(ず)の様(よう)に中心(ちゆうしん)に向(む)ひ真直(まっす)に(縦(たて)に)打(う)つを立(たち)と名(な)づける。

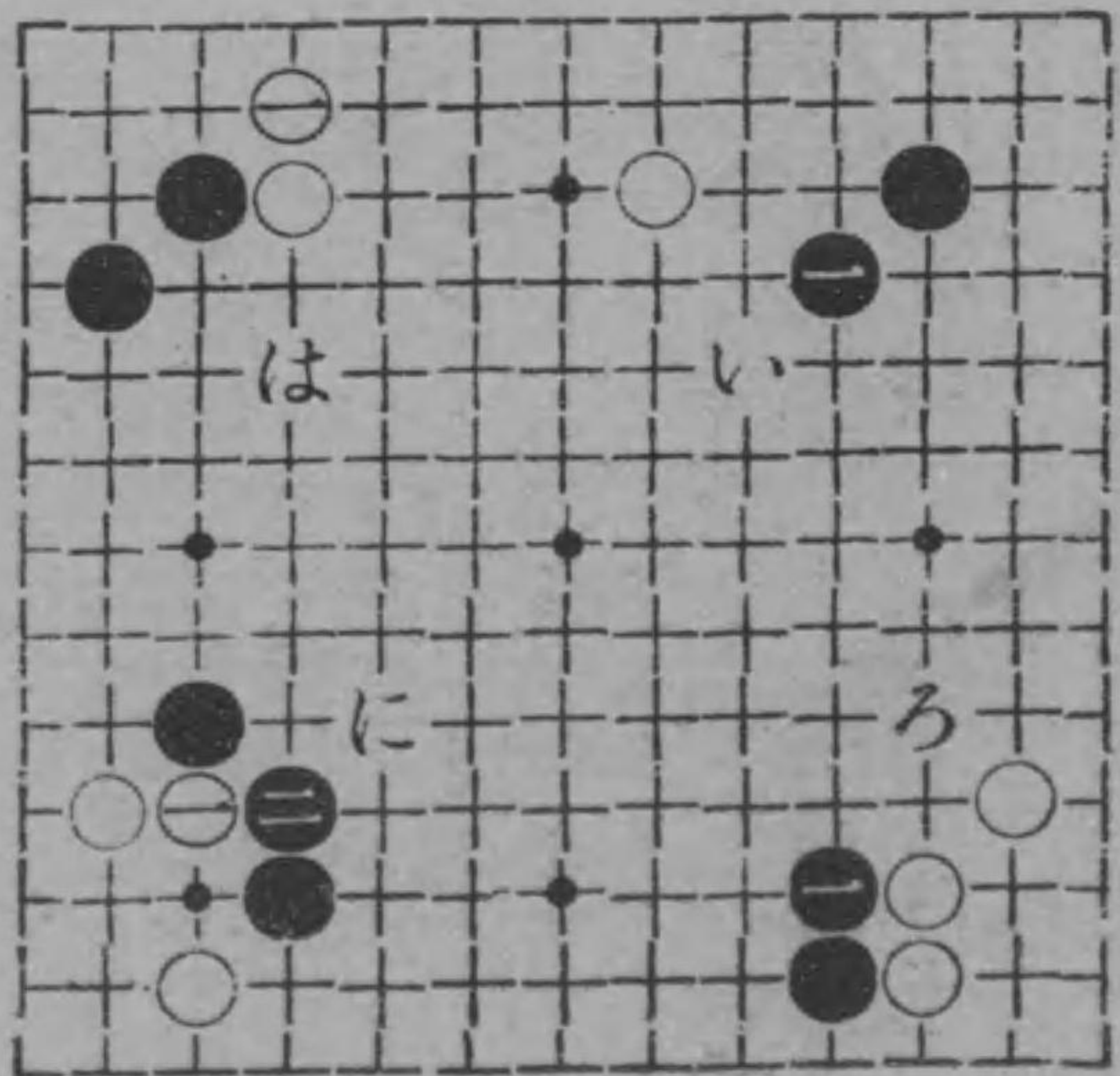
一三、下。

(は)は(ろ)と反(はん)對(たい)にて下(さがる)サガル也(なり)。

一四、約。

(に)圖(ず)黒(くろ)二(に)の手(て)にて壓(おさへ)とも書(か)く。

第三十圖



第四編 實地の打方

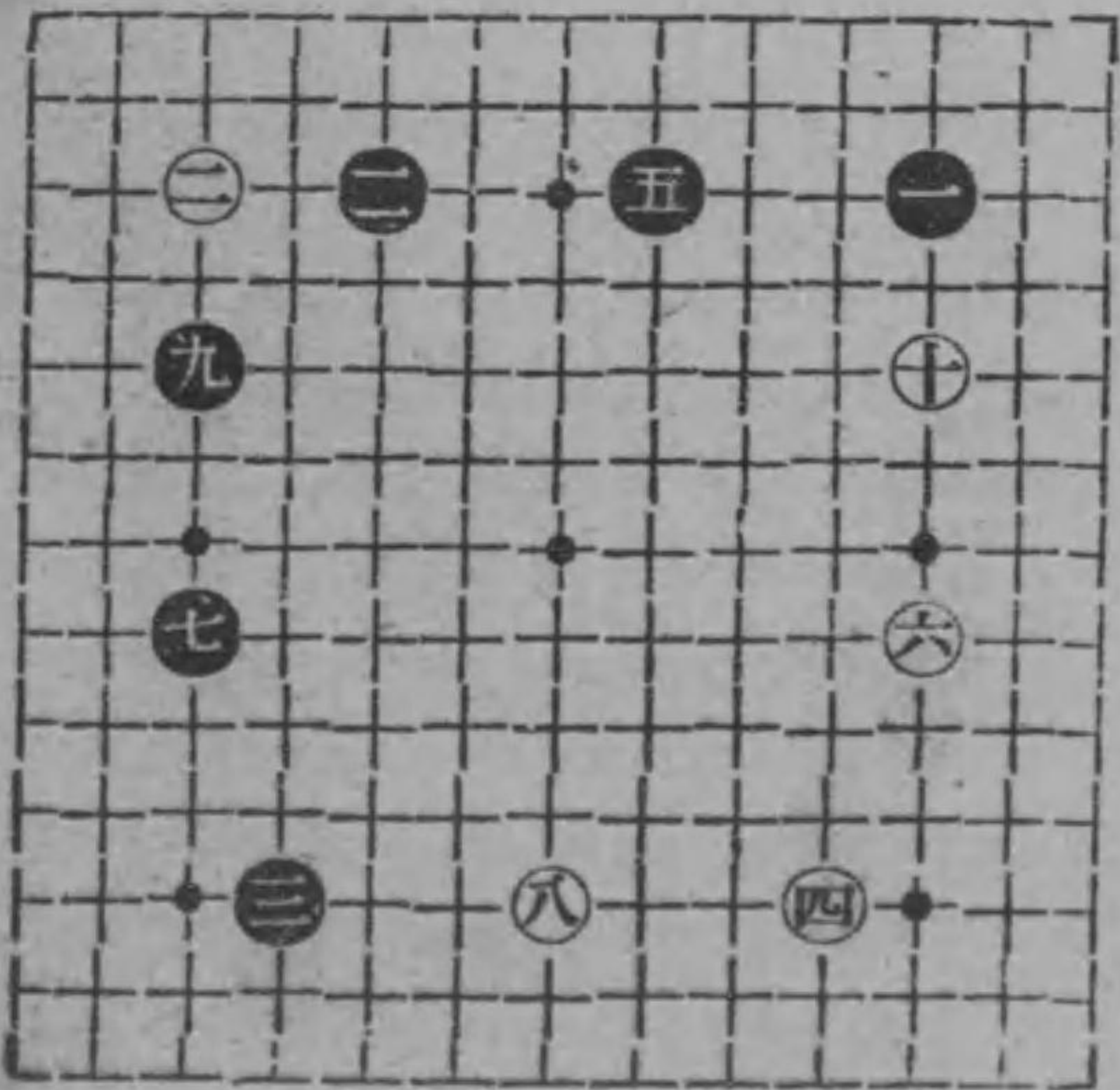
第一 打方の一例

是より一局の最初より打ち終りまでを説明せんに、先づ初めは石の配り方に注意せなければならぬ。

第三十一圖——最初黒は何れの地點に據るを最も得策とするか、圖の如く黒一と隅に陣を布くを一番好地點とする、何となれば中央は四方邊は三方あれど隅は二方だけを包圍すれば占領が出来るからである。

白四までにて隅を終りたれば、次ぎの好地點は圖の如く第三線(端の線より中へ三

第三十一圖



つ目の線)に打つを宜しとす、黒十一まで

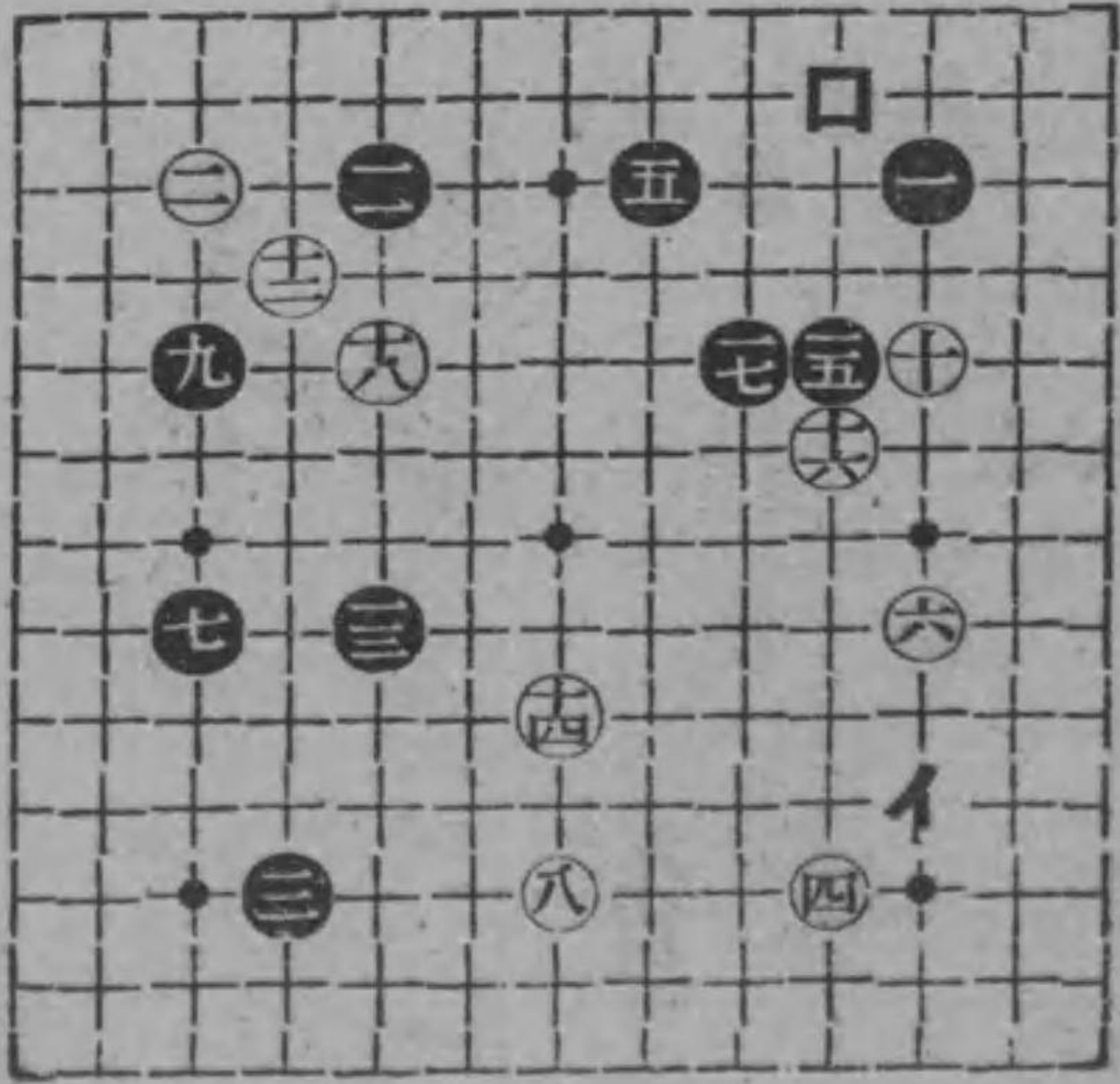
にて三線の好き場所を打ち終る、即ち石の配り方に關しては最初は隅、次は邊の第三線に陣取るを最有利の打方とするのである

第三十二圖——白二は黒九、十一と兩方から迫られたから中央に向ひ十二と尖み、黒十三と一間トビに來りし時白も十四と中に向ひイ方面を固めた。

黒十五は口方面の地を擴張せんため中に向ひ、一面には白地を侵さうとする、故に白は十六と約へ、黒は十七と立ち陣容を整へ、白は十八と再び尖みたり。

是を要するに此處に於ては白黒ともに中原の廣き地面に向ひ發展を企たのである。

第三十二圖



第三十三圖——前圖十八の手までは全部番號を附せず無地にて表はし次で表はる打方に對してのみ順序を示すこととした。これは一見し頗る見易いからである。

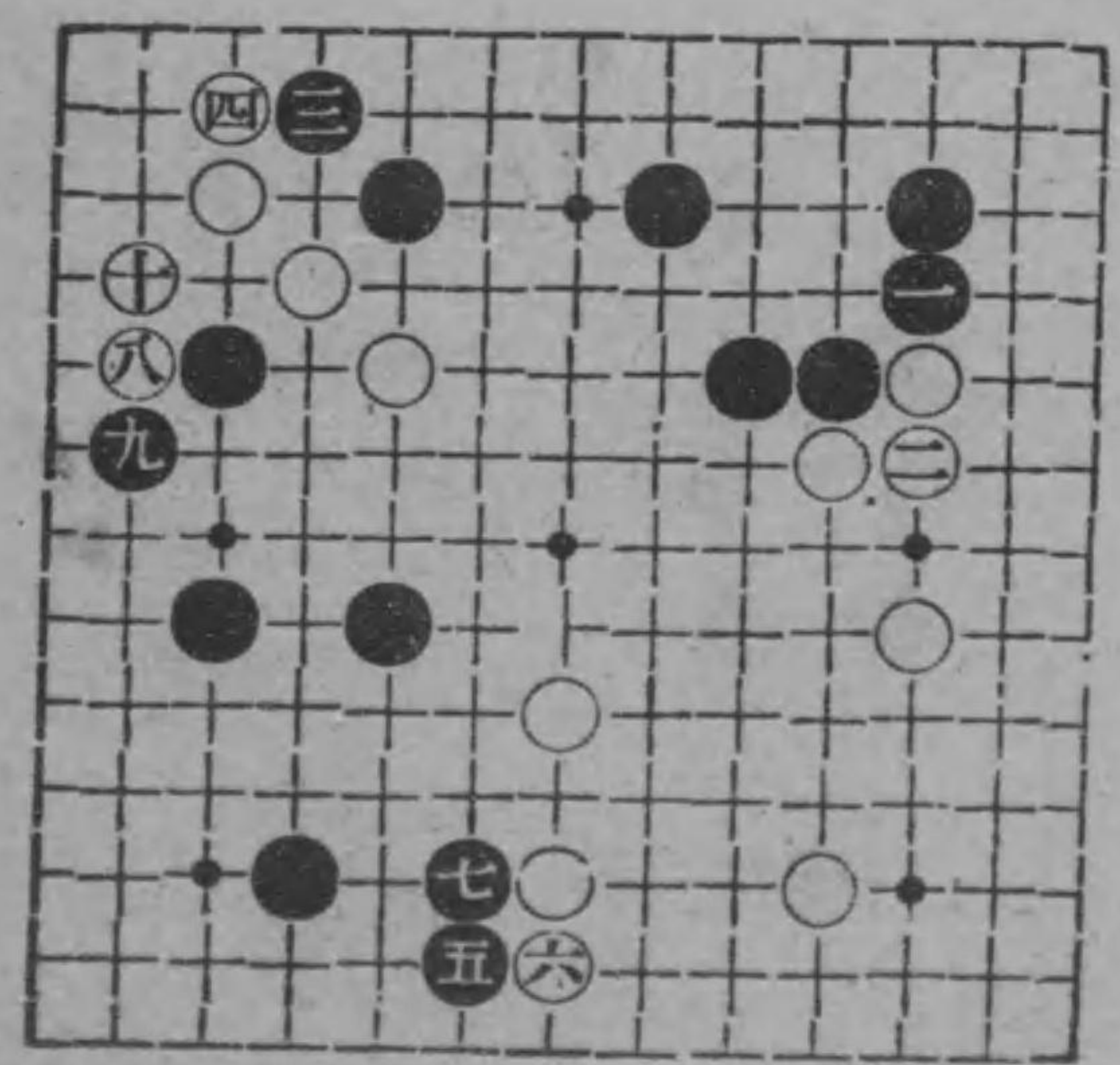
大體中原を終たから黒は一と着け三線に守りたり、白は二と粘ぐ粘かなければ二に黒に打たれ破られる憂がある。

黒三及五共に邊を包圍しながら敵地を窺ふ頗る有力なる着手にして、白は放任する譯に行かず、夫々是に應じたるなり。

黒七と打つに及び此處手抜きの状態になりたれば白は八と懸り十と締つて打つた。

茲に注意すべきは石の配り方の順序としては隅及三線の石を基礎として其内外に向

第三十三圖



ひ發展すべきもの也。

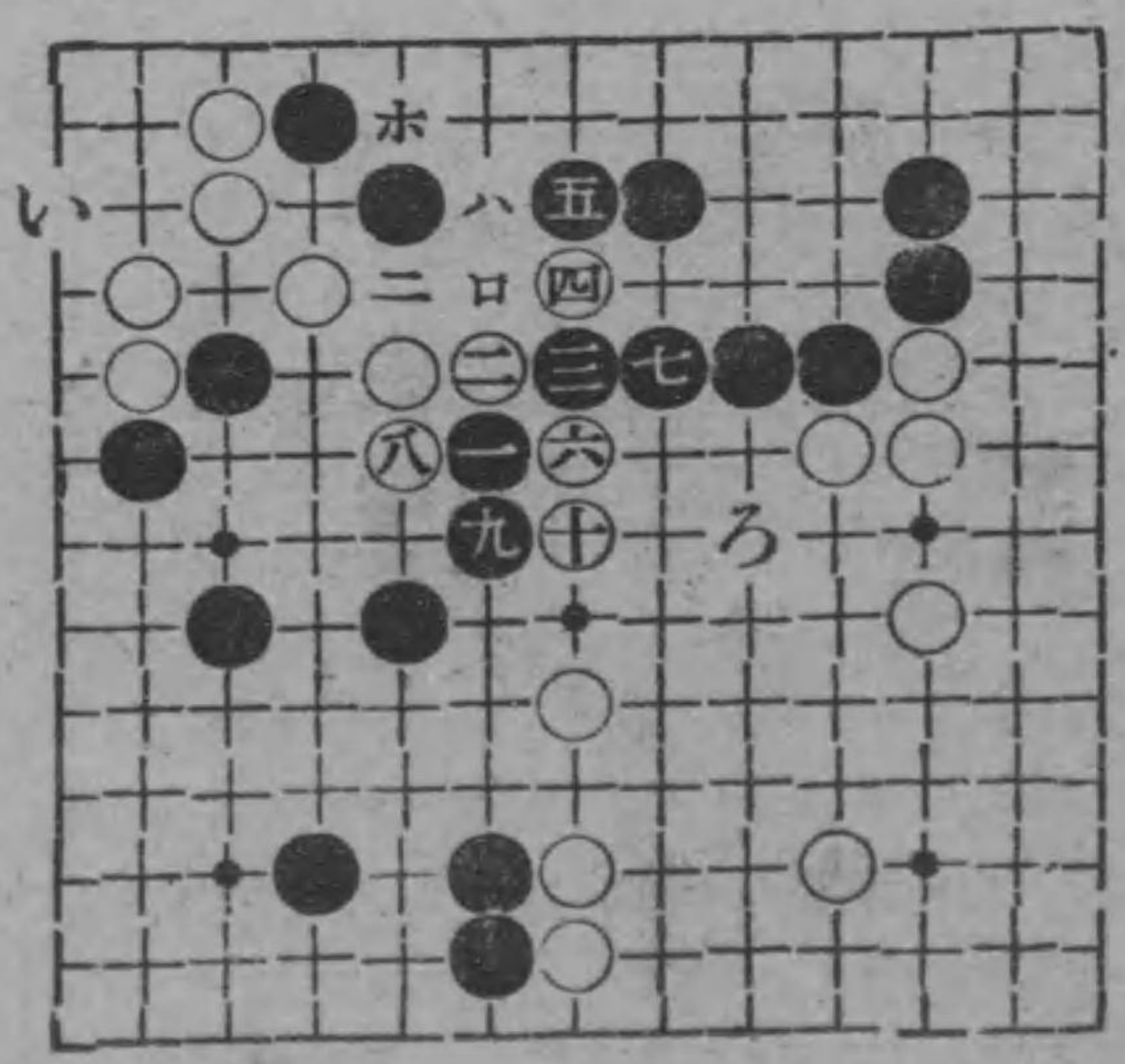
第三十四圖——黒一はい方面の白に壓迫を加へあはよくば此を占領せんと中央への進路を遮ぎつたのである。

白二と延び黒三と約え白四と緯しとき黒は口に切つたとすると白に八と打たれ、二に粘ぐも亦木に打たれると再びアタリとなり追落しにかゝるなり、故に圖の如く五と打つをよろしとす。

白八は圖の黒九に打ちて黒一をアタリとなし追ふ手もあるが、さるかはりろ方面の白の領地に侵入される憂があるから圖の如く堅く打つたのである。

茲にい方面の白はろ方面の白とは斷絶さ

第三十四圖

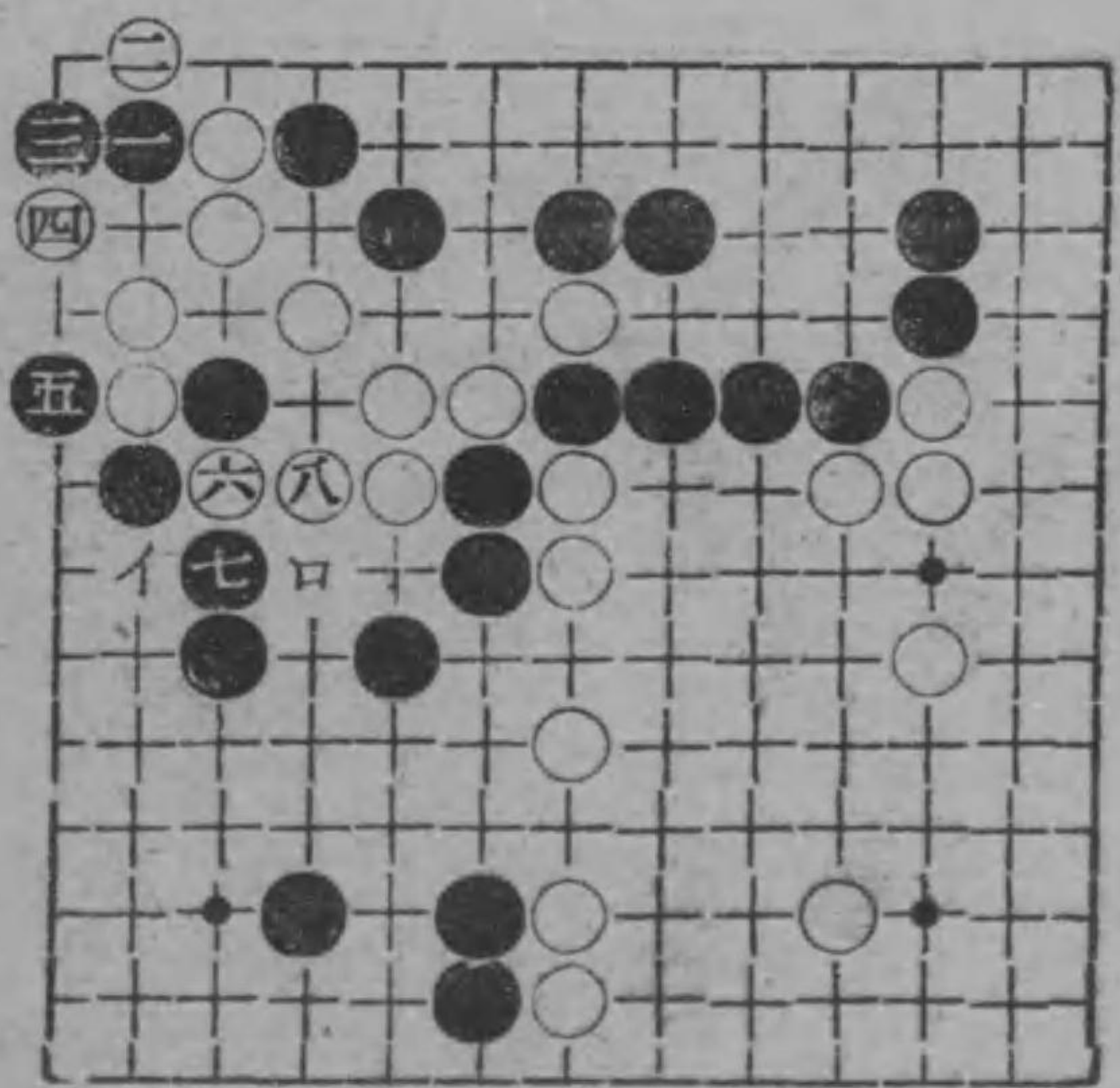


れたから稍危険の状態にあり、黒一は即ち白の眼をつぶ、死にせんと中手に打ら込み来たのであります。(第三十五圖)

黒一に對し白は二と應手した、是は黒の盤を防ぐものである、黒三と下り、白四と着けしとき、黒五と綽ねたるは此處の一眼をつぶしたのである。

茲に於て觀るに白は此隅にては一眼より作り得ないことになつたから、他に一眼を作る方法を講じなければならぬ、白六は即ち敵の虚を衝いた妙手にして黒一目を擒とし一眼を勝ち得たり、若し白六の時黒白八の處に打つも白は黒七の處に行び、イに黒約へし時口に行び、黒二目を殺し、黒口より

第三十五圖



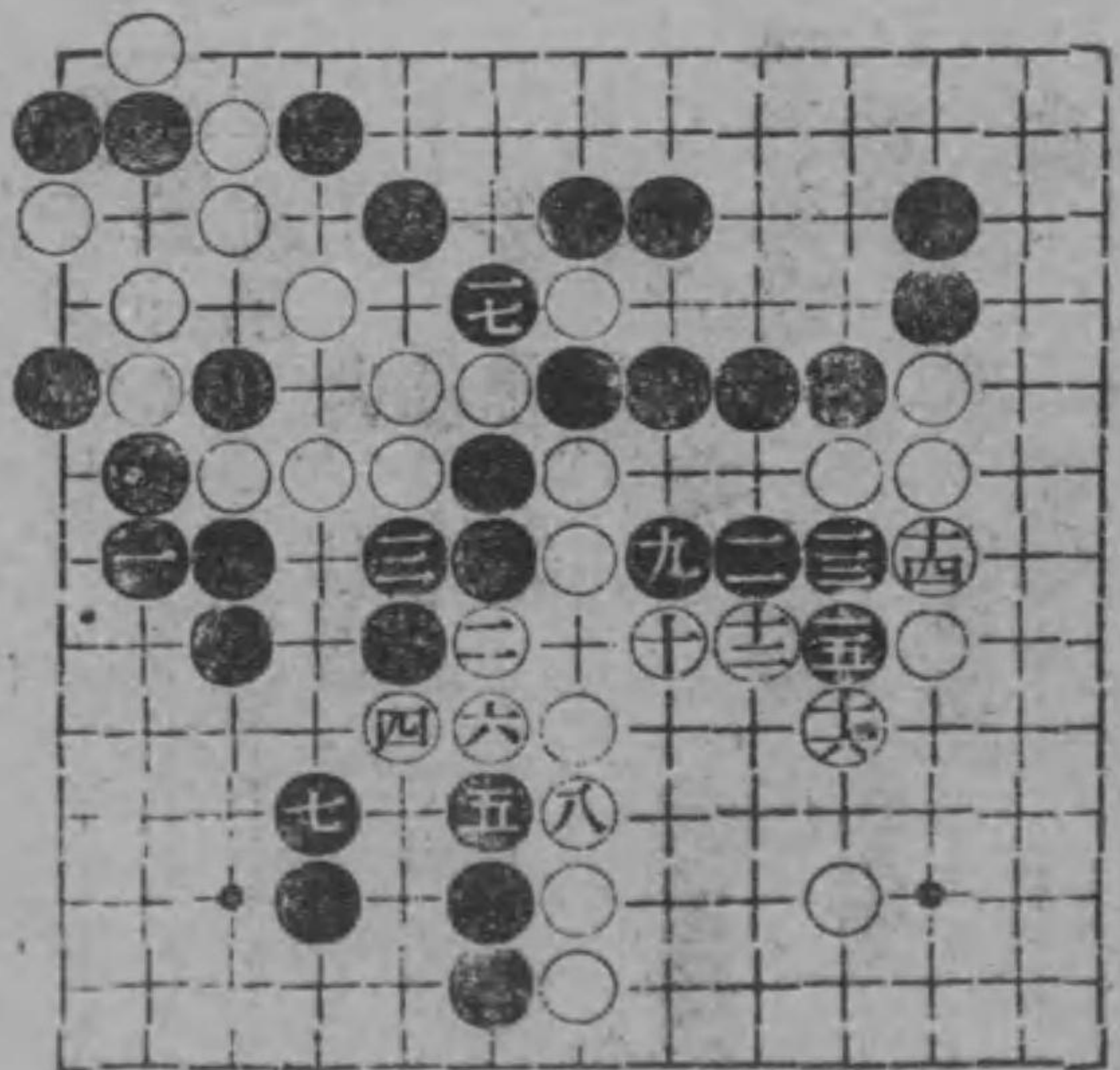
り壓えし時はイにまがりても、黒一目が當となり、是を提ることが出来る。

第三十五圖までにて此一局の大勢が定まつたといつて宜い、これよりは黑白境界に在る地面の蠶食を計のである、これを侵分といふ。

第三十六圖——黒一は必要なる粘ぎである白二より八までにて此處白の侵分は非常に有効であるが、白十より十四までは此處では黒が先手をとりて侵入して来たから白は全く受身となり勢力範圍を蠶食されて不利に終つた。

黒十七は白の一目を占領する一面には敵の侵分に先んじ好着手である。

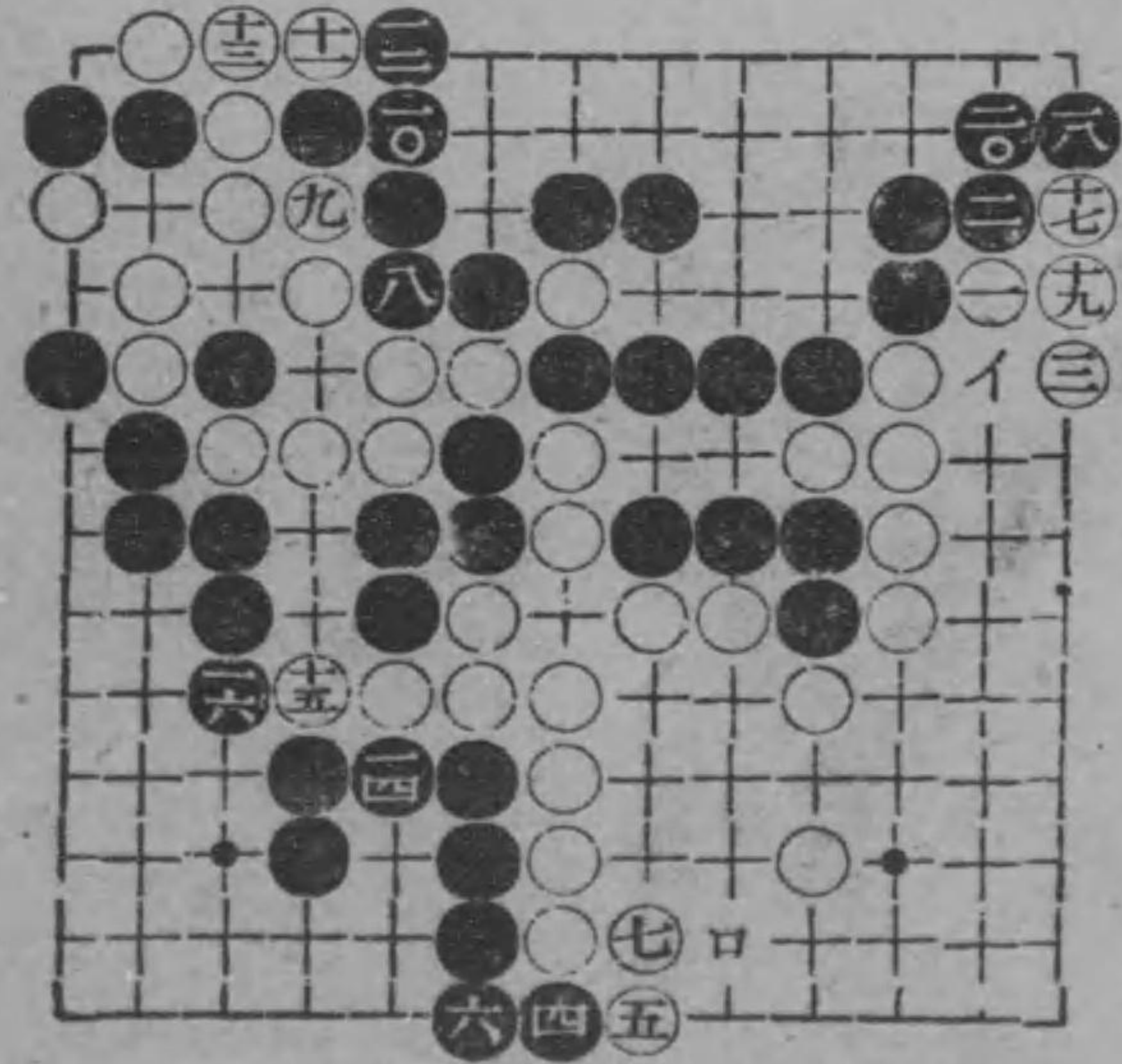
第三十六圖



第三十七圖——侵分の續きであります、白一の綽に對し黒二と防ぎしとき白三の構えはイに粘りてもよろし、しかし白十七の綽ねの時白は十九と粘がないで黒二十の處を切り劫にいく手がありて、味のある手であります。

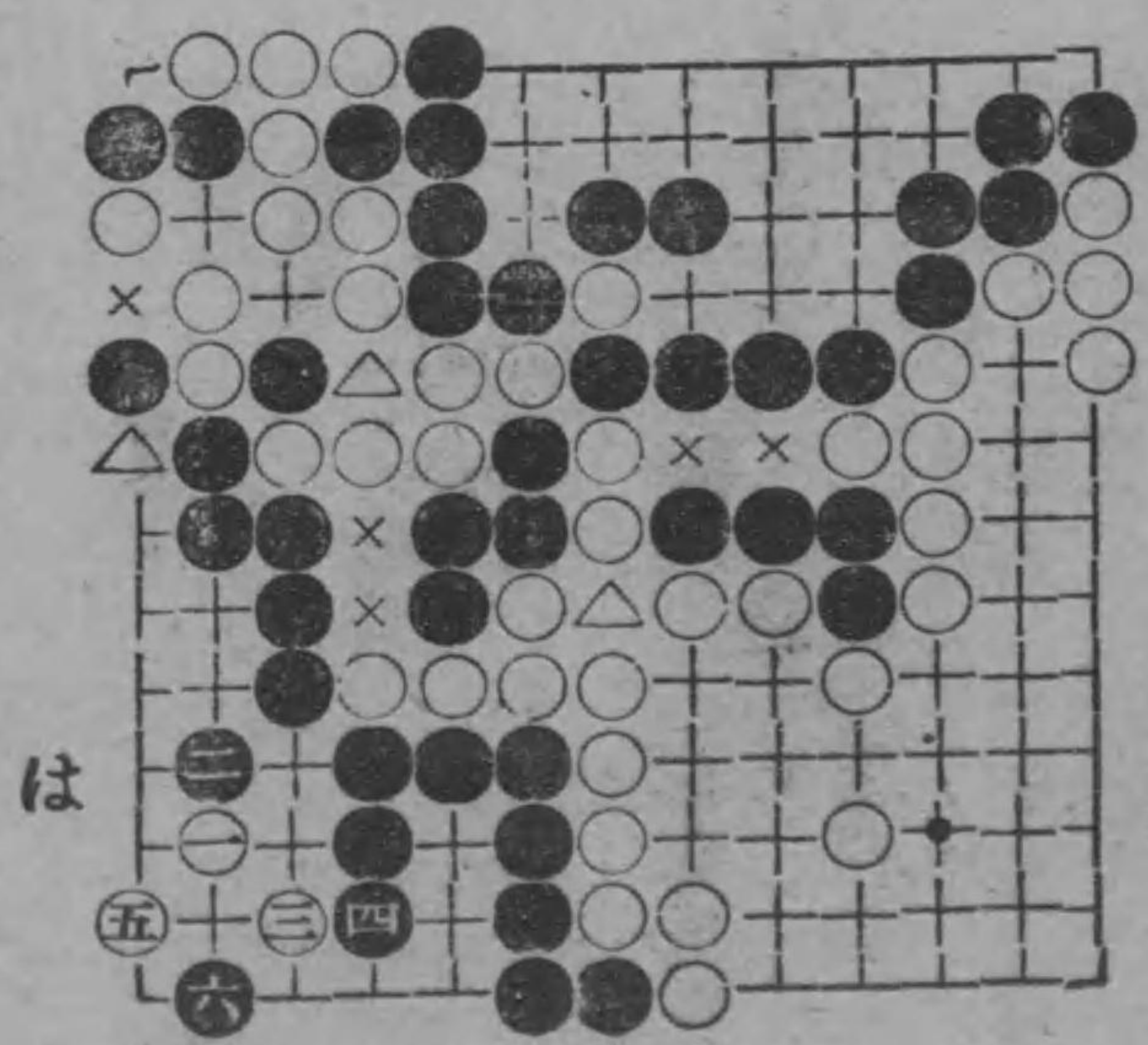
黒四の綽ねは侵分の中では屢起る重要な箇處である、即ち白から綽ねると黒から綽ねるとで差引四目違ふ、而して白五と約え黒六と粘りし時白は七と必ず粘がなくてはならぬ（白三の如く口）に打ちてもよし）それでないと白七の處に打たれ破られます。

黒二〇までにて侵分も全部終りました。



第三十七圖

白は、は方面の黒が廣いの見えて一と打ち入れたが、黒が相當に應手し六と打つに及んでは萬事窮する體にて、に方面に黒が侵入しても白が全然手を下さねばいざ知らず正當に應手せらるるに於ては生を得る望み絶えて無し、而して敵陣地に此の如く打込み生を得ないとしても、敵も一一應戦して來る場合は計算上損はない、は方面に就て觀るも白も三目、黒も三目打ちたれば白はハマとして三目提られ損失になれど黒の方も味を三目費消したから差引五分五分也



第三十八圖

ければならぬ所である。

第三十九圖——白一より黒八までにて駄目を填めたから、茲に此一局は全く打上げたといふ。

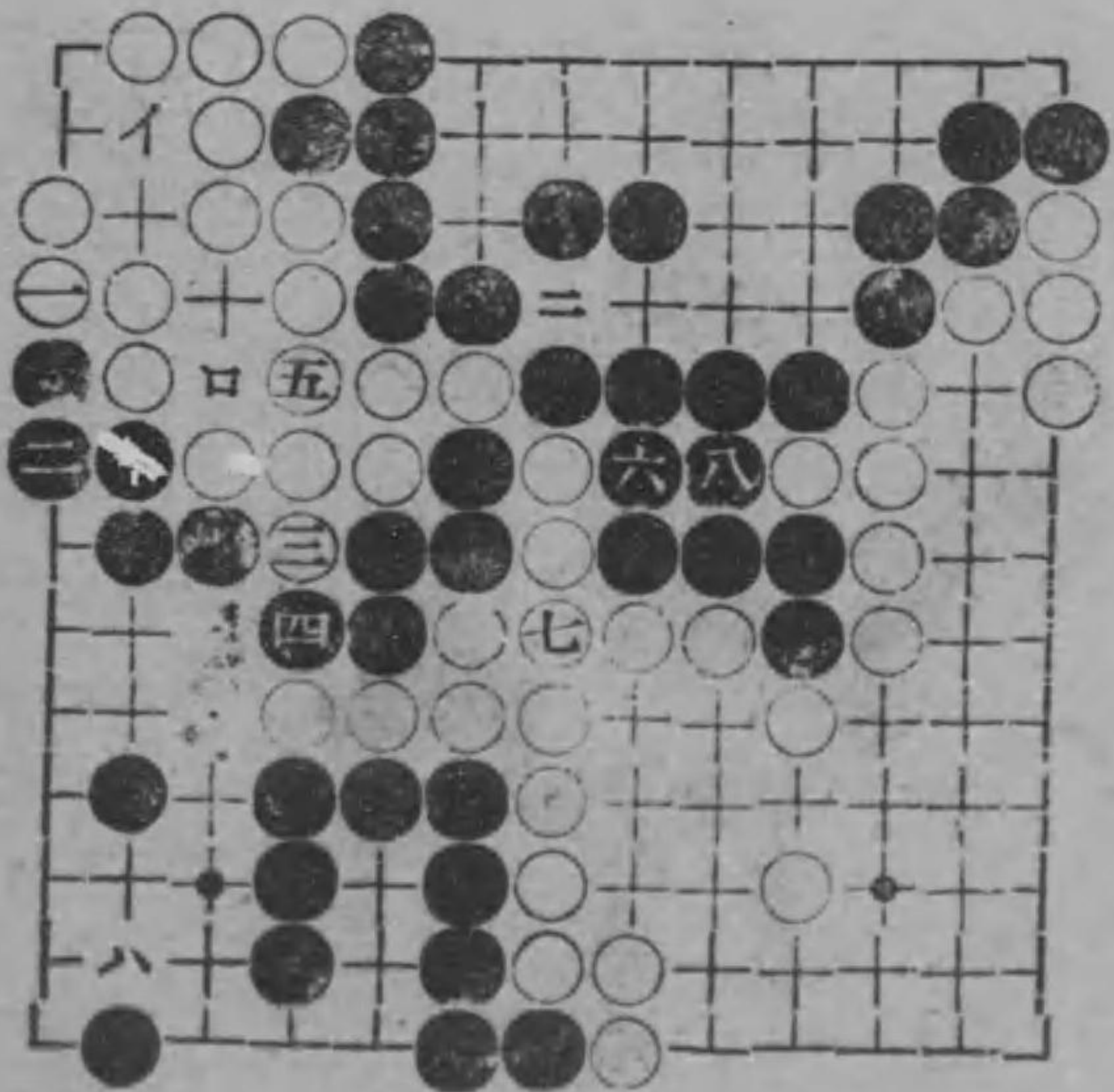
故に今後は互に地の多少を計算して其の勝敗を知。順序となりました。

然らば如何にして白及び黒の地を作るかといふに先づ提石即ちハマを抜き提るので

白はイに二目の黒と、ロに一目の黒とを合せ三目のハマあり、黒はハに三目ニに一目計四目のハマあり。

扱盤上のハマを提り離してから、黒をもちて打ちたる人は白の地を造り、白を持つ

第三十九圖



た人は黒の方の地を造るを原則とします。

地の造り方は種々あるが、要するに一見

して何目あるかを分り易くすればよろし。

此目的に向つて其の造り方の一例を示さ

んに、黒地の方はハの六目を提り上げ、之

にハマの三目を合せ計九目をイ印に填充す

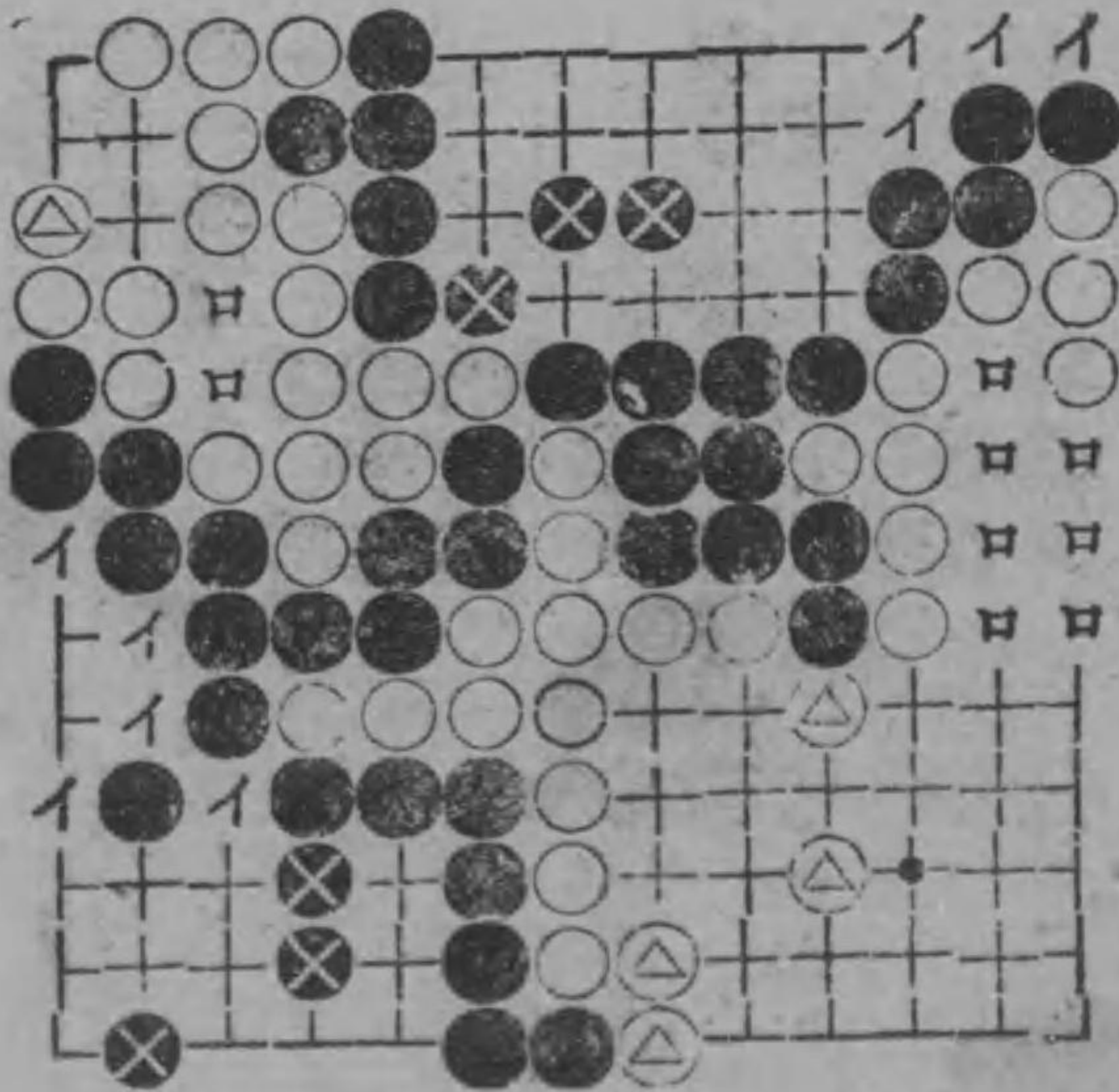
べし。

白地の方も同様△の白五目とハマ四目と

の合計九目を以てロ印を填めますと次頁第

四十一圖の形となります。

第四十圖



第四十一圖について観ると、

黒地	二十	白地	三十
十五		五	
二			

計三十七

計三十五

即ち黒地の三十七目に對し白地は三十五目にして黒は白より二目多く持つて居る。之を黒二目の勝といふのである。

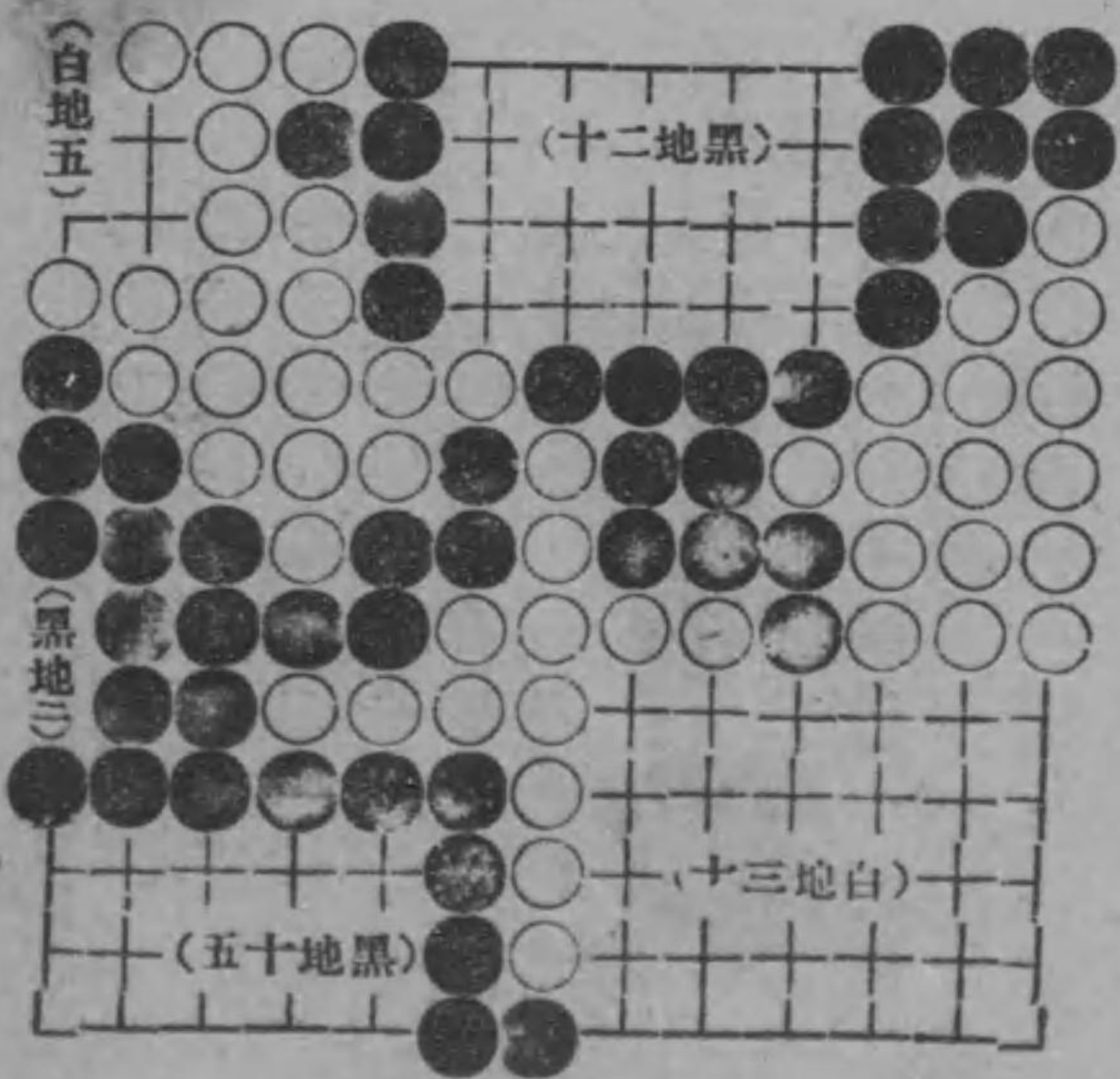
猶碁の勝敗を言ひ表はすに三の種類がある、何目勝或は何目敗とテコといひて白黒地双方とも同數なる場合（此場合は勝敗なし）、及び中押勝といふは中途にて勝負が分り終局まで打たないでなげ出し降参した場合をいふのであります。

第二 置石の置き方

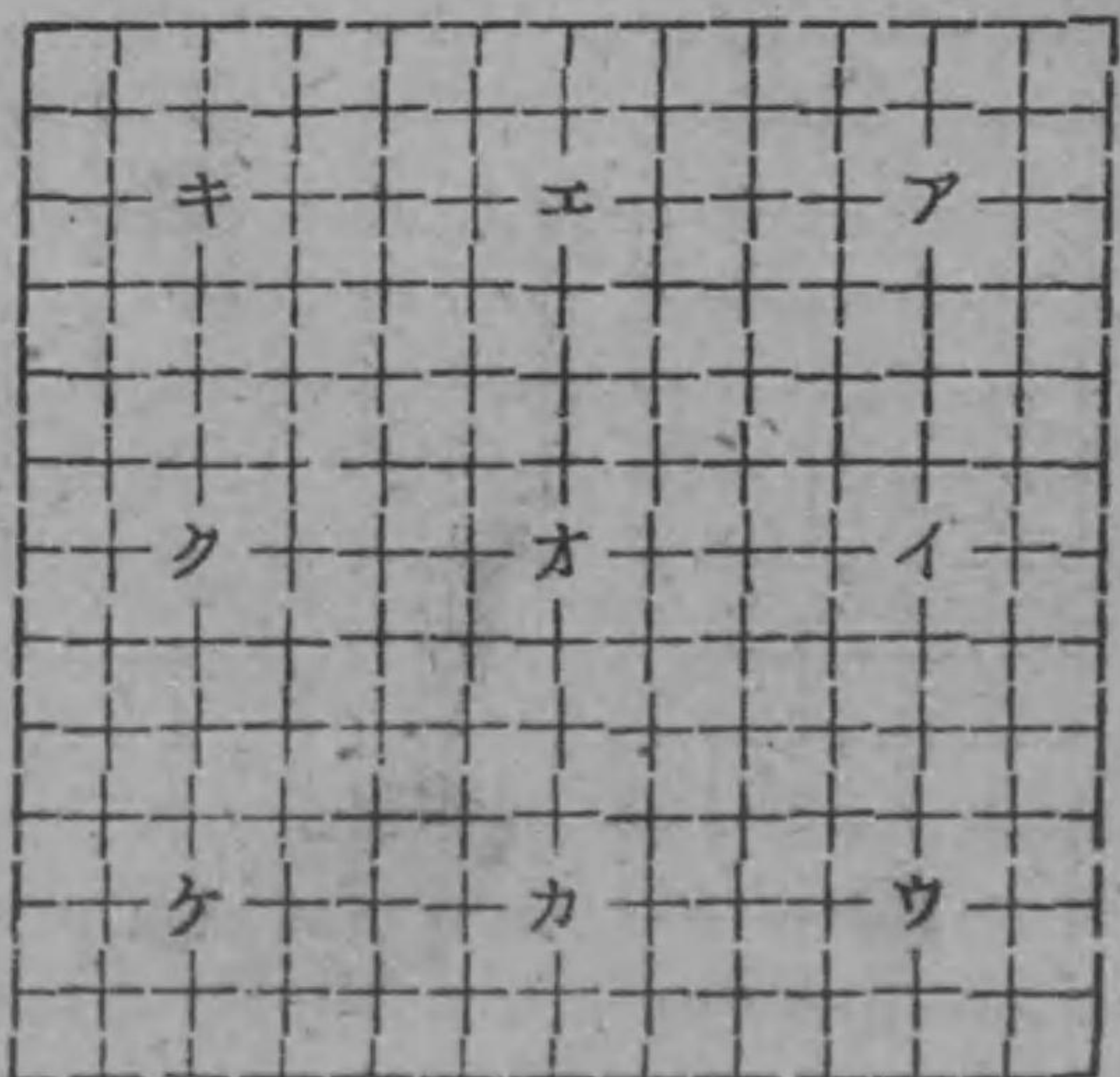
實地碁を打つ場合に弱い者は強い者に對して其の力に相當して釣合ふ様石を置いて對局するものである、之れを手合と名づけます。

手合については「圍碁の階級」の處でも述べましたが、井目（九目）から八目、七目、六目、五目、四目、三目、二目、先、先相先と別れる、尤も廣い普通の碁盤では、極めて弱い人は二十五目も置いて打ちます、しかし、此小碁盤で九目置いて打つ人は普通の碁盤で二十五目置くのに匹敵する位で普通の盤面では井目まで、此少盤面で四目

第四十一圖



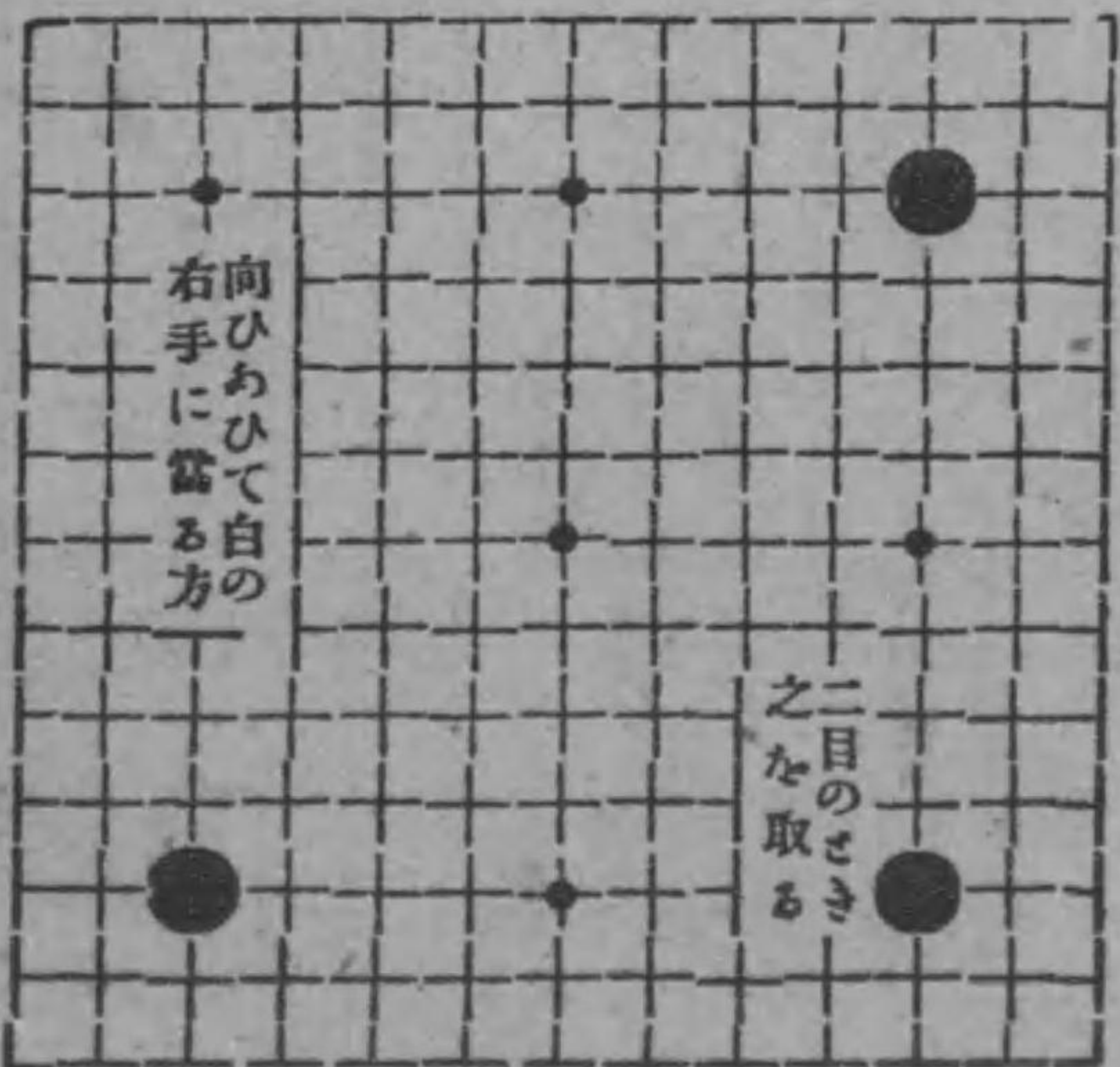
第四十二圖



までが適當な處であつて、其以上は全く例外であります。

井目の置き方は第四十二圖の如く、星と名づける最も樞要な箇所九箇所置くのですが、八目は井目の中より中央の才の一目を取り、七目は才を其儘とし、工及力の二目を取、六目はエオカの三目を取る、五目はイエクカの四目を取り、四目はアウキケにし、三目はアウケ（キ）缺けた所が白の右手に當る様に、二目はアケ（これも圖に示す如く白の右手が空）先は任意に一目を下し、先相先は始めの二番は黒で先にいき後の一番を白を持ち後手に打つのであります。

第四十三圖



五〇

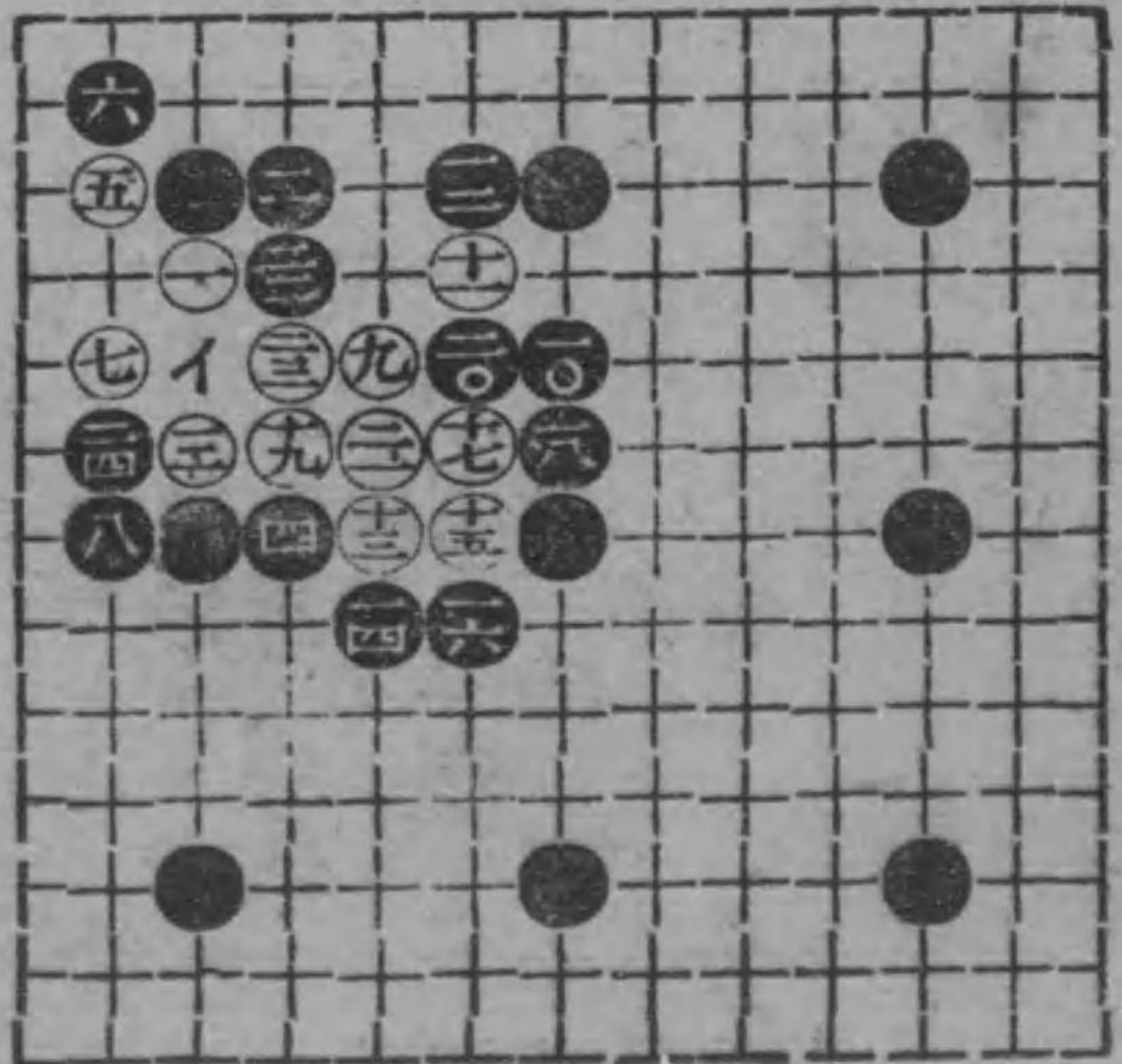
第三 井目置碁全勝法

第四十四圖——黒は九目の置石なれば要所を固め居れば、白が此間に立つて生を得ること頗る難事である。

白一の附に對し黒は二と置石に並べて打つが最も堅固な石立である、何とならば二間とびて置石との連絡がつくからである、黒四の應手も亦同様である、黒八にて白は上下より壓迫され中央に發展策を講ずるより方法がない、此時また置石の爲めに遮斷せられ、遂に重圍に陥る。

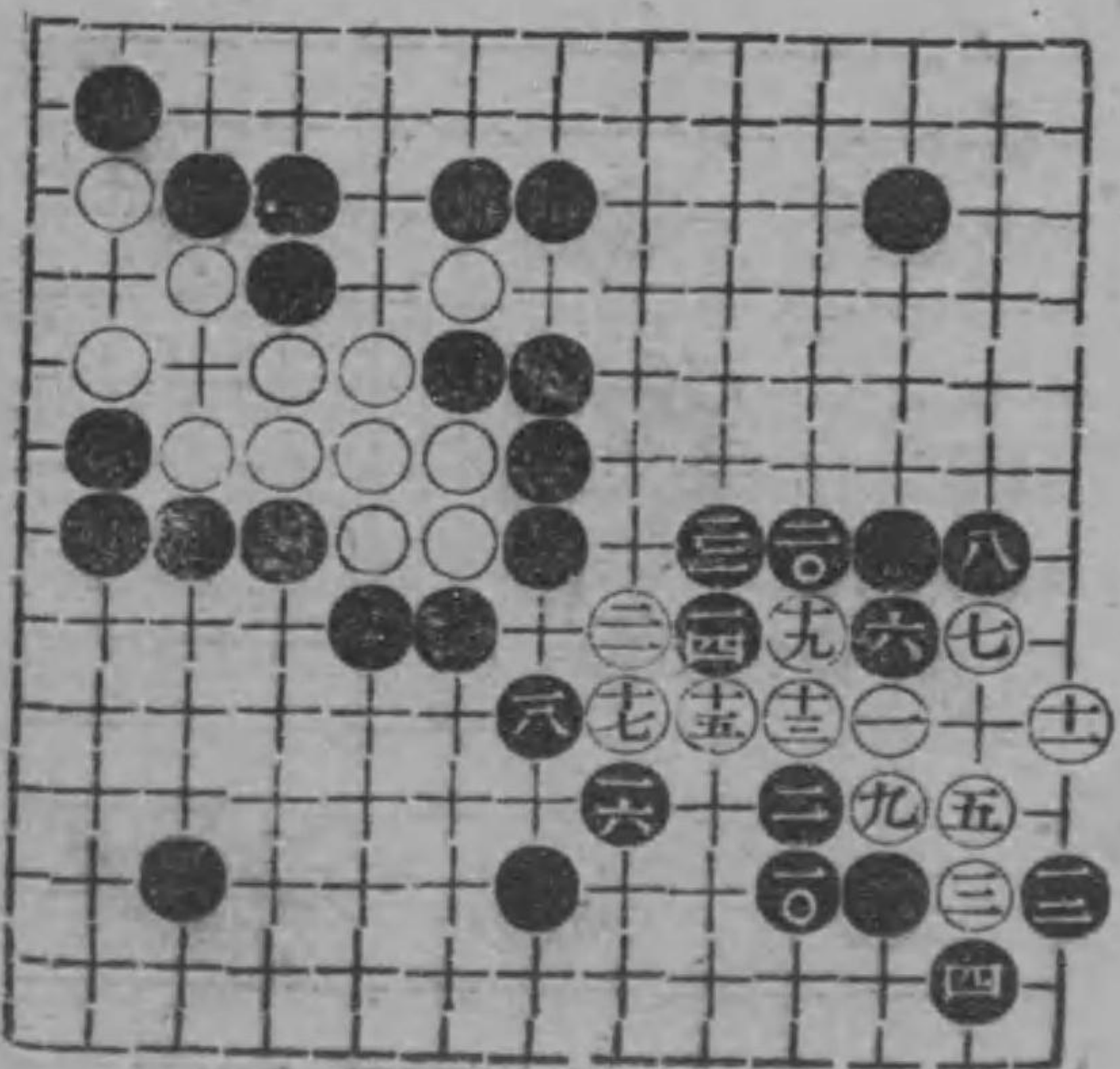
圖の如く黒二十四と打たるゝに及び白一の眼は缺目となり、全部死となりたり。

第四十四圖



第四十五圖——黒二と尖みたるはよし

黒六も堅くてよろし、白九の時黒は十と粘
 なげねばならぬ、黒十二にて白此方面に一
 眼よりなし、故に十三と中央に向ひ活路を
 求めたれども、黒の石四方に散在して、餘
 儀なくまた包圍せられ、全部死となる。
 此の如く九目も置石あれば黒に於て相當
 に應手すれば白は全滅の外はないのであつ
 て全勝するは當然のことであります、全勝
 法或は必勝法などといふまでもありません
 が、一步黒が應手を誤まれば生られる箇所
 が出来ることは勿論であります。



第四十五圖

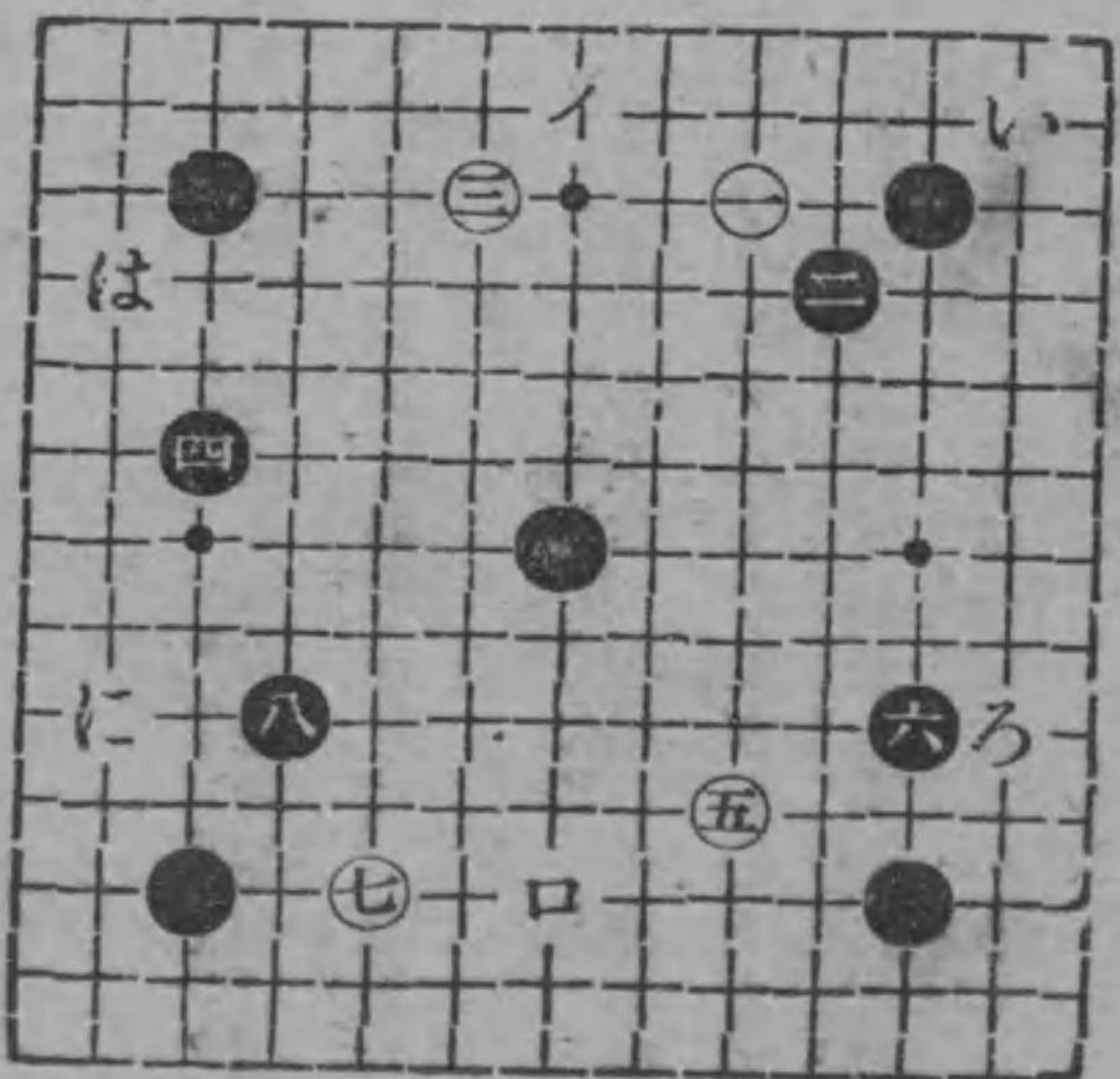
第四 五目置碁必勝法

置碁は既に主要なる箇所陣を布いてら
 るのであるから、置石を提られぬ様守勢的
 に打つことが必要である。

五目の置碁にて第四十六圖の如く黒は置
 石を基礎として陣容を作る時は井目の時の
 如く白を全滅させる事は不可能であるが、
 白がイ及ロ方面の二箇所陣に勢力地を持つ間
 に黒はいろはにの四方面に勢力地を有する
 こととなり、必ず勝てる道理である。

猶此局及二目三目等の置碁も詳説した
 けれども、紙數に限りあれば、専ら讀者の
 研究に委し、次編より普通の盤面に移らん。

第四十六圖



第五篇 置碁定石及石立

定石の事

第四篇までにて小碁盤により圍碁の主要を知りたれば、此篇より普通の盤面に就き説明する、而して之より定石及石立の一般につき會得し實地に研究すれば、立派な碁打になれのですから熱心に御研究を願ひます。

圍碁の定石とは、碁の打ち始めに當つて多くは四隅にて必ず常に現出して來る陣容に對して、適當なる攻守の手段を定めたもの丁度角力の四十八手の如きものである。碁盤の隅は最も重要な陣地であるから此處に於ける攻撃及守備を最も有利に、最も堅固になす爲め定石を知る必要がある、尤も定石は理想としては一定たるべきものです。すが非常に複雑なものですから、人により大同小異を免れませぬ。

定石をば「置碁定石」と「互先定石」との二種に分ちます。

置碁定石は左記六個の打方に分類して説明せん。

- 一、小桂馬頂手
 - 二、小桂馬懸大桂馬受
 - 三、一間高懸
 - 四、二間高懸
 - 五、大桂馬懸
 - 六、大々桂馬懸
- 猶之は第四十七圖及び第四十八圖の打ち始めだけの圖を觀るとよく分る。

置碁の打始め

第四十七圖——(甲)は白小桂馬懸りに對し黒頂手の受けを示したるものにて、最も普通な手である、白が置石に對して小桂馬は最利目のある手である。

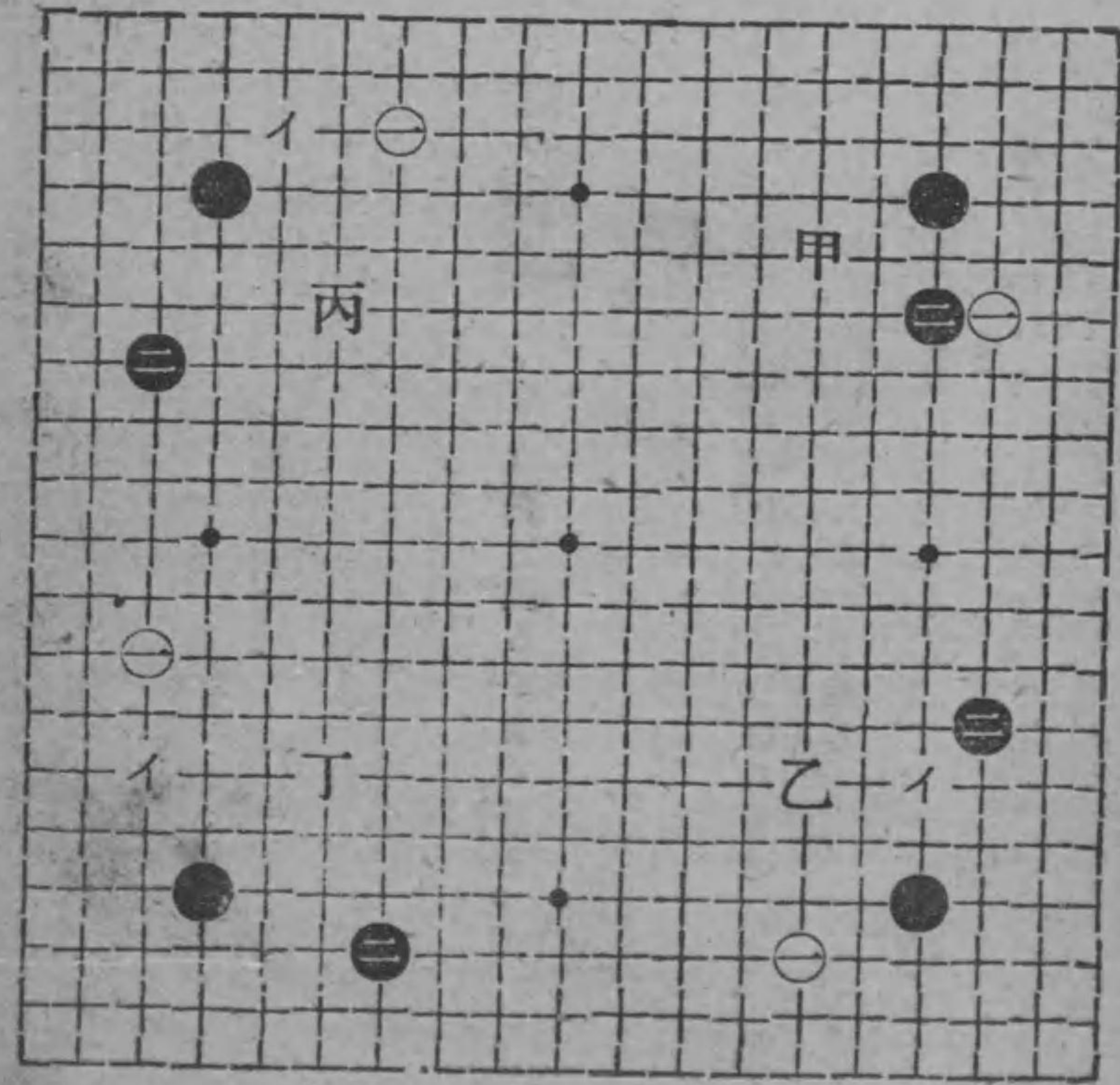
(乙)は白小桂馬懸りに對して黒の大桂馬受を表はしたるものにて、之も甲と同じく最もよく用ふる手であつて、近頃はイに一間トビに黒が受けることもある。

(丙)は白大桂馬懸りと稱して用ふことは少い手である、之に對して黒は大桂馬に受

けるが有利であるが、昔はイに受けることが多かつた。

(丁)は白大々桂馬懸といつてこれは置石に對する壓迫力が薄弱ではあるが、他との關係上用ふることがある、之に對して黒は二と大桂馬に受けてもイに受けてもよろし。

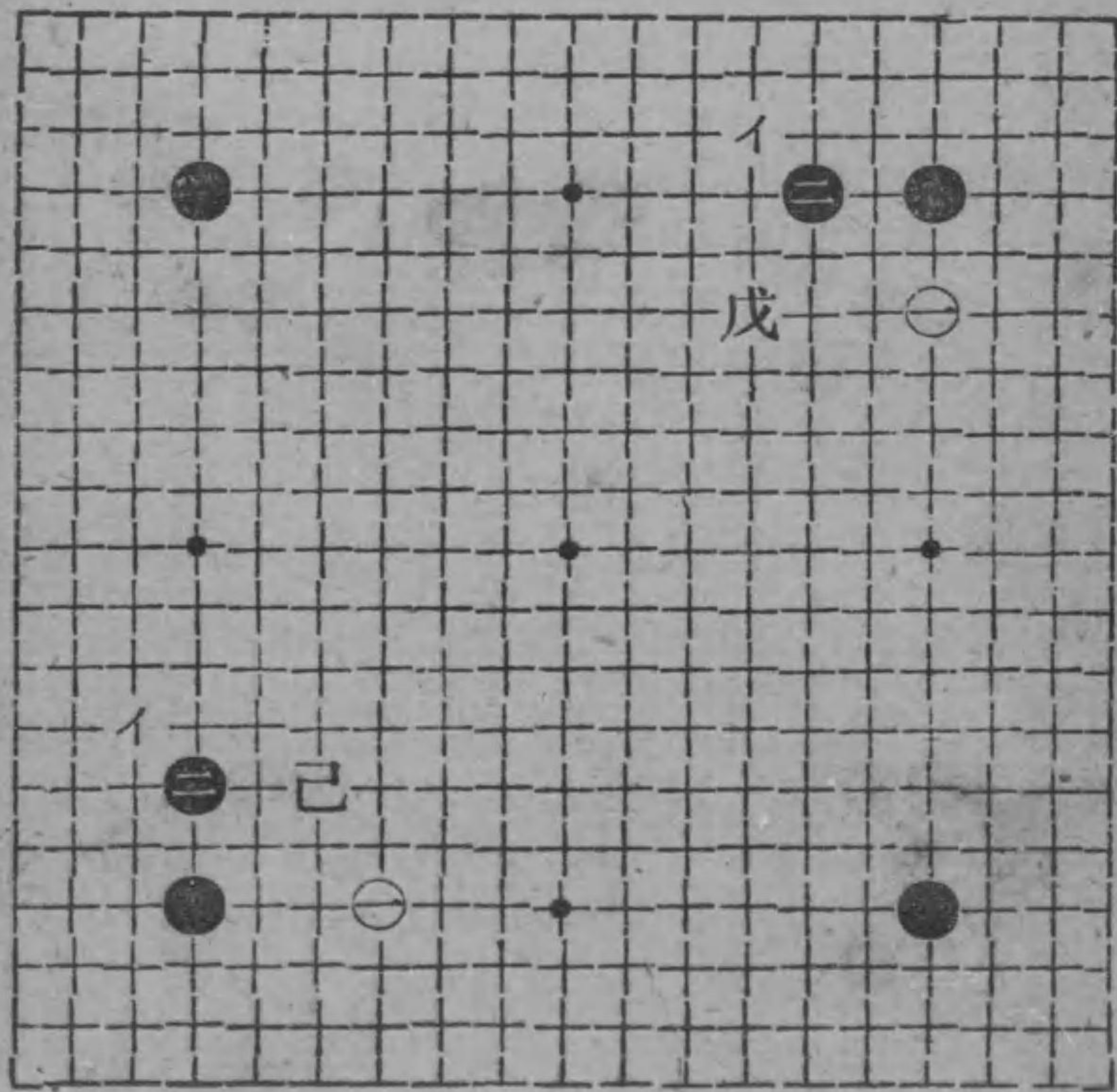
圖七十四第



第四十八圖(戊)は白一間高懸りにて、黒は一間トビに應じたがイに受ける手は悪い。(己)は白二間高懸りに對して黒は一間トビに應ずるが普通であるがたまにはイに應ずることもある。

要するに以上六種の内甲及乙が最も一般に行はれる手であります

圖八十四第

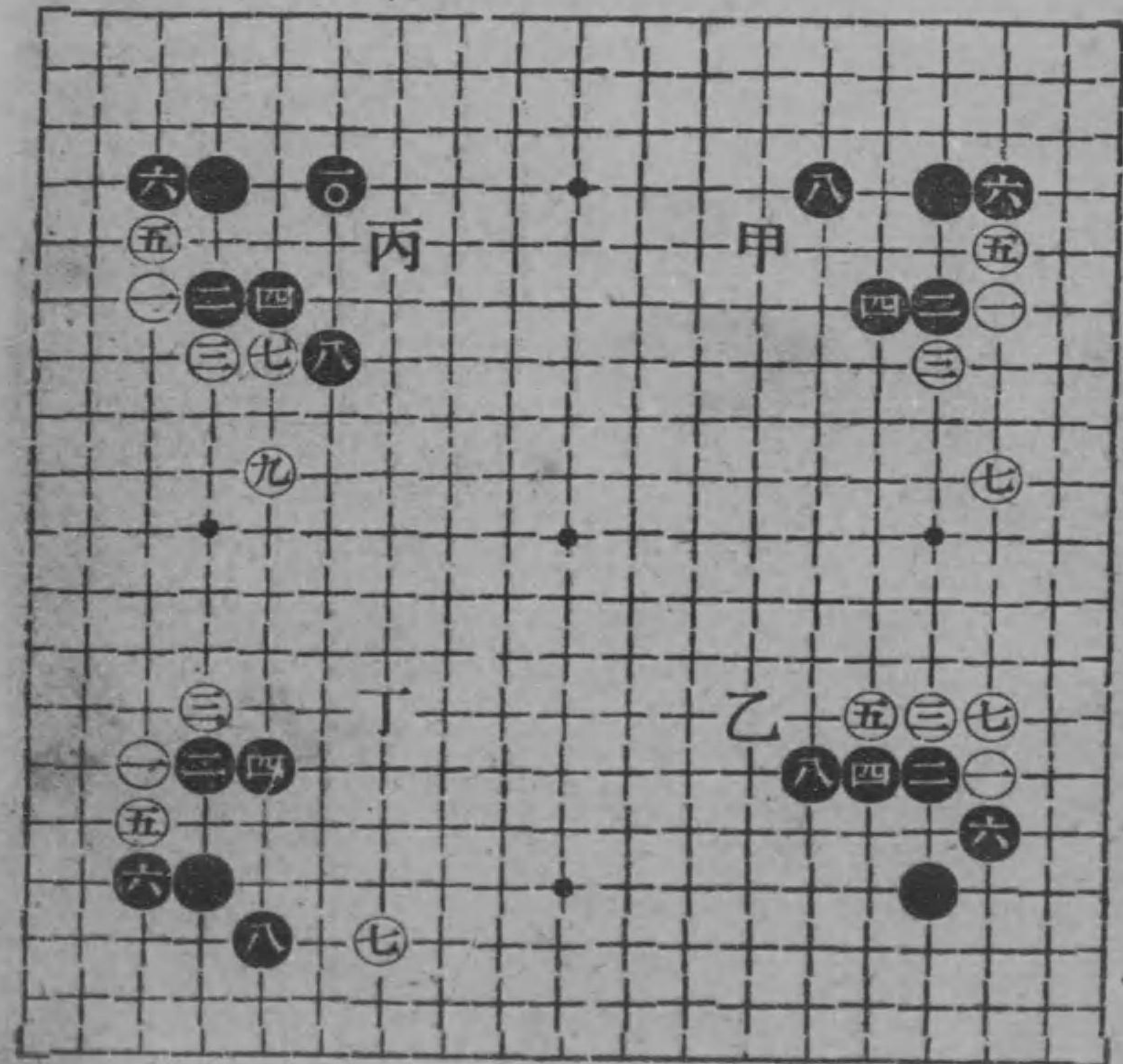


一、小桂馬頂手

白の小桂馬懸りに對して黒頂に應ずるは最も普通にも多く行はれる手で、之は全く隅を堅固に守るが目的であつて攻勢に出る野心を持たないのであります。

(甲)は頂手の中でも一番手本になる堅い打方で、白が七と開いて邊を占領せば、黒も八

圖九十四第



と締りて此隅を固めなければならぬ。

(乙)黒が五と立ちしときは、六と約へ、白七と粘れば八と再び立つことは共に注意すべき良い手である。

(丙)黒が一問トビて守りしとき黒十の手肝要なり。

(丁)白が七の手、守らずに黒の方へ追つて来たとき黒は八と軽く打ちたるは甚だよし。

碁會所の親爺は

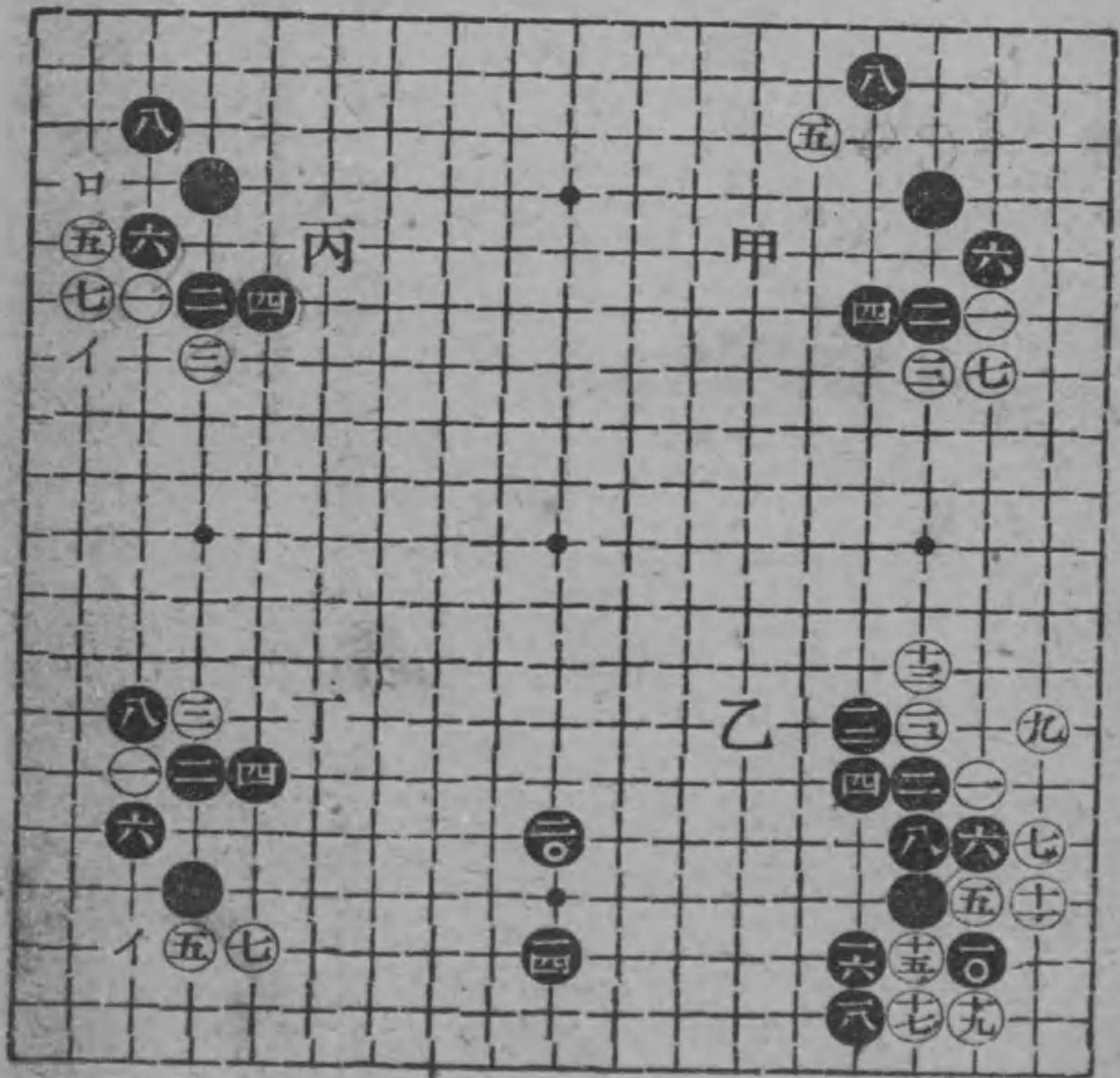
藩の國家老

(悦象)

第五十圖(甲)白が五と迫りても黒六の手はやはり必要な附けである、黒八の締り方非常によし。

(乙)は黒外側に勢力を布植する定石にて、黒十二の伸大によし、十四は即ち大きく包みたるものにて若し白が十五と切りしときは圖の如く十の一子を捨てても外側を大きく包蔵する方大なる利益なり

第五十圖



六〇

(丙)白七と粘ぎし時黒八の手大によし、もし口に打つときは白に八の處に覗かれる缺陷を生ずるからである、而して白が七の手でイにかけ粘ぎしならば口に約へる方よろし。

(丁)白五と打ち込むは少し無理なる手なり、之に對して黒はやはり六の手の構を忘れてはならぬ、白七と逃げのびしとき、黒は白一を殺して此處に勢力を得れば決して損はないのである、又八のかはりにイに縛ねてもよろし。

碁にまけて湯氣を立てけり禿頭

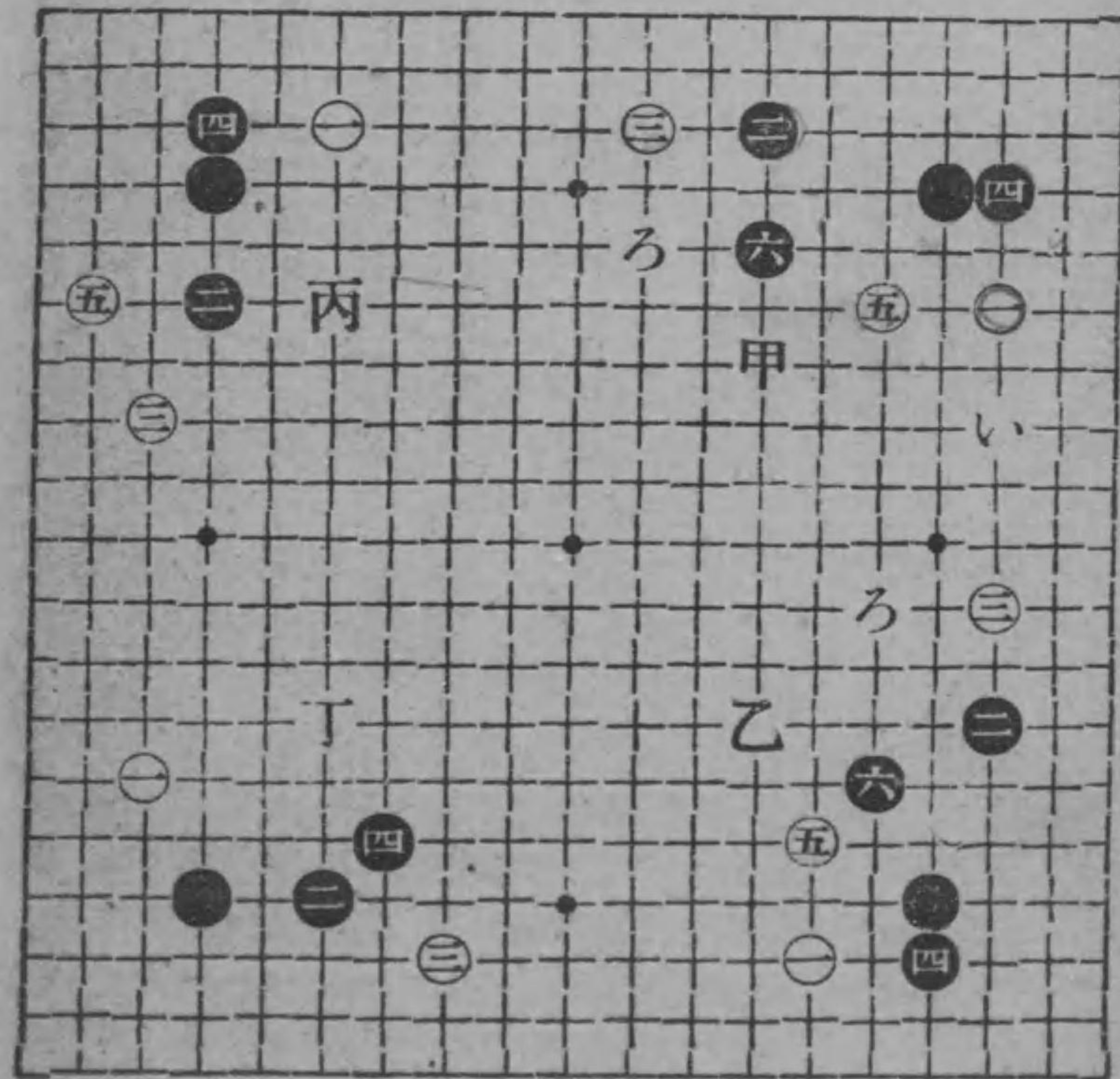
今日は一しほ寒き夜なるに

(山人)

二、小桂馬懸 大桂馬受

第五十一圖(甲)は
白一の小桂馬懸に對し
黒二の大桂馬受の定石
にして、之は最も普通
に用ひられる模範にな
るものであります。
白三と迫りて打し時
黒四は此隅三三(二)上か
らも横からも三番目)
の打ち込みを防ぐ爲め
(之は次圖で示す)に

第五十一圖



是非此處に下らねばならぬ、白五に來りし時六の開き必要なり、若し六の手を手抜きにすることがあつても四の守りを放任してはならぬ。

此大桂馬の受けは前の頂手よりも多く用ひられる、即ち留石に對して白は小桂馬に懸り、黒は大桂馬に受ける手が十中の七八まで行はれといつても過言でない位双方とも變化の多い有利な打方です、頂手は専ら保守を目的としますが大桂馬の受けは四及六と守備を嚴重にしてからい及るに打ちて白を襲撃する姿勢を示すものである、大に注意に値する要點であります。

(乙)の如く黒六と構える時は餘り守備に捕はれ、ろに發展する途を捨てることになりません。

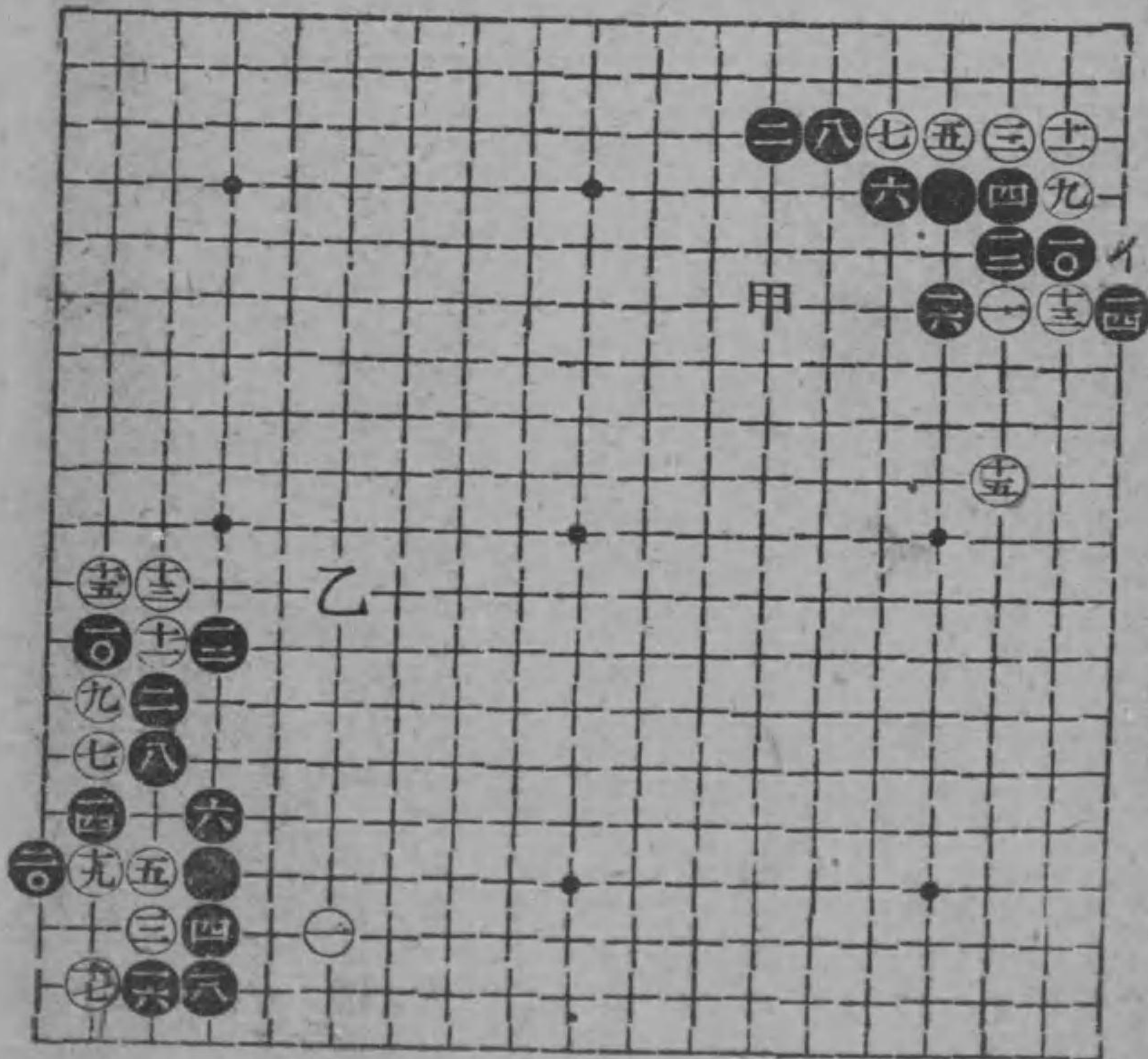
(丙)は黒が大桂馬に受けないで一間トビに受けたる所を示したもので、四と隅の打ち込みを禦ぎても白に五とつきこまれて不利なる状態となります。

(丁)黒の一間トビの受けは、圖の如く隅の打込を顧慮せず進んで四と尖み中央のなる地面に發展策を講ずるがよろし、即ち此黒の受手は全く進取的な所が長所であり、故にやはり黒は大桂馬の受けを最も無難なものとしします。

第五十二圖甲及乙は白三ノ三の打込の一例であります。

(甲)黒六は白七の處に打つ手もあるが此處の方紛れがなくてよし白十三と下りし時盤りを防ぐために黒の十四の綽ねは必要なる手である、イに下るはよろしからず、何となれば白十五の開きに對し黒十六の綽ねと共に白石を牽制する姿勢を示す

圖二十五第



ものであからであります。

(乙)の白十一の切は黒の一目を抱くことが出來得るかは三及び五を殺され結局交換したことになる、黒の方手堅くて大によし。

要するに此白三ノ三の打込に對して黒は之を圍殺することは全く不可能であるから(甲)の場合の如く外側を固め、白を兩斷して壓迫せなければならぬ、白は隅を占領しても僅に十目内外の地よりないのであるから決して此打込みが白の有利なる手段とはなりません、第五十一圖甲の白三と兩方から迫りし時は三ノ三の打込みを防がねば、白に隅を荒され白三の方面即ち左方に發展するを阻止されることとなります。

村長は田舎初段に

二目置

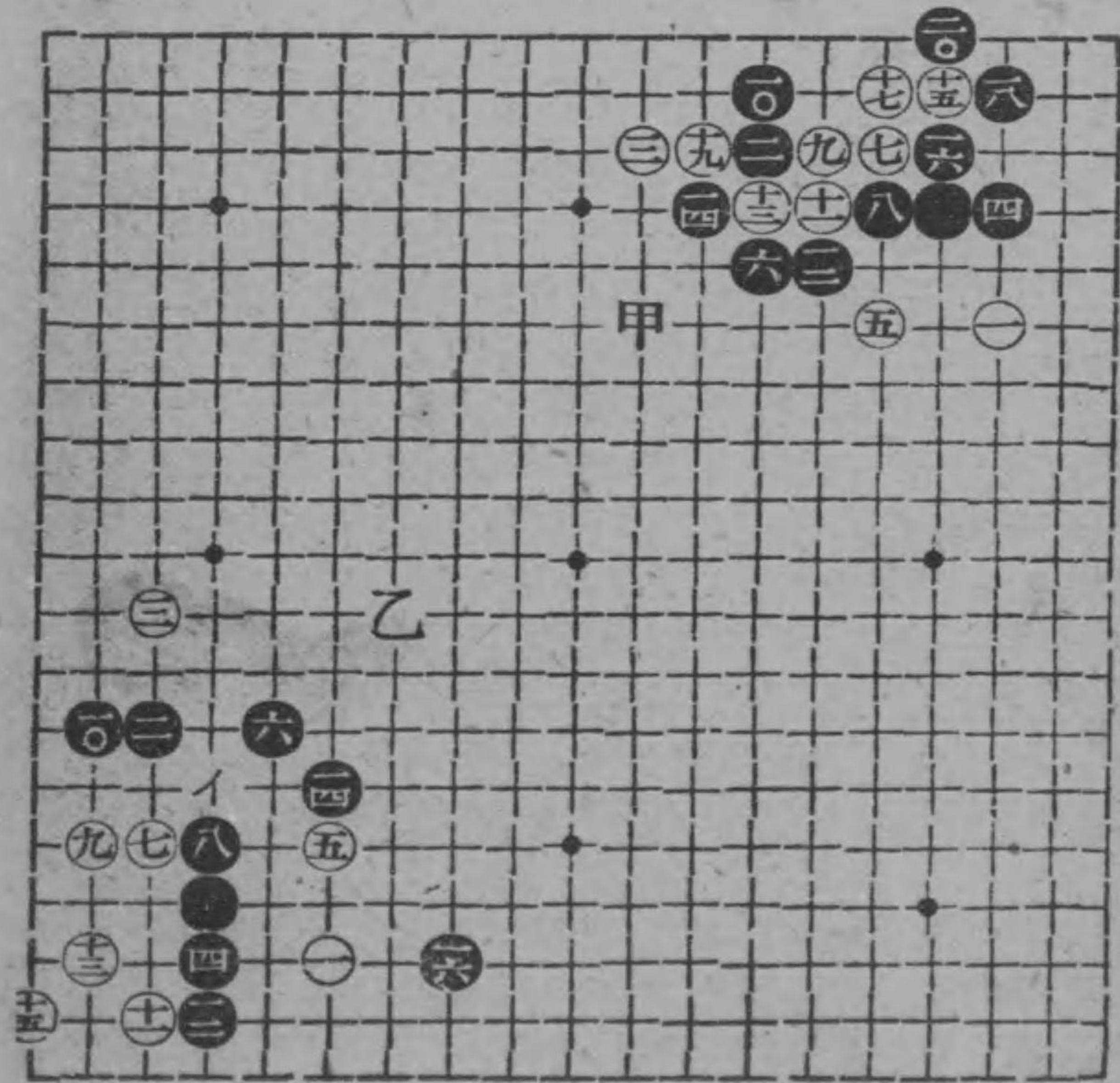
第五十三圖甲は黒六

までは五十一圖甲と全く同じである。

此黒の勢力地へ白が七と打込み九と並べし時黒十の下り肝要なりかくては圖の如く應對ありて白は遂に死地に陥る。

(乙)圖は白が九と下りたる場合にて、之を屠らんとせば劫て攻合敗けとなることあれば黒は寧ろ十四と尖みイ

圖三十五第



の切手と守れば、白は十五と入れて生かせざるべからず、此時黒は十六と白を挾撃するにせば、黒の方非常に有利なる石立となるのである、猶白三の方へかかるもよろし畢竟白七の打込みは非常な無理なる手であるといふことになるのである。

碁で道をつけて
隠居に金を借り

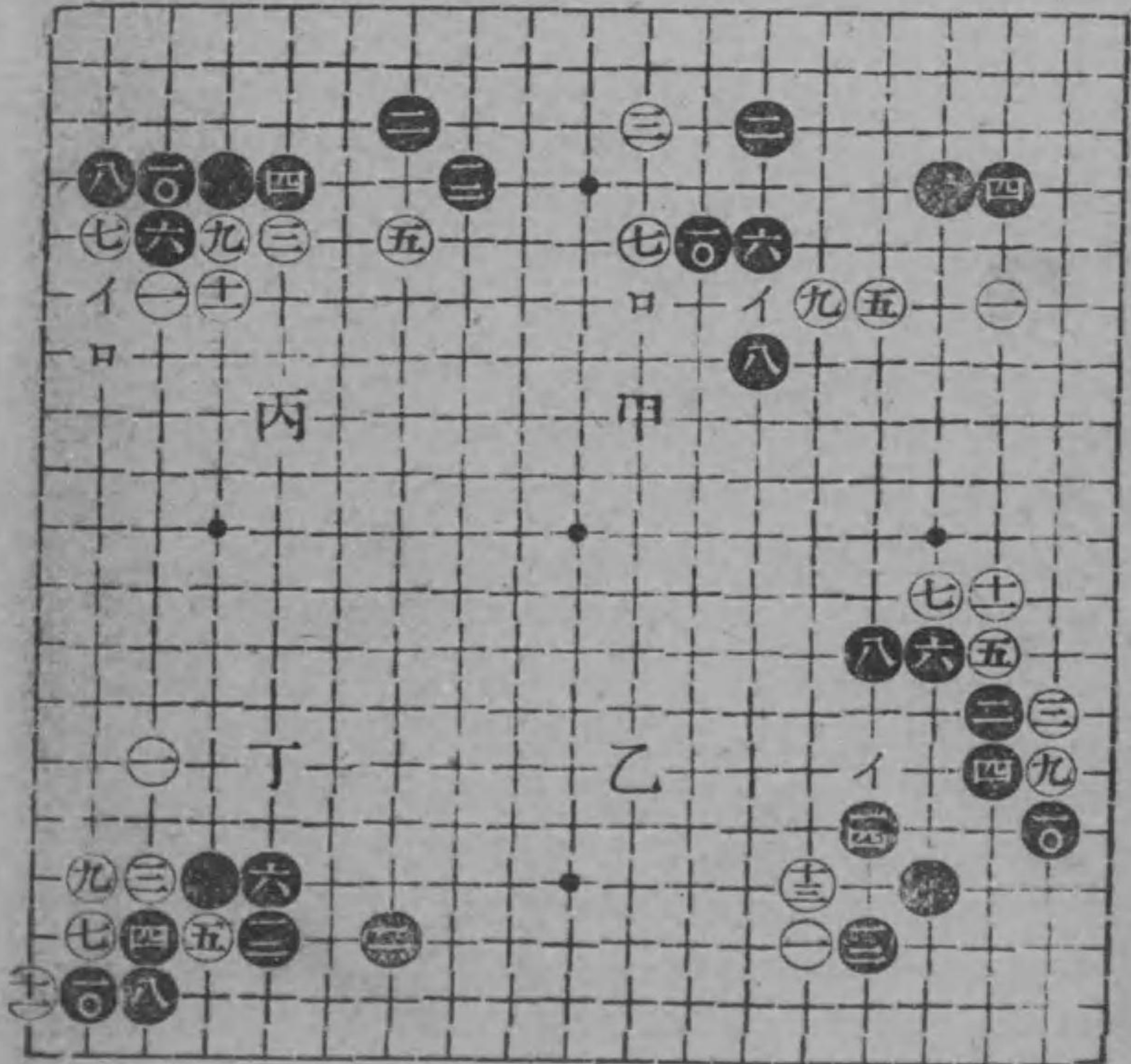
第五十四圖一(甲)白

七と飛び黒八白九のとき、イに粘がないで十に並べる方面白し、口に懸る手を別に生ずるからである。

(乙)白三と附けし場合に黒は此方面を堅く守り置き先手を取りて黒十二と尖みし手甚だ宜し。

白十三と立ちしとき十四の尖み亦必要なり、イに打つもよろし。

第五十四圖



(丙)圖の黒六の尖み大に良し、黒十二の手にて白の一子七を抱き提らんとしてイに打つは宜しからず、假にイに打ち白口に抱きし時、七の一子を提りなば、黒は後手になり、白が好位置に着手すべし、故に黒は先手に十二に尖むべし。

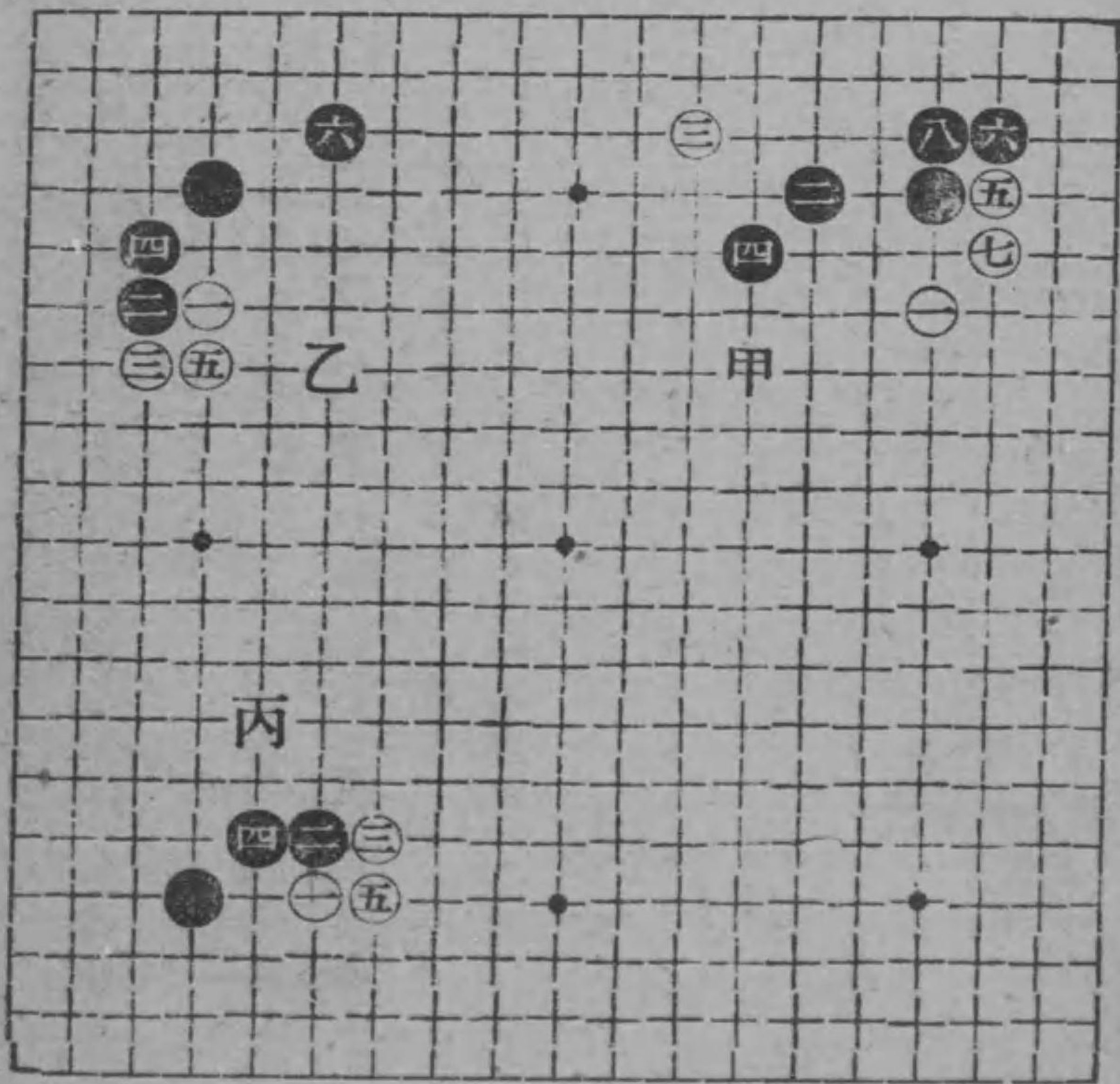
總て尖む手は一方から敵に切られても一方にて粘ぐことを得、即ち周圍に密接して敵の石がない以上は並べて打つと同じ様に連絡を保證され、一線だけ先方へ伸長して打てる特長を持つて居るから極めて堅實な石で變化のある面白く姿勢である。

(丁)白五は圖に於て觀る通り圍殺されましたが、之が爲め白一の方面が堅固になり、黒白五分五分の形勢である、白は五の一目をぎせいに供したのであるが損はないのである(全體からいつて)、黒六は紛れがなく堅くてよろし。

三、一間高懸

第五十五圖(甲)白
 一間高懸に對して黒は
 一間トビに應ずるが最
 も良し、なせならば、
 白の高懸りそれ自身が
 既に小桂馬懸りと違ひ
 専ら中央に發展する目
 的を有するものである
 から黒も同様の目的に
 向つて進まんためにて
 大桂馬の受けより此方

第五十五圖



がよろし。

黒四の尖みは此構への生命とする良手である、即ち中央に發展を求むるに好着手であります。

白一間高懸に對しては(甲)の一間トビを最上としますが、(乙)及(丙)の如くに小桂馬の頂に應ずる手もある、(乙)は外より頂たるもの、丙は内より頂たるものにて(乙)は隅の守りを目的とし、(丙)は専ら中央に地をつくらんとするのであります。

競ふ碁に

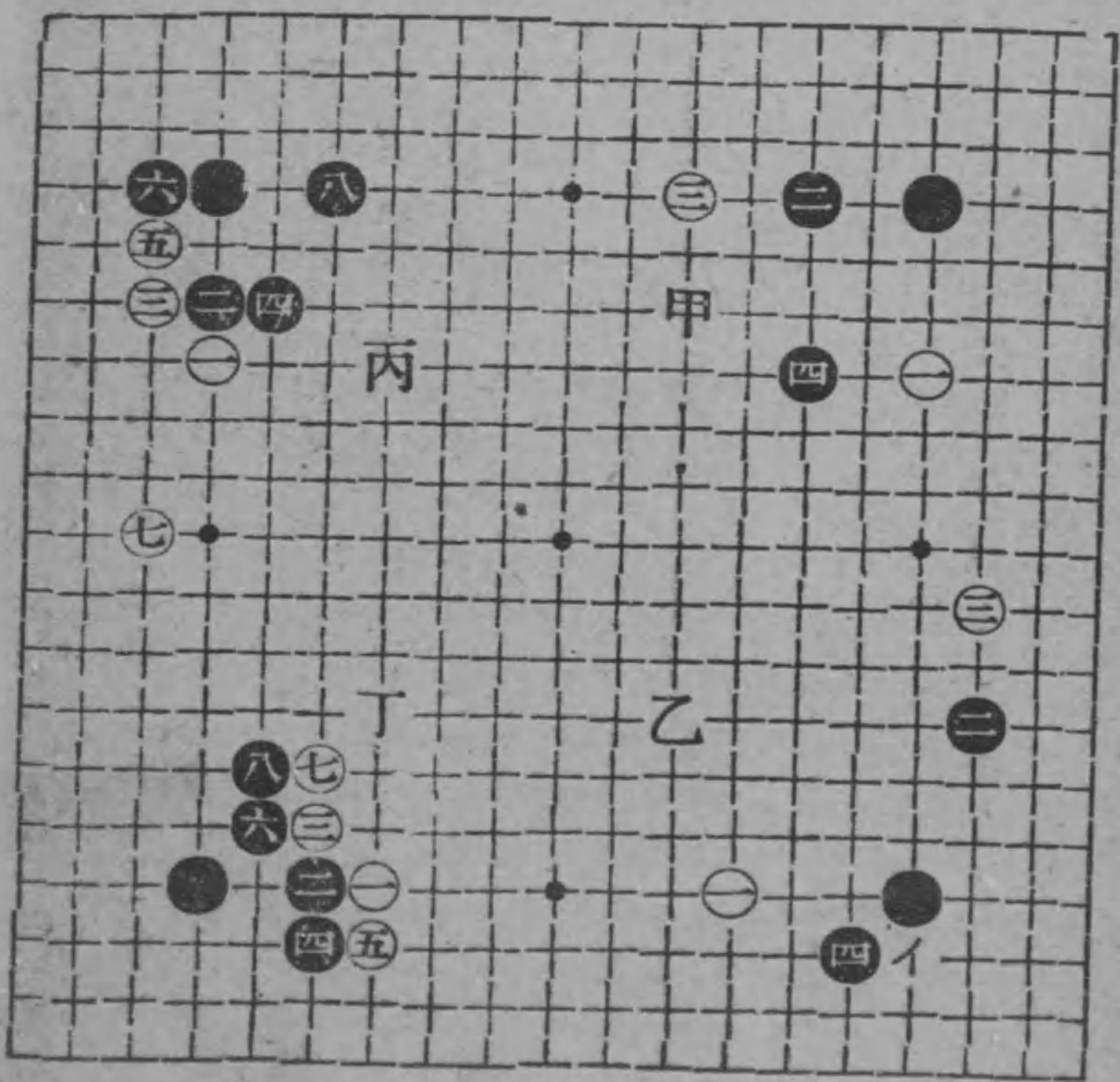
蚊はしたたかに太りけり

四、二間高懸

第五十六圖は白の二間高懸の場合を表はしたものである。

二間高懸に對して黒は一間高懸の時と同じく一間トビに締るが最上の應手である、(甲)の黒四二間トビに大きく出でたる所よろし。(乙)の大柱馬に受けたるは其目的が隅の防

第五十六圖



衛にあるから、四と尖みたるなり、イに下るよりも此姿勢に對しては大きく四と尖むがよろし。

(丙)は二と頂けたり、白三と外より縛ねたるときは第一の小柱馬懸りに對する頂玉と全く同様となる。

(丁)は白が内側より應じたる場合にて、黒は四と下ること必要なり。

辛棒する碁に

勝がなる

(これは「心抱する木に金がなる」に語呂を合せたもの也)

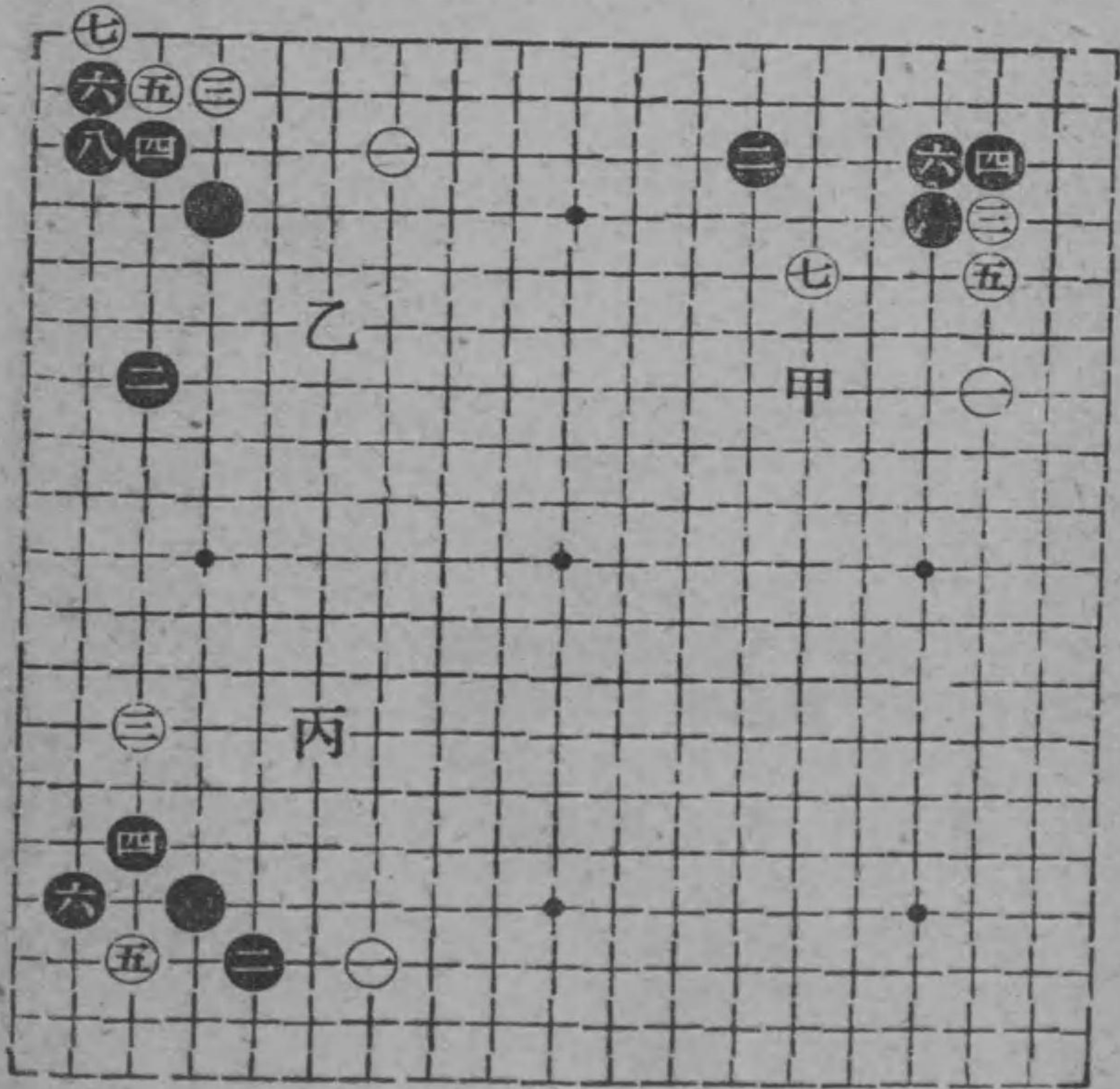
五、大桂馬懸

第九十七圖—(甲)白大桂馬の懸りに對しては黒も大桂馬の受が最もよろし。

(乙)白が三と突込みしとき黒四の受けは堅固なり。

(丙)黒二の尖みは古風な手である、あまり委縮する事になる、白五は黒六の爲め死ぬ。

第五十七圖



六、大々桂馬懸

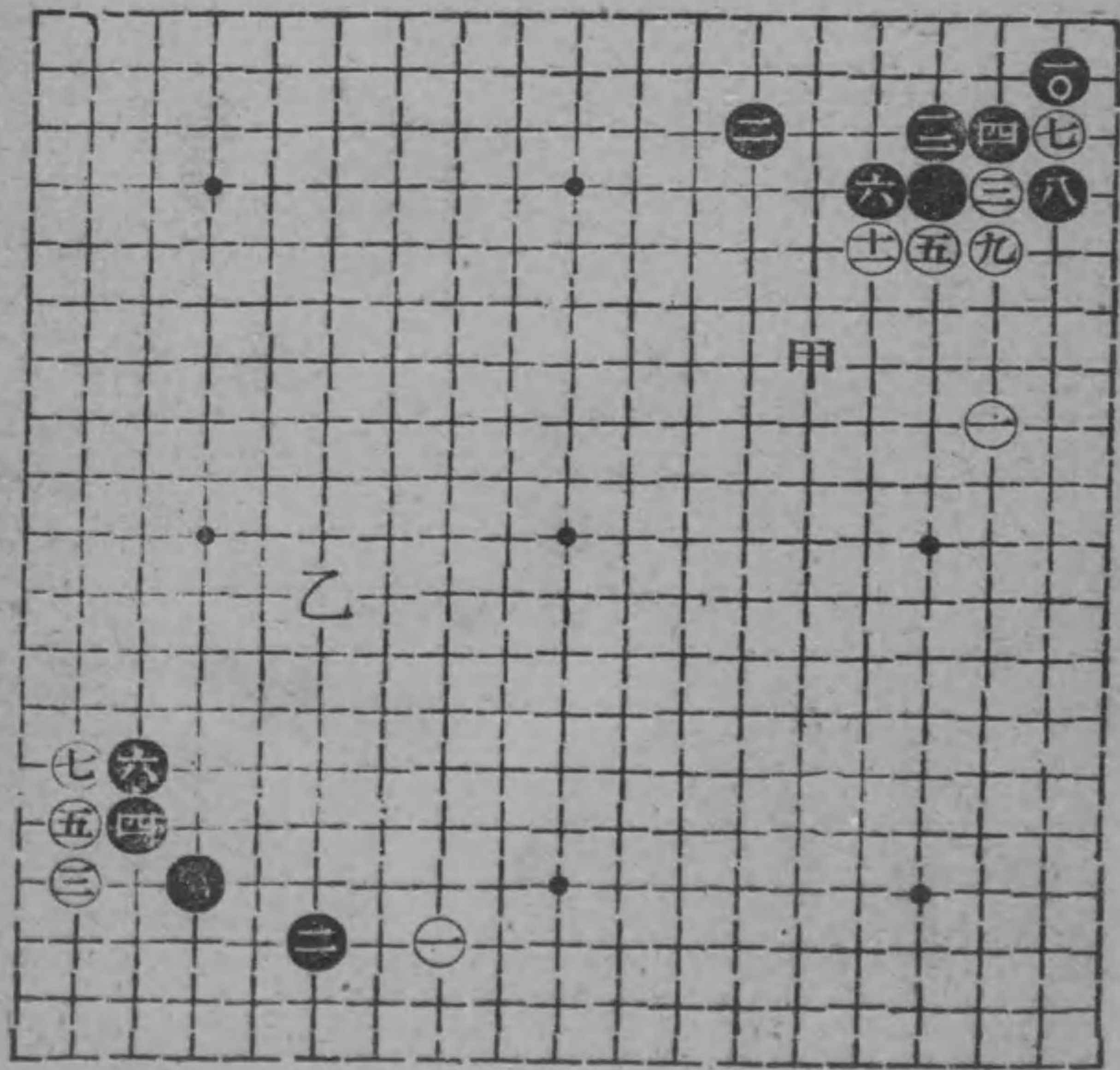
白一の大々桂馬には大桂馬懸の如く、大桂馬の受けが一番良い

第五十八圖—(乙)の如く小桂馬に應ずる場合は白一を攻める關係上打つのである。

猶此懸りは置石に對して遠きに過ぎ懸りの効力が薄弱、あることを忘れてはならぬ。

圍碁速進講義

第五十八圖

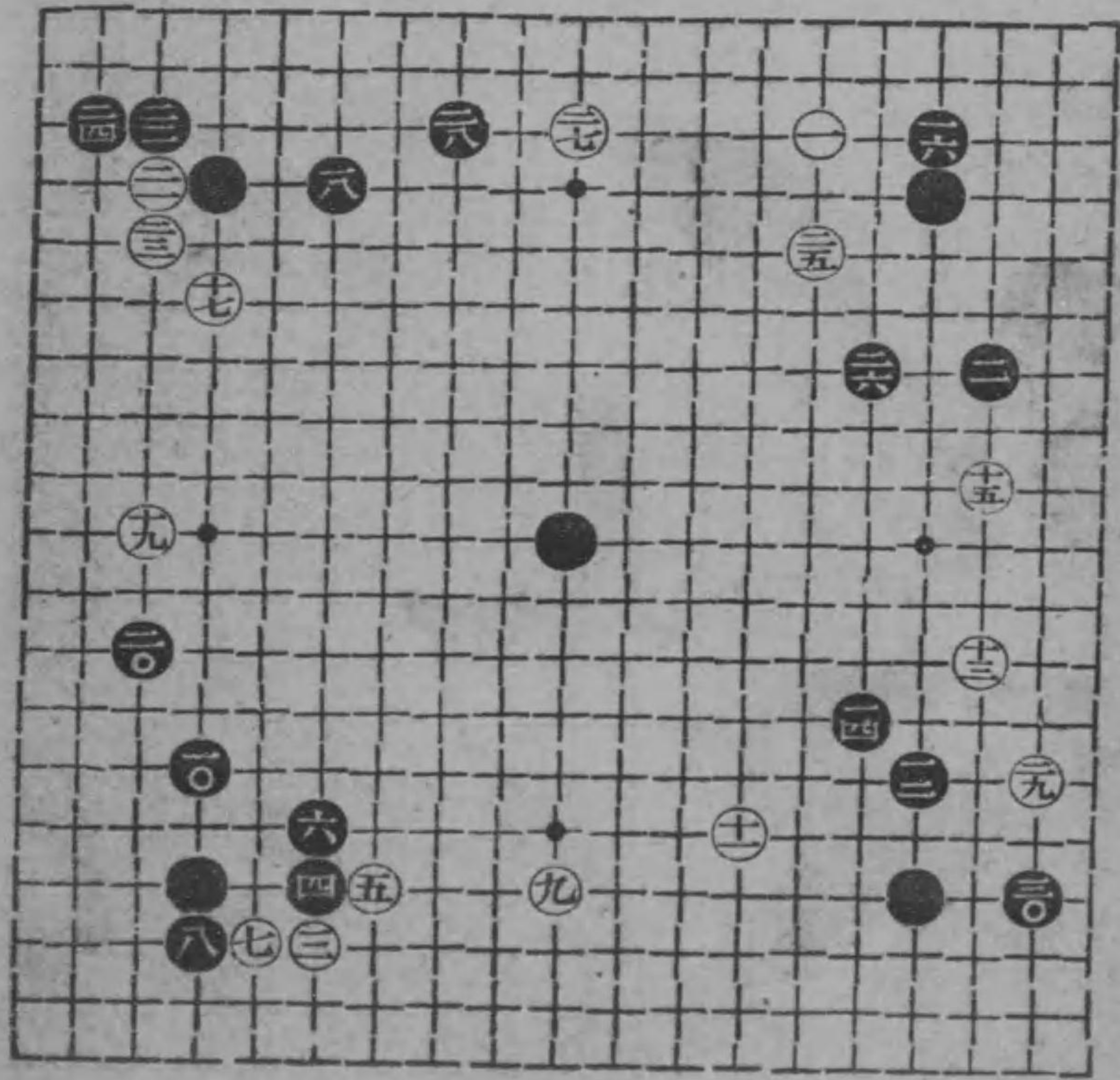


石立の事

置碁の石立とは布石
又は配石とも稱へ、如
何に石を布たらよいか
を研究するのである。

第五十九圖及第六十
圖は五目の置石に對す
る石立の大體につき一
例を掲げたものです。
五目の置石は四隅と
中心の最も重要な箇
所に根據してゐますか

第五十九圖

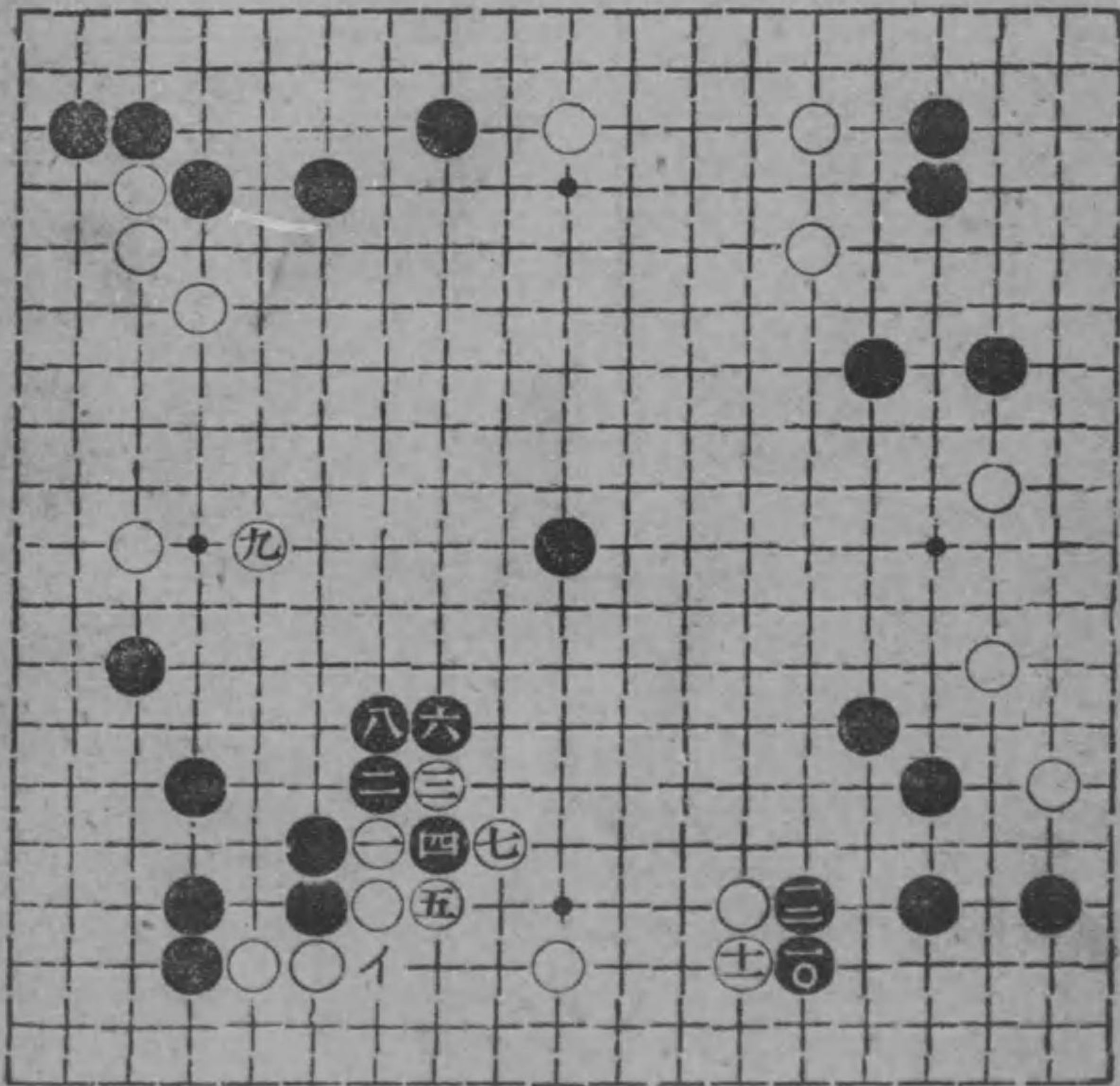


此置石を基礎として
定石を應用して打てば
よろしい。

總て置石のある黒の
方は常に守備に務め置
石を充分利用せなければ
ならぬ、かくすれば
敗れたりとも極めて少
數にして概堅實な勝
利が得られる。

第六十圖黒二の綽ね
及四の切よし、白五は
イに切られるを恐れて
外から向ひたるなり。

第六十圖



第六篇 互先定石及石立

互先定石

互先定石に關しては先づ打始めに就て説き、次の各項に分ちて解説せん。

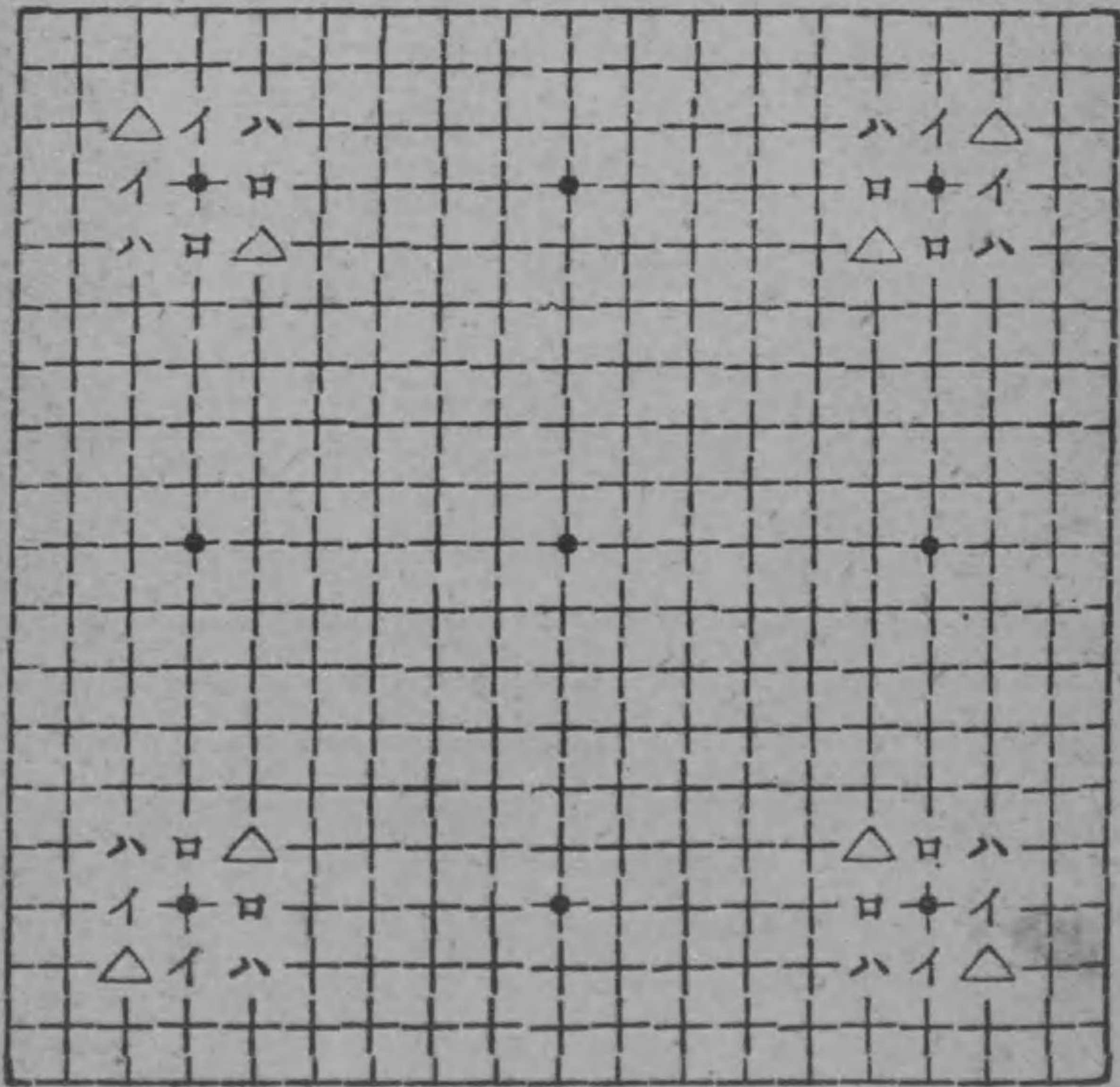
- 一、小目尖
- 二、小目一間夾
- 三、小目二間夾
- 四、小目三夾
- 五、小目高懸
- 六、高目
- 七、目外
- 八、縮及縮へ懸方

打始め

前にも説いたことのある通り盤面中四隅が地域を構成するに最も優つた所である、されば互先の碁に於ては黒白何れも隅から着手するが常法である。

其隅の中でもイ、ロ及ハの三箇所より打始めイを小目、ロを高目、ハを目外と稱し各二箇所

圖一十六第



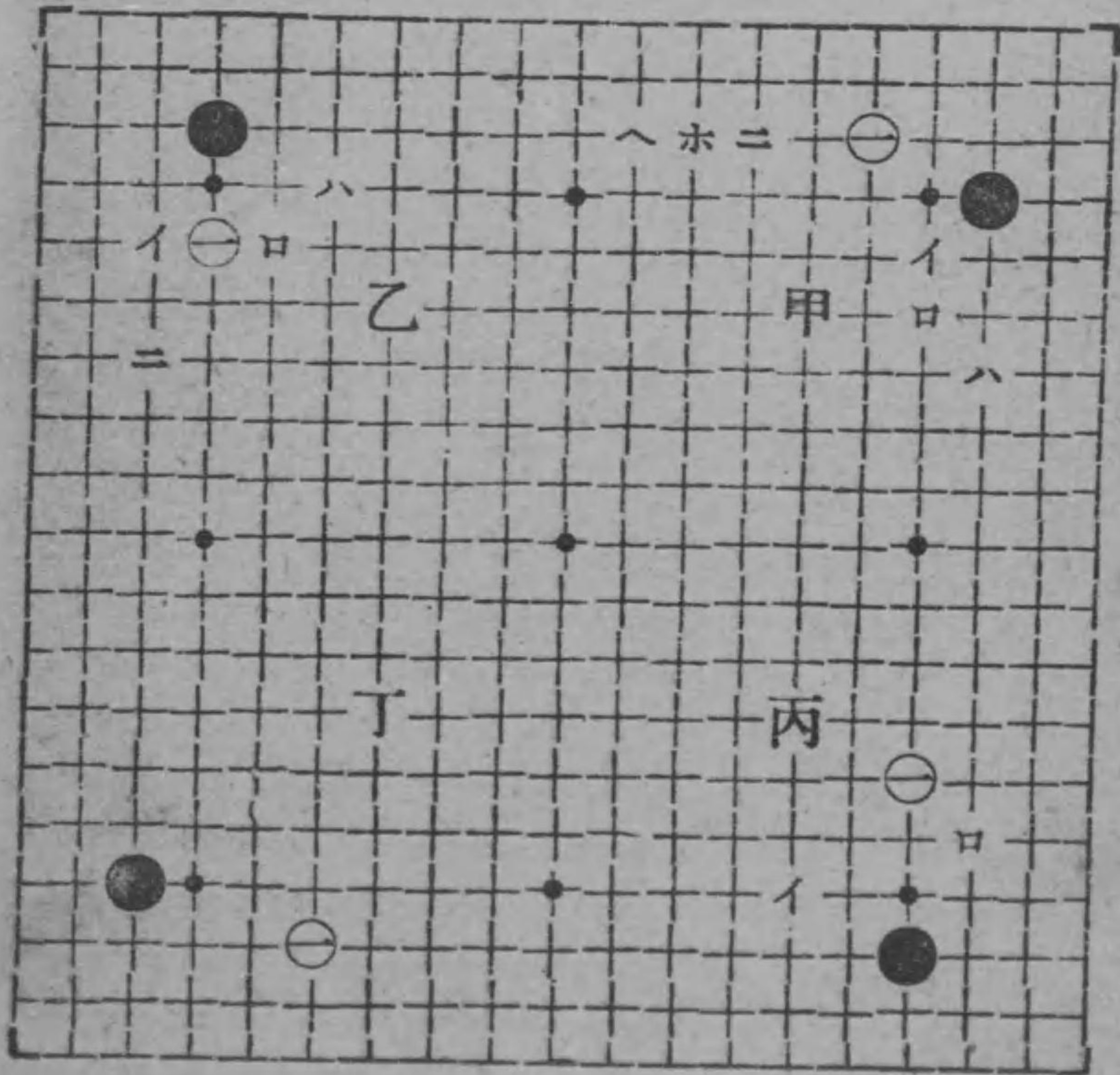
所あり、白は時として星の上に打つことがあ
るが△印に打つことは
宜しからず。

右三種の中で小目が
一番多く用ひられる、
之は最も堅實なからで
ある。

黒小目に對し白の懸
り方が普通四通りある

第六十二圖(甲)は
小桂馬懸(乙)は一
間高懸り(丙)は二
間高懸(丁)は大
桂馬懸である

圖 二 十 六 第



八〇

右の中で甲が最も普通の懸りにて丁は用ひられる事が至つて少ない。

第六十二圖(甲)——白の小桂馬懸りに對して黒はイと尖むが攻守兼備の手で最も多く使用せらる、ロに小桂馬に走り或はハに行くこともあるが、之は左右に石がある場合でどちらかと言へば守勢的である。

ニと打つは白を一間に夾むので進取的である、ホに打つは二間夾、へは三間夾の打方である、即ち白の小桂馬懸りに對してはイに尖むか一間或は二間三間に夾む手が最も普通であります。

(乙)白の一間高懸りに對してはイと内から頂けるが堅實で最も多く行はれる、尋でロと外頂の手もあり、ハに小桂馬に走り、或はニと白に小桂馬に懸りて夾む手もあり。

(丙)白の二間高懸りに對してはイが最も宜し、時にロに應ずることもある。

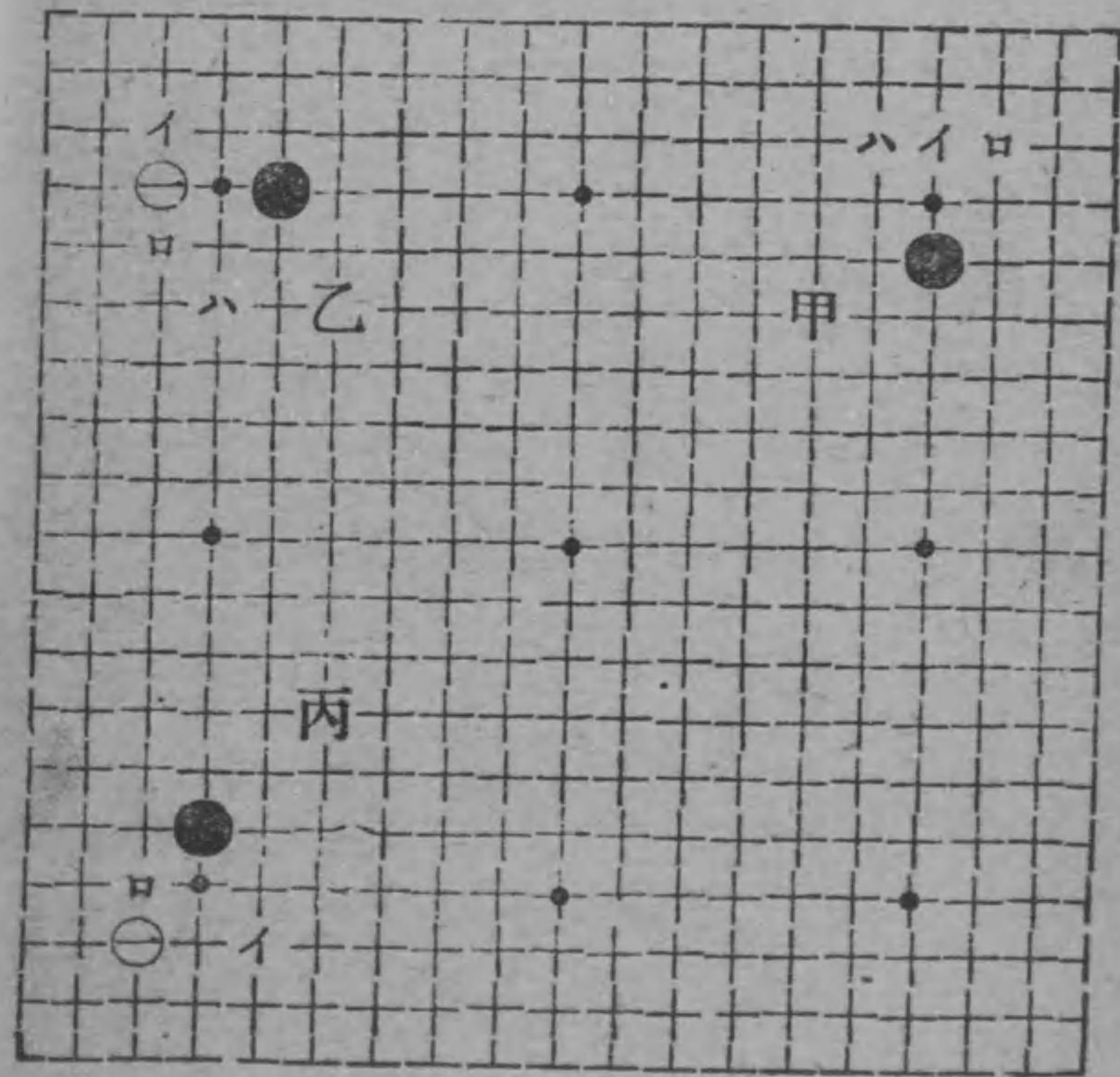
(丁)白が大桂馬に懸りし時は手を抜いてもよく、白一を夾みてもよろし、之は白として特別な懸り方で他の石との配石上用ふるものである、随つて黒もそれに應じて打てばよい。

第六十三圖(甲)黒の高目に對し白はイ及口に懸るを普通とする。ハの懸りは稀に用ひられる。

(乙)白一の箇所の懸に向ひてはイと内頂にする。口と外頂にするの及びハに小桂馬に走る手がある。

(丙)白一の所の懸りにはイ及び口に應ずるが宜し。

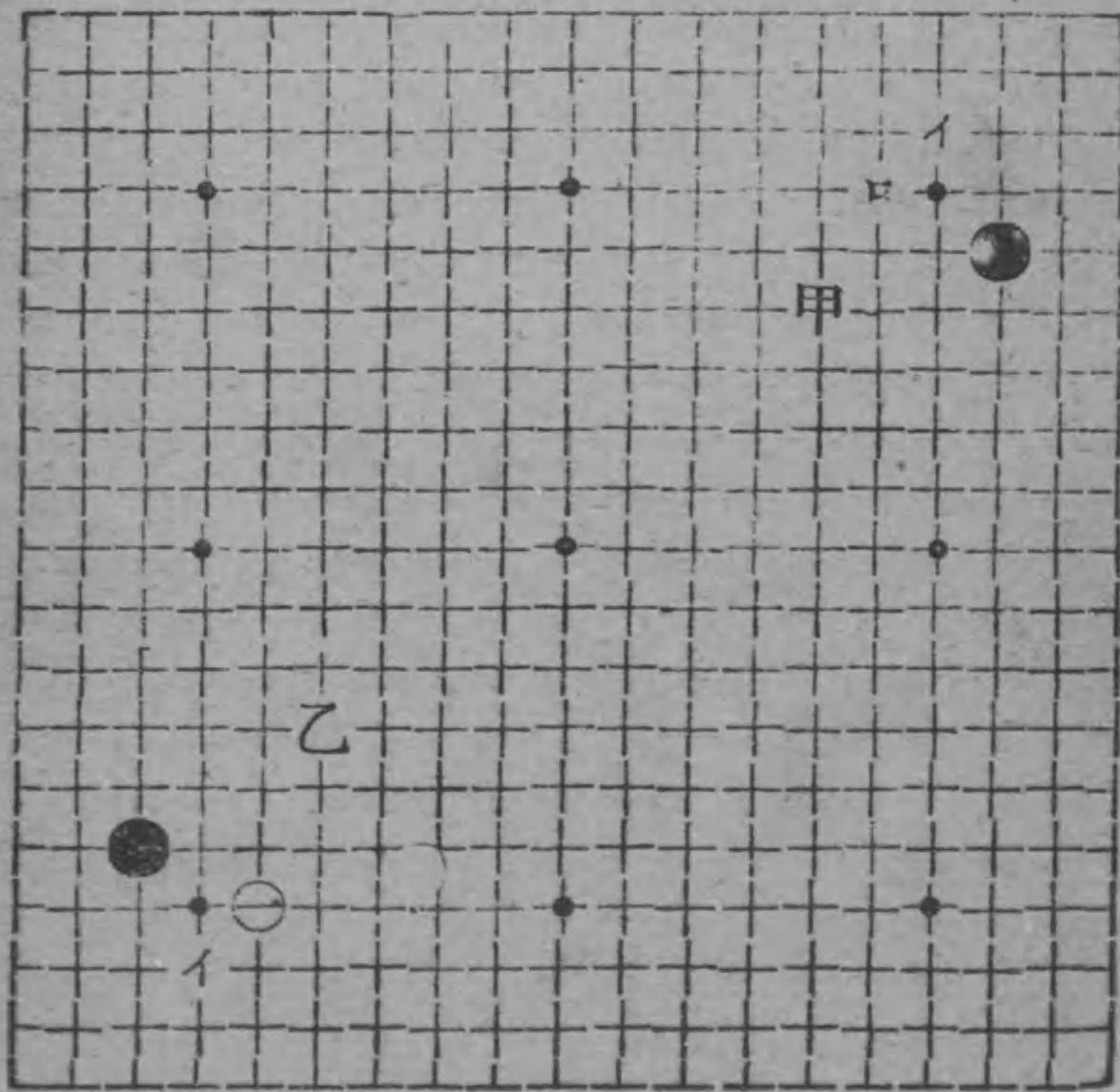
圖三十六第



第六十四圖(甲)の如く黒の目外に向つては白はイ及口に懸るがよろし。

(乙)白一の箇所に懸りし場合は黒はイに應ずるを最適當とします。

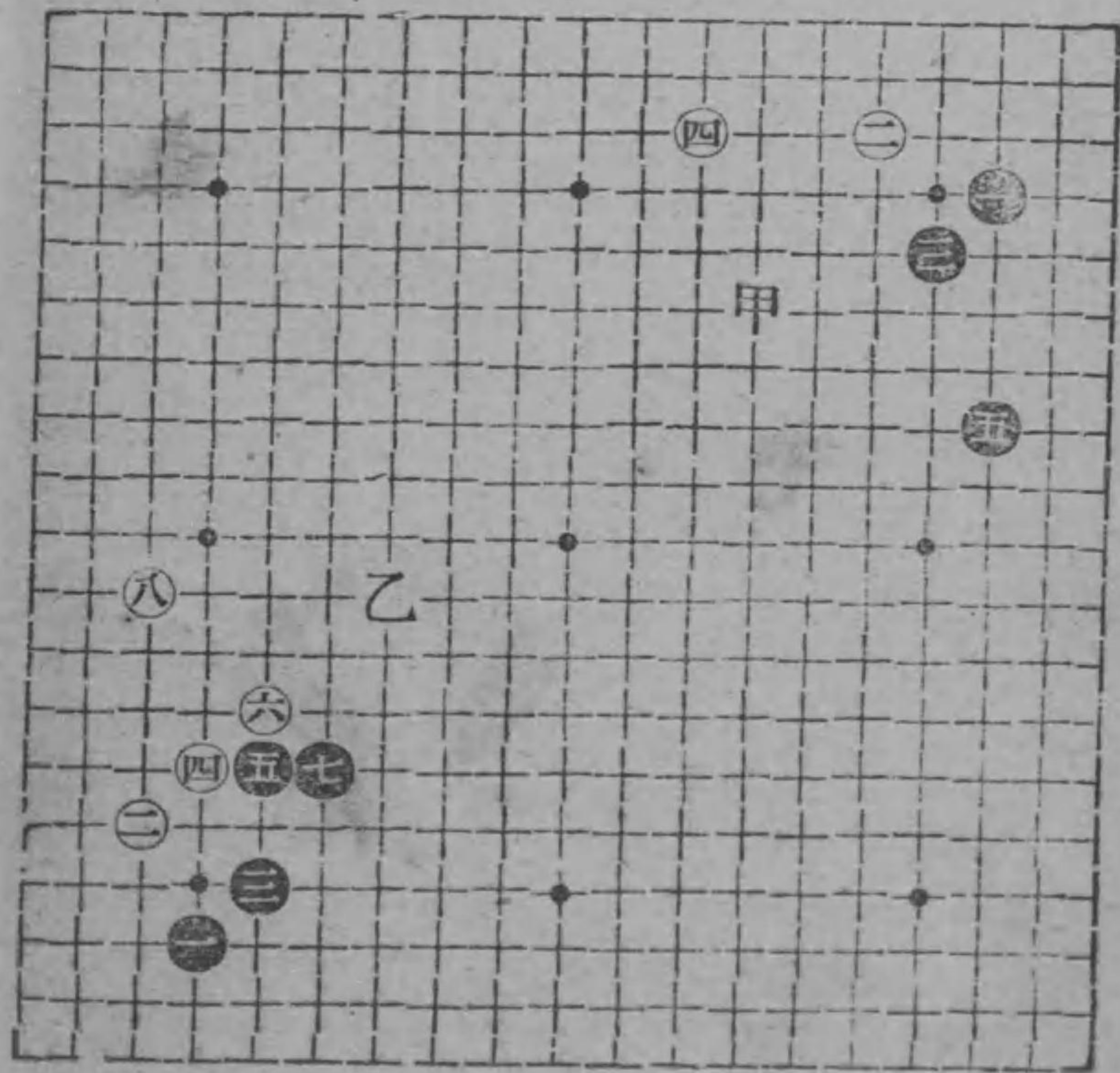
圖四十六第



一、小目尖

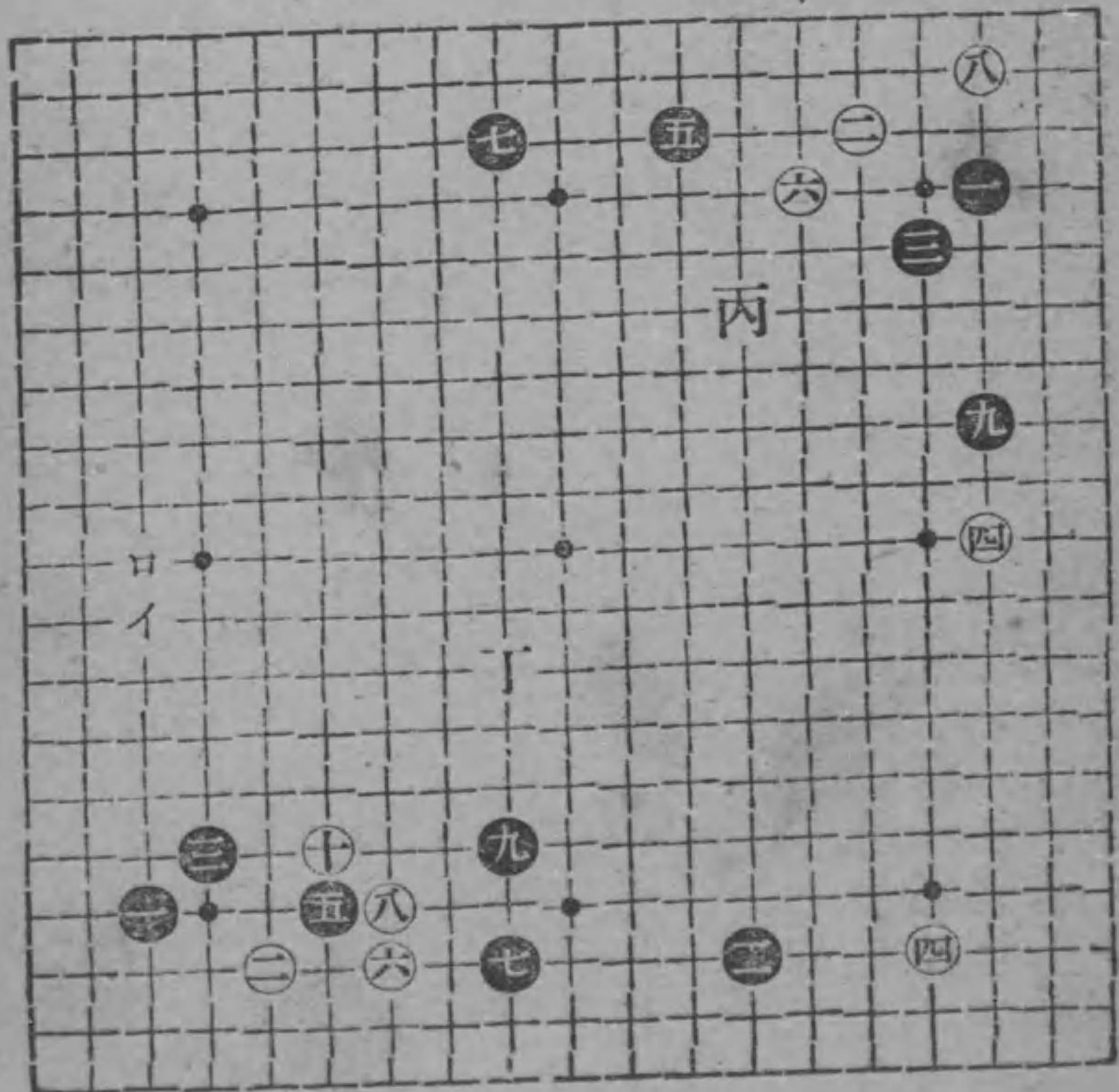
第六十五圖(甲)黒一
 小目に對し白の小桂馬
 懸の時三と尖みたる場
 合にて、白四と開き黒
 も五と開きたるは堅固
 で頗る平凡な手である
 (乙)は白四と尖み所
 謂尖合ひであつて黒五
 の手肝要なり、これも
 變化に劣しいから近來
 多く使用されない。

第六十五圖



第六十六圖(丙)白四
 と中邊に掛りし時黒は
 五と二間に夾むを好着
 手となす、白六の尖み
 に對しては七と縮り、
 白八と隅を占領せば、
 黒も九と縮るべし。
 (丁)圖白四の手抜き
 の時黒五と迫る手宜し
 黒七にてイ或はロに開
 きて大きく構へる着手
 もある。

第六十六圖



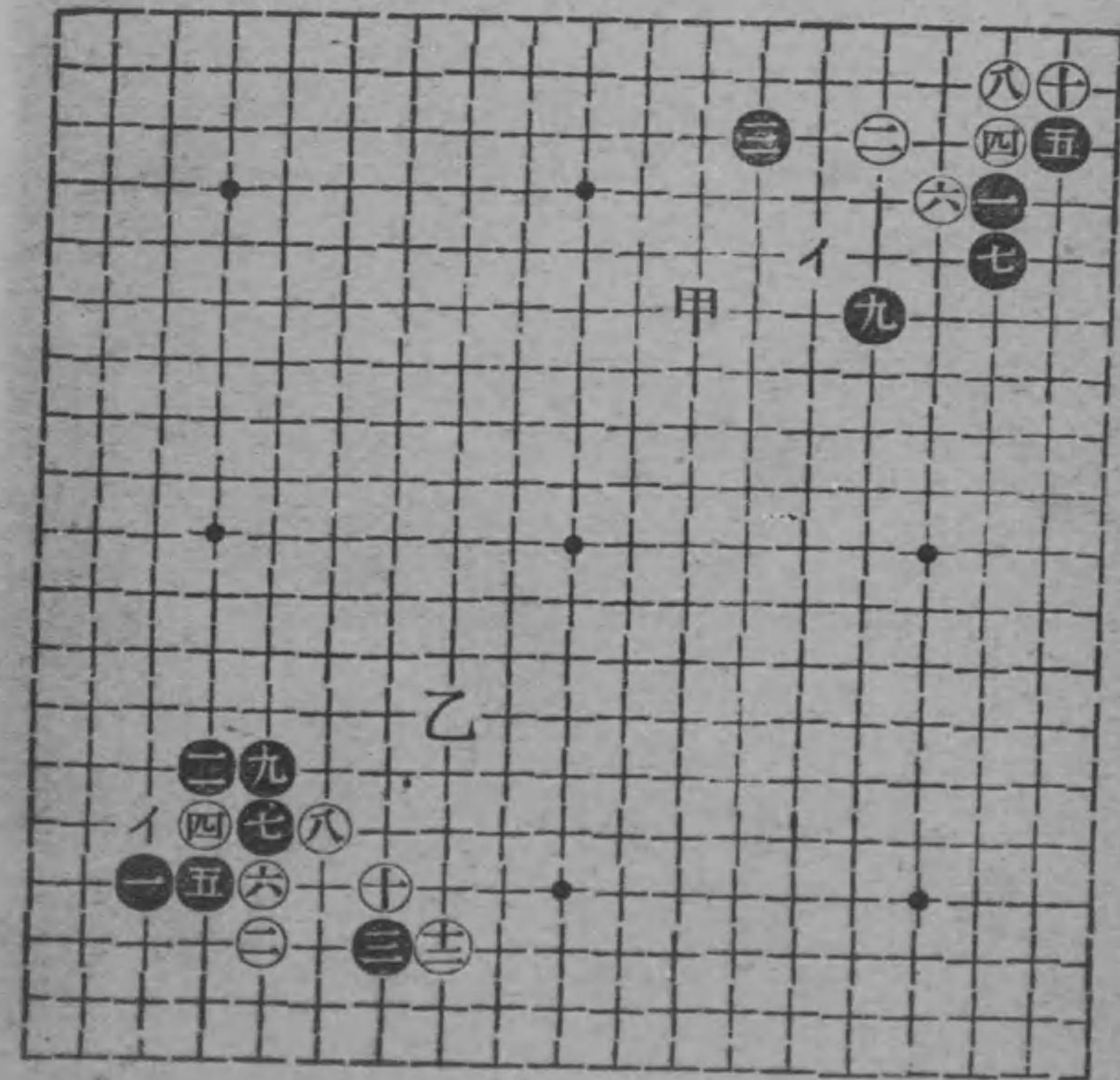
二、小目一間夾

第六十七圖(甲)黒が

三の手で一間に迫つた所である。

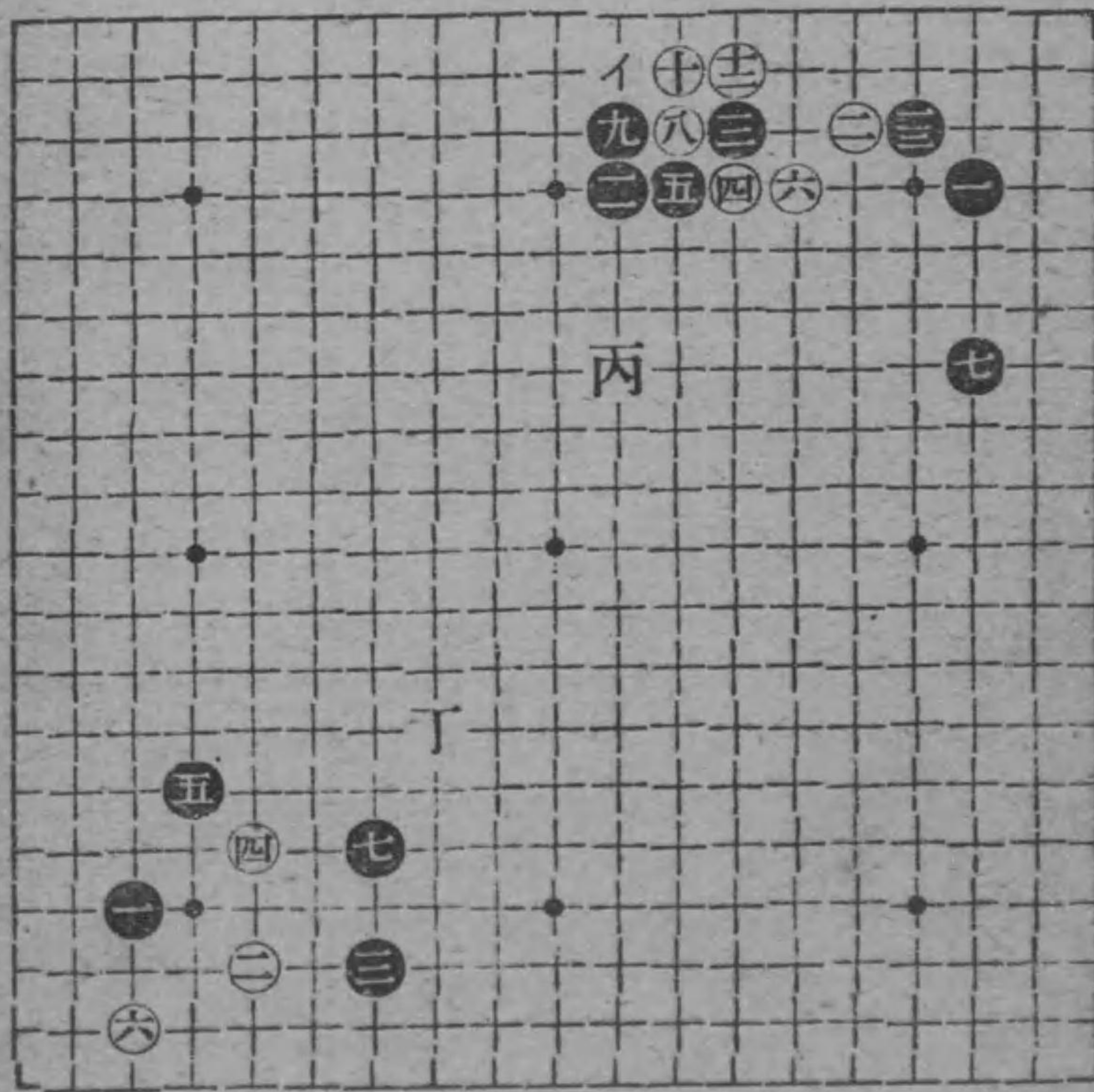
白十の手でイに突出してもよろし、黒九は尋いで白を包圍する姿勢であるから、白はイに出るか十に下りて生を保證せねばならぬ。
(乙)黒七の切を止めてイに伸びる手もある

圖七十六第



此形勢白黒五分五分であるが、切手は損する場合があるから注意せねばならぬ。
六十八圖(丙)黒十一の粘ぎ肝要なり、イへ打つと十一の所を切られ後手になる憂あり、此形勢にては黒の方よろし。
(丁)圖の如くなりては白の方不利益なり。

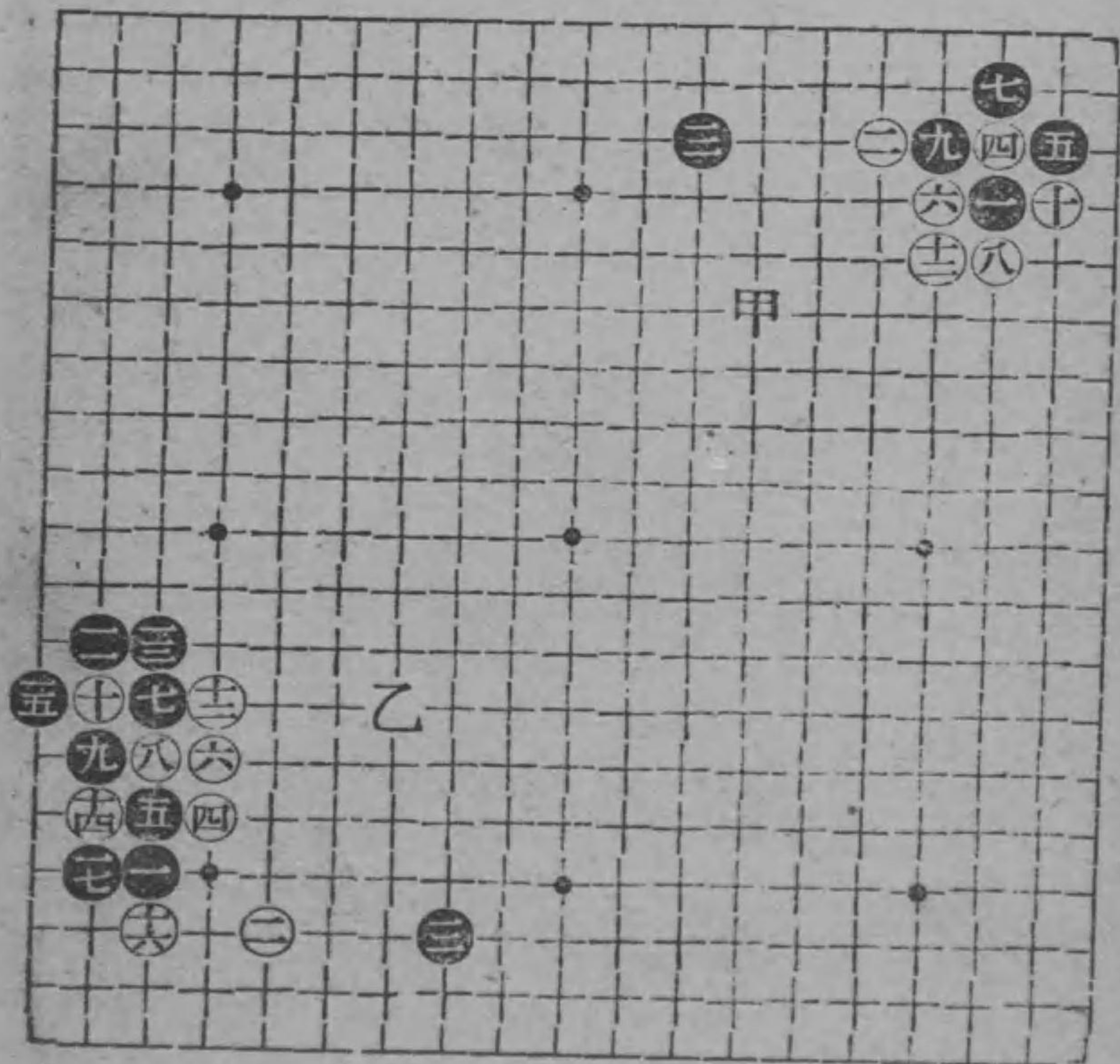
圖八十六第



三、小目二間夾

第六十九圖(甲)は黒が三の手で二間に夾みし所にて、白が四と頂けて早く此隅を決定せやうとする定石は一間夾及次の三間夾の時にも用ひられることがある黒が七にてまがりたる時は圖の如く占領地が交換されることになる、黒十一はつぐ。

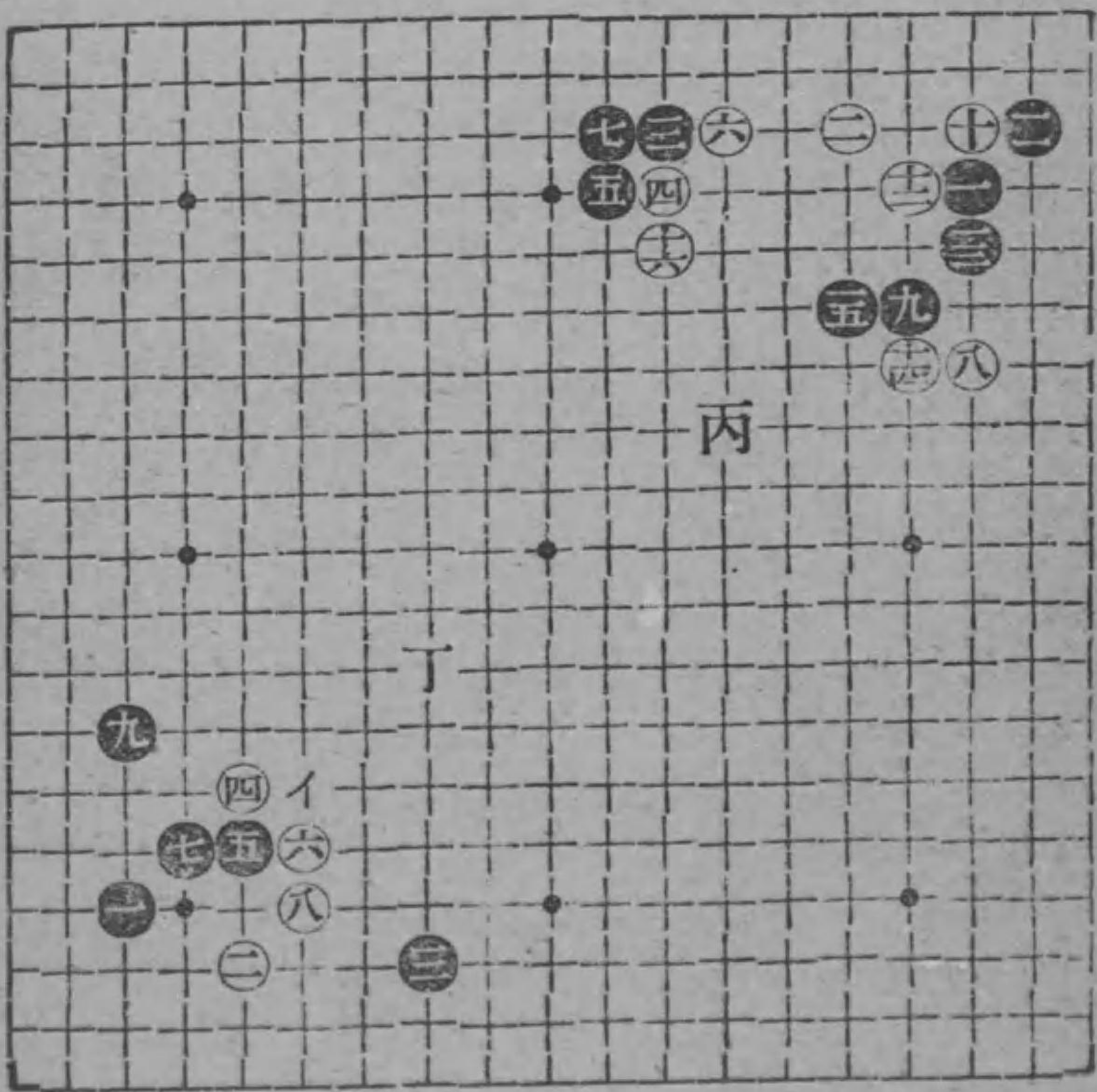
第六十九圖



(乙)圖白十二の時十

の一目を提るはよろしからず、白から黒十三にあてられ此方面黒が狭くなるからである、此形勢にて白の石充分堅くないから宜しからず、此も一間夾及三間夾にも應用され黒七から種々な打方がある第七十圖(丙)黒七及九の手肝要なり。同(丁)黒九の手でイに切る手もある。

第七十圖

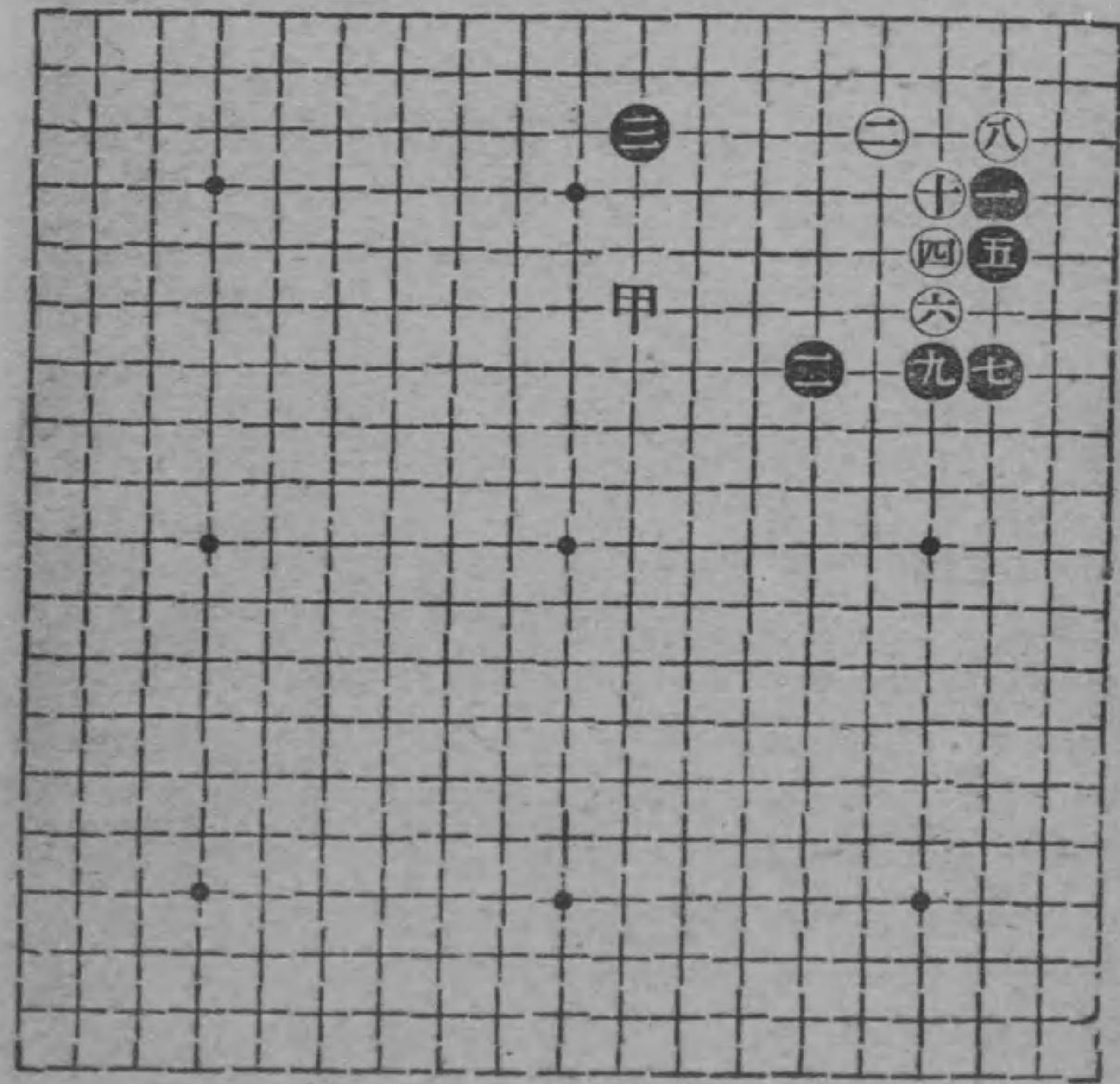


四、小目三間夾

第七十一圖(甲)は第六十九圖乙と黒七まで全く同じである。此に於ては白が早く締りをつける手段として八と隅、着手したり、黒九及十一よろし。

前にも述べて居いた通り是等の定石は一問夾二問夾にも應用が出来る、只今後の着手に

第七十一圖



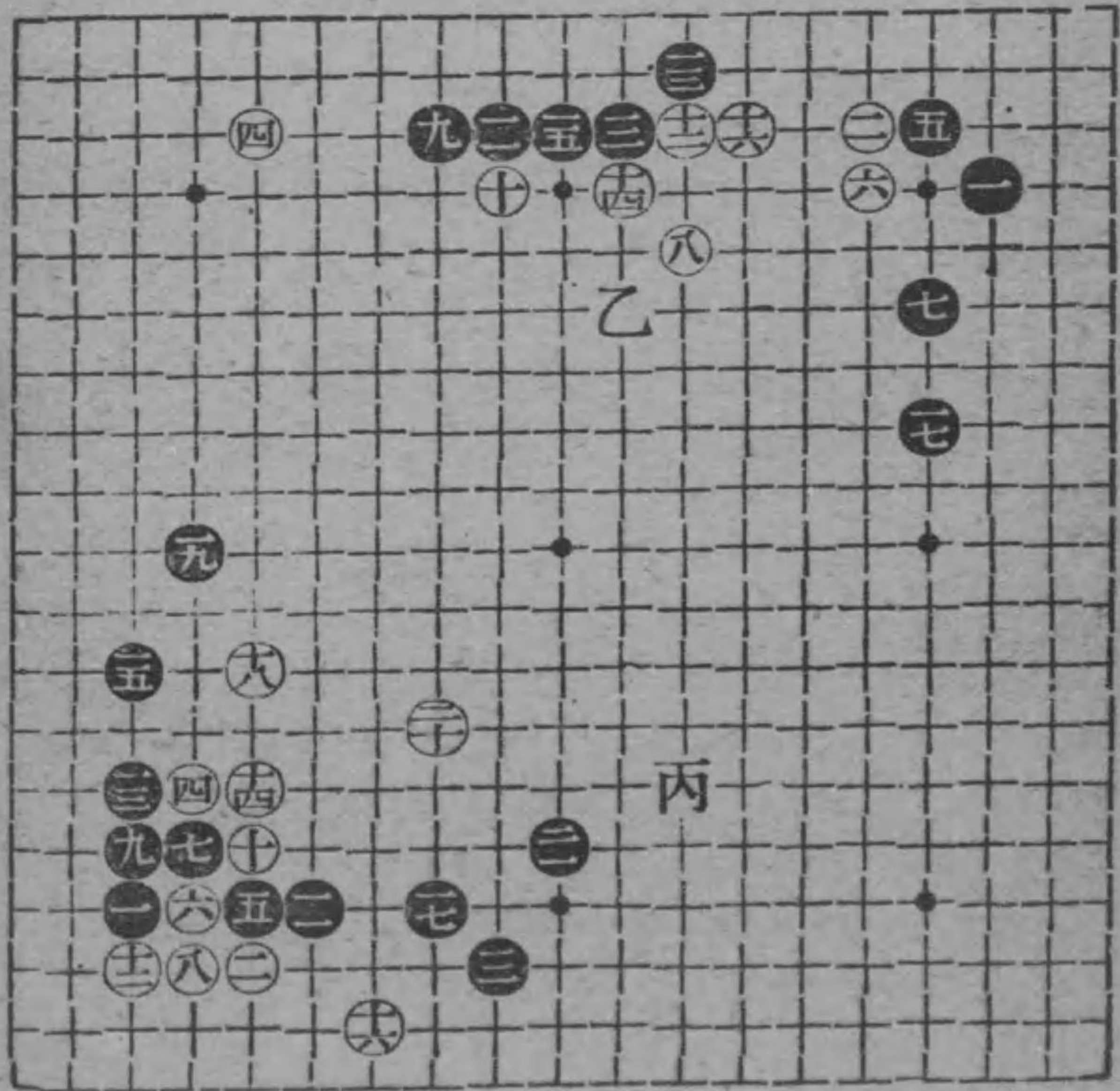
幾分趣向を要するのである。

總て三間夾は白二に響が弱いから、白は乙の如く手を抜いて差支へない、それだけ變化に富むことになる。

(乙)及(丙)とも白黒五分五分の形勢である

(乙)の黒七(丙)の黒十九、二十一共に妙手なり。

第七十二圖

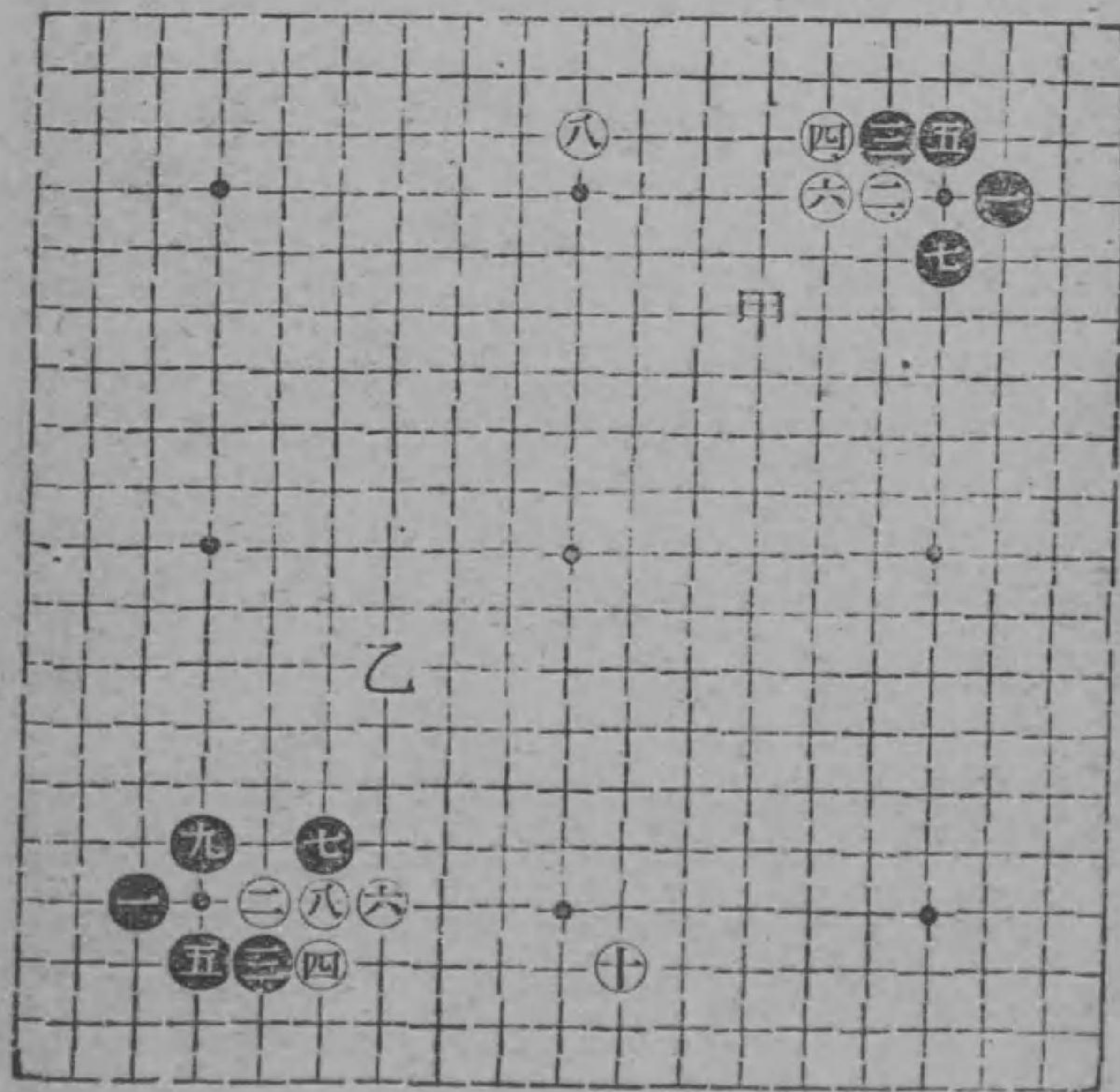


五、小目高懸

第七十三圖 甲) 白が一間高懸に來りし時、黒は三と内頂にするが黒として最も堅くて隅を守るによろし、黒七の尖み肝要なり、白八の開きにて互角なれど黒の方堅いだけよろし

(乙) 一圖 白六がカケツグ時は黒は七と覗く方有利なり、白十は甲

圖三十七第

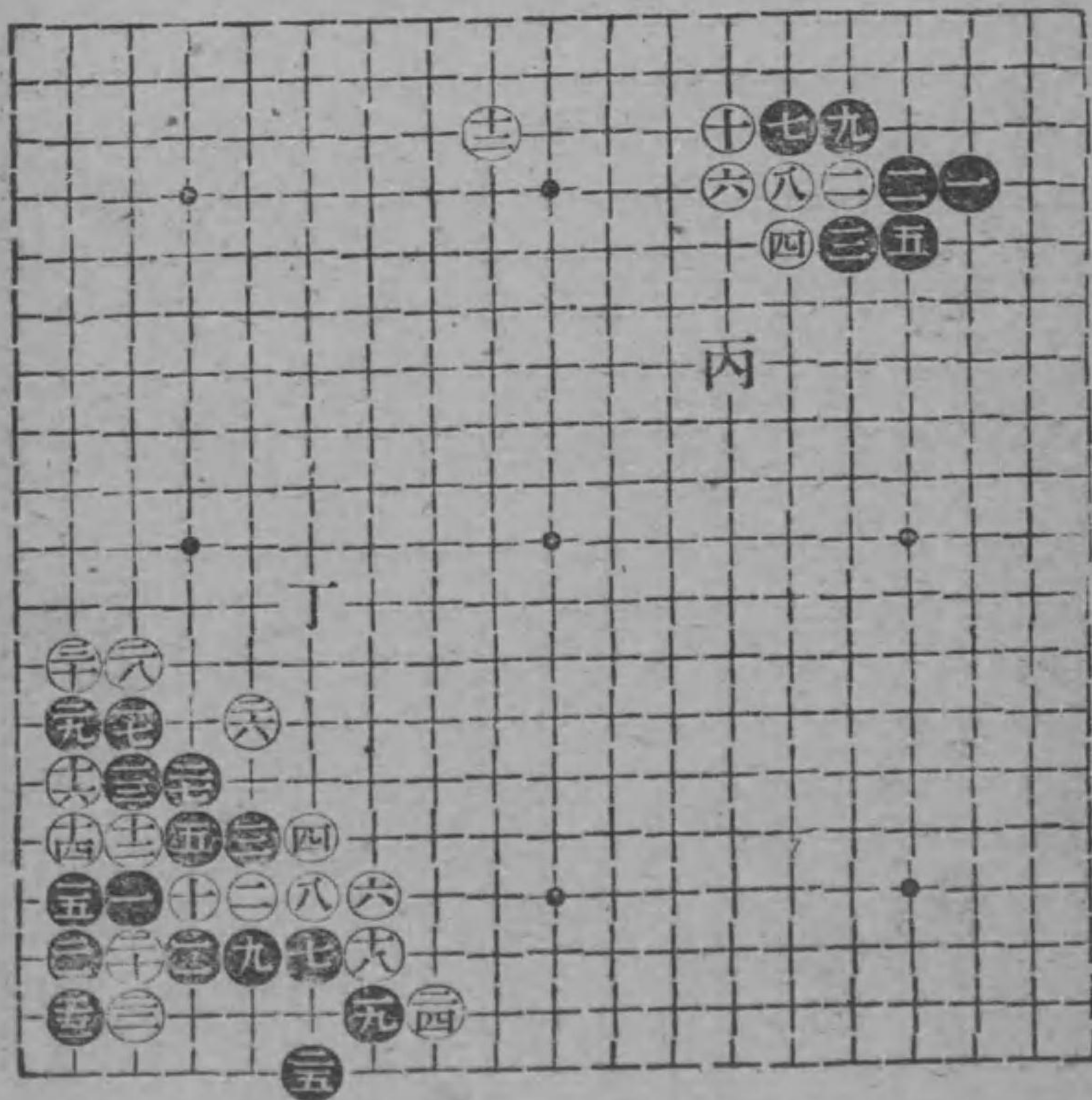


より一間廣く開く方よろし。

第七十四圖 (丙) は白が外頂に應じたるなり 白六は白八の所に粘がないでカケツギの方一般に用ひらる。

(丁) 圖は白が十の時マガラないで猶突入したるときの変化を示すものである。白三十までにて黒は隅を全部占領したれど、白に外側を全部封じられたから

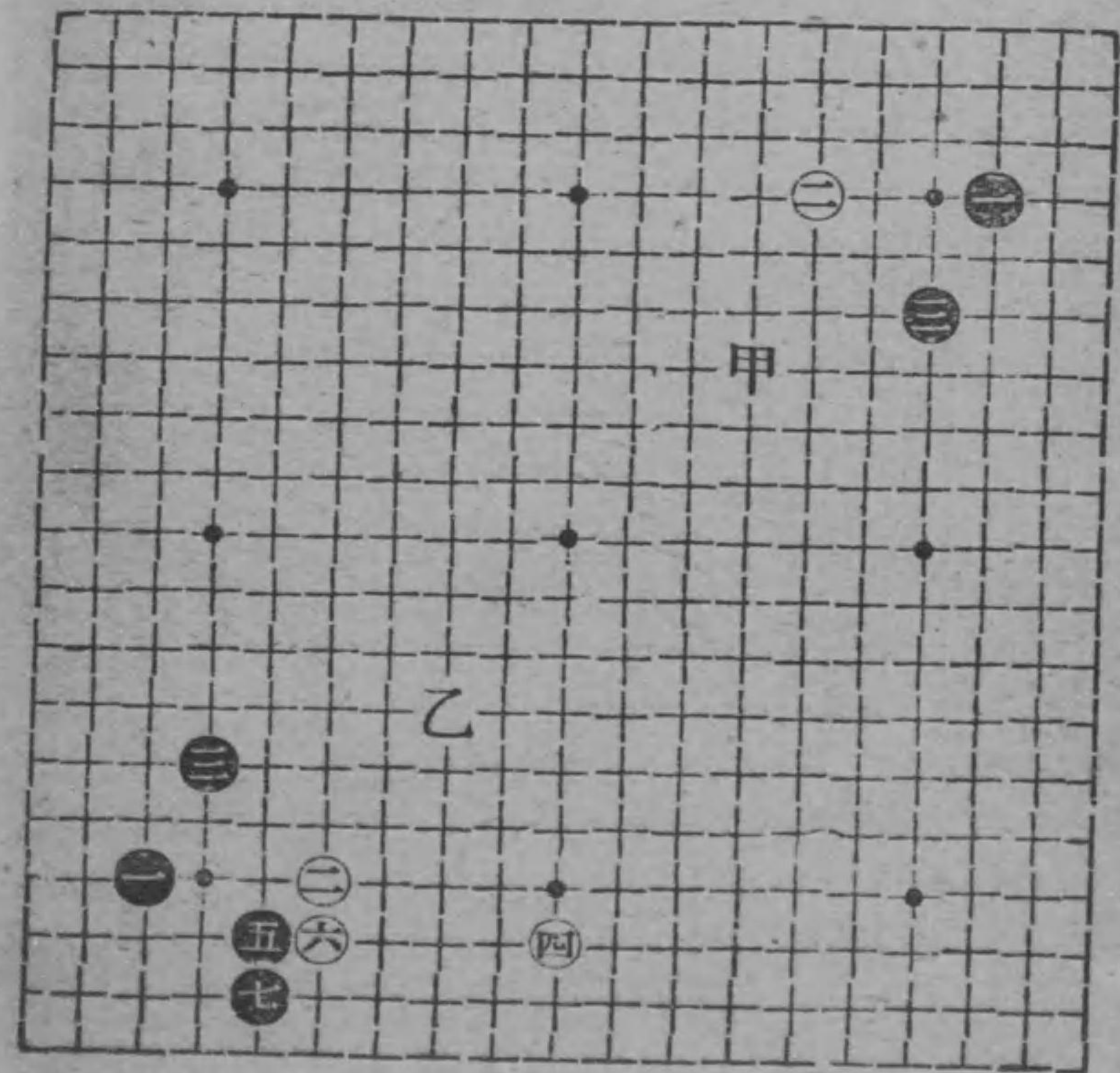
圖四十七第



決して黒が有利だとは言へない、他との関係上かくする場合もあるなり。

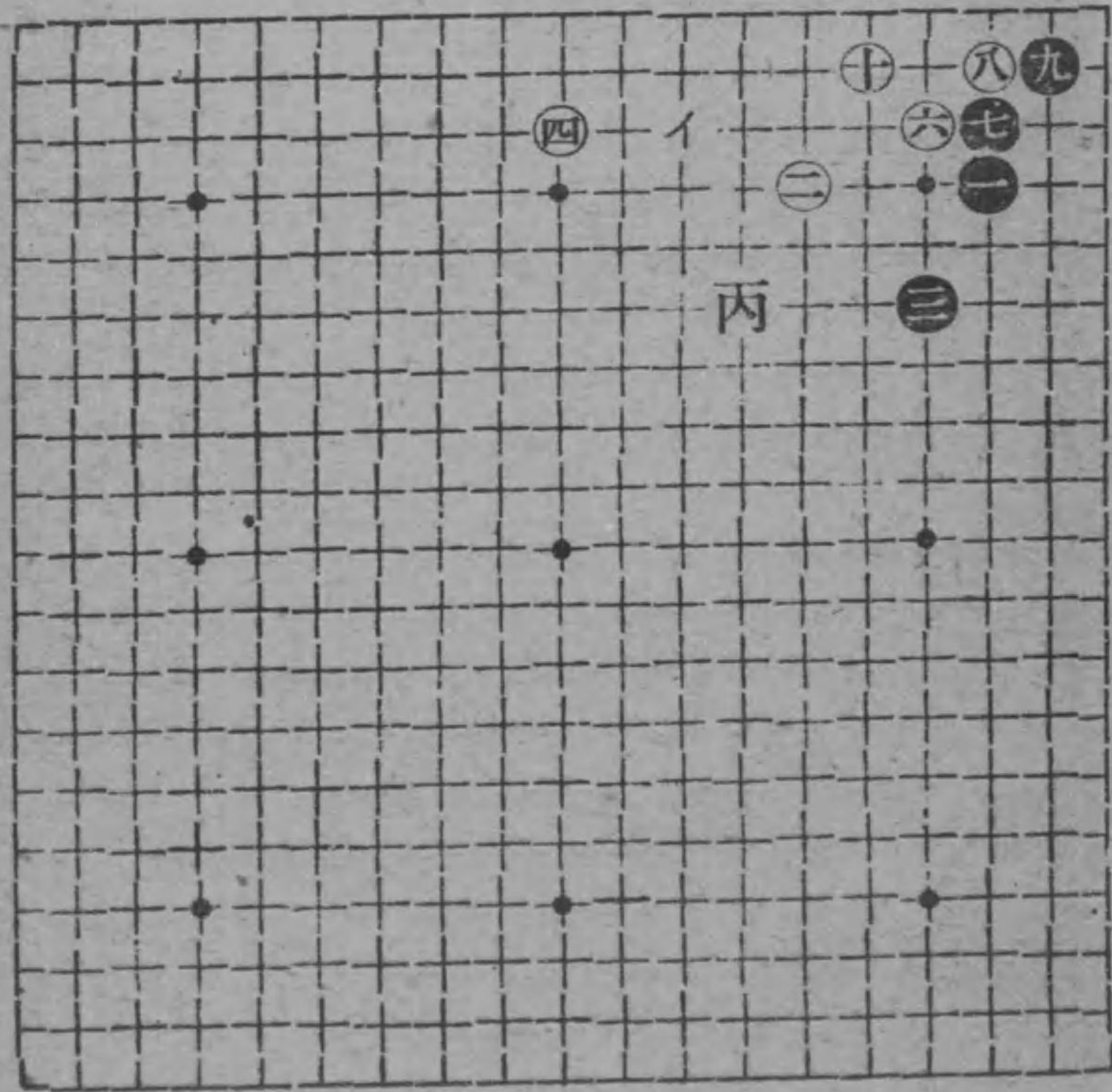
第七十五圖は白が二間高懸に向ひたる所に之は小桂馬及一間高懸よりもゆるやかな懸りで白は黒三と應じても手を抜き他へかゝることが出来る、黒としては三と小桂馬に走るが最上の應手である。白がすぐ打つとすれば

圖五十七第



(乙)圖の如く大きく開くがよい、黒五及七にて此隅を守るもよい若し黒が手を抜いたとき白は六と走り此右側を堅め、以てイへの打込みを禦ぐこと丙圖の如くするも一手段である。

圖六十七第

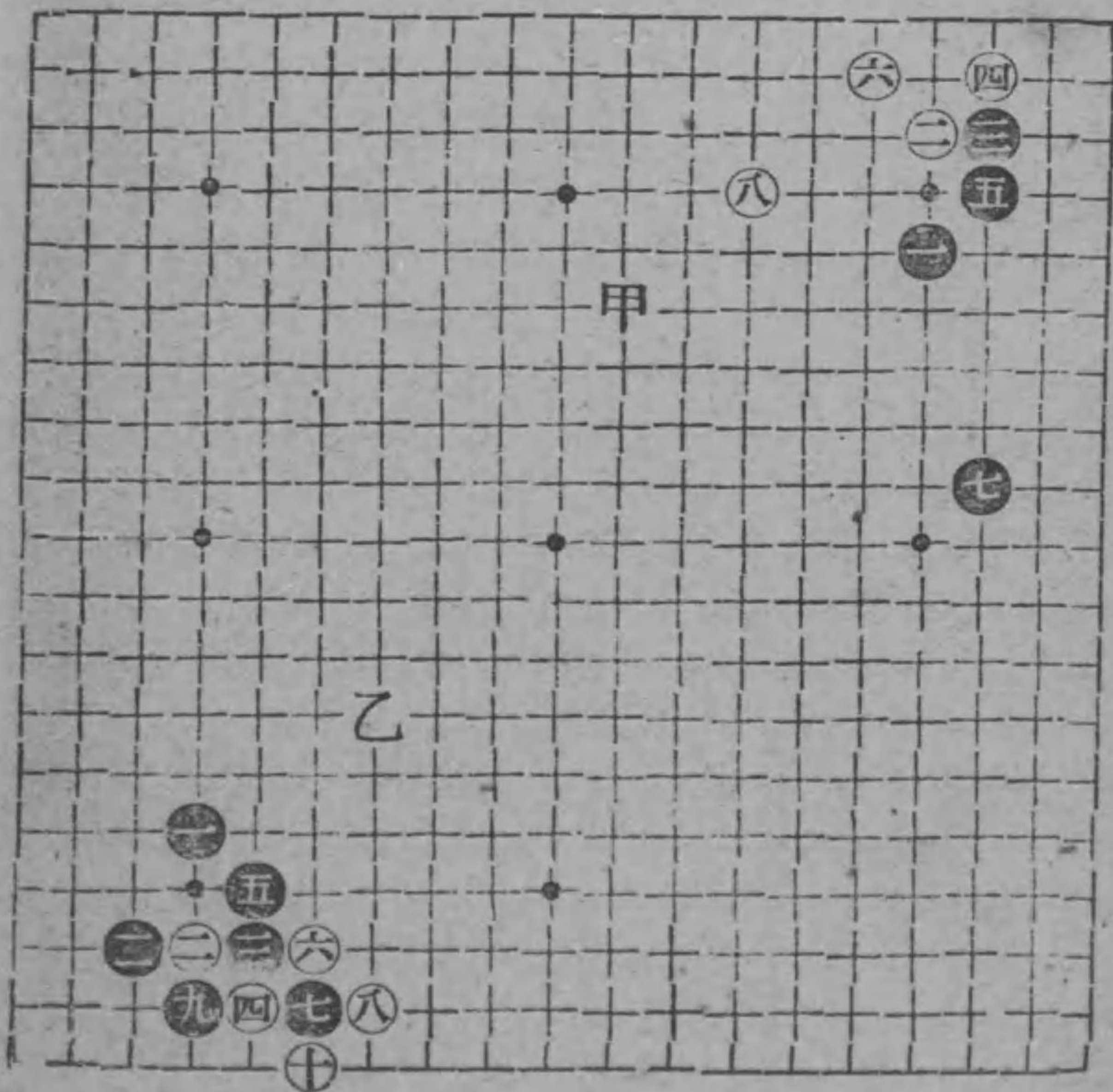


六、高目

高目は黒が上手に向
ひては多く用ひない、
やはり小目に堅く行く
方が常法である。

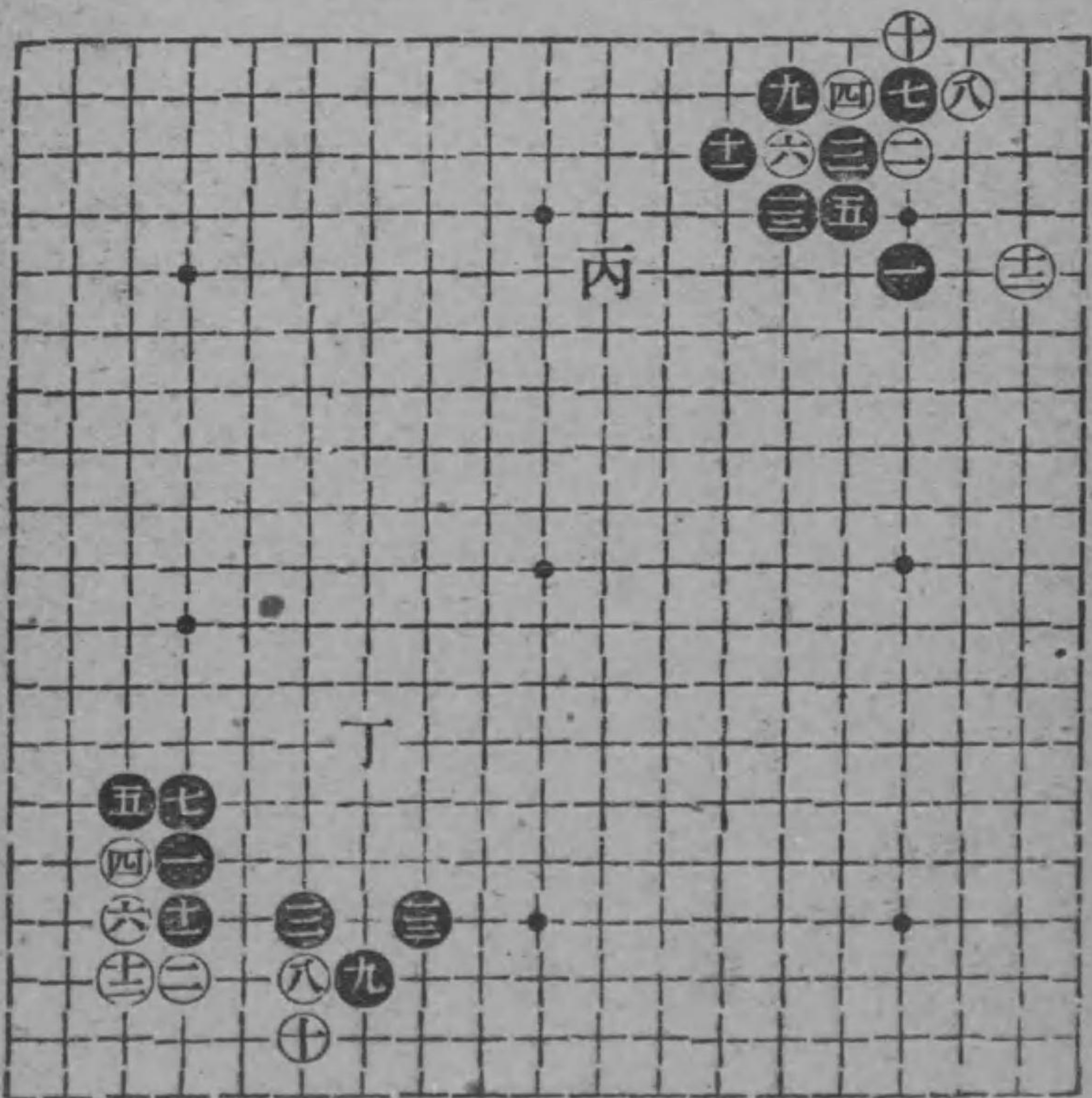
第七十七圖(甲)白は
一間高懸に懸るが最も
よい、黒は内頂にし五
と引き七と開くが最も
普通な堅い定石で、白
の六のカケツギ亦肝要
なり。

第七十七圖



(乙)圖は黒が外から
懸けたるにて、黒七の
手にて乙の如く外から
切るのと丙の如く中で
切るのと兩様あり。中
で切りし丙の場合は六
の一子を征にかけねば
ならぬから、安全を計
り十三と提らぬまでも
注意を怠つてはならぬ
(丁)圖は黒が外側を
張らんとして三と小桂
馬に掛りたり、黒十三
のカケツギ肝要なり。

第七十八圖



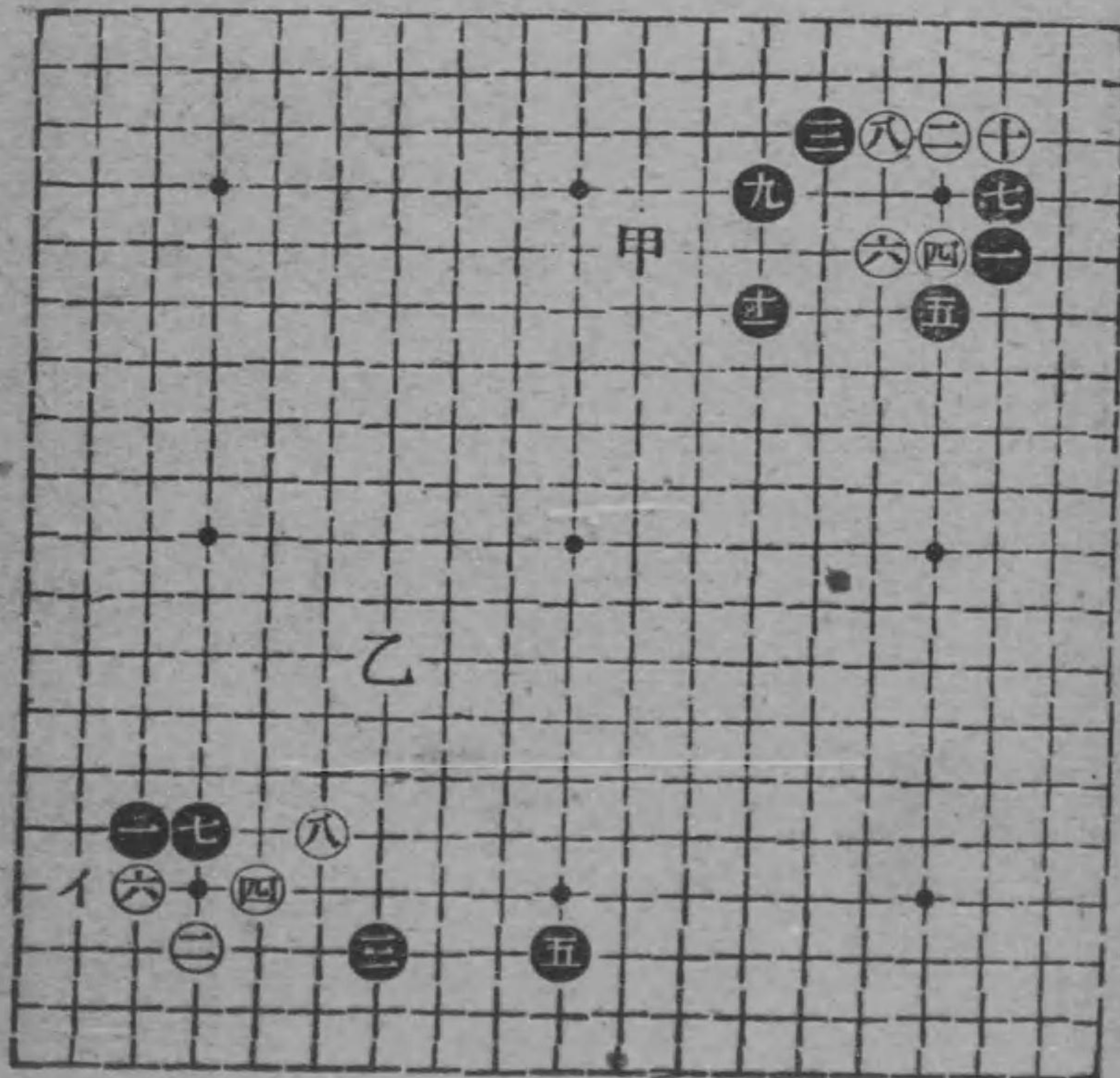
七、目外

小目の堅實高目の大い構への外趣向のある場合に目外を用ふ。

第七十八圖(甲)白十の手肝要なり、黒としても白十の箇所には伸びるは亦妙なり。

(乙)圖は黒がゆるやかに二間に夾みたり、白八はイに下る方此隅堅くてよし。

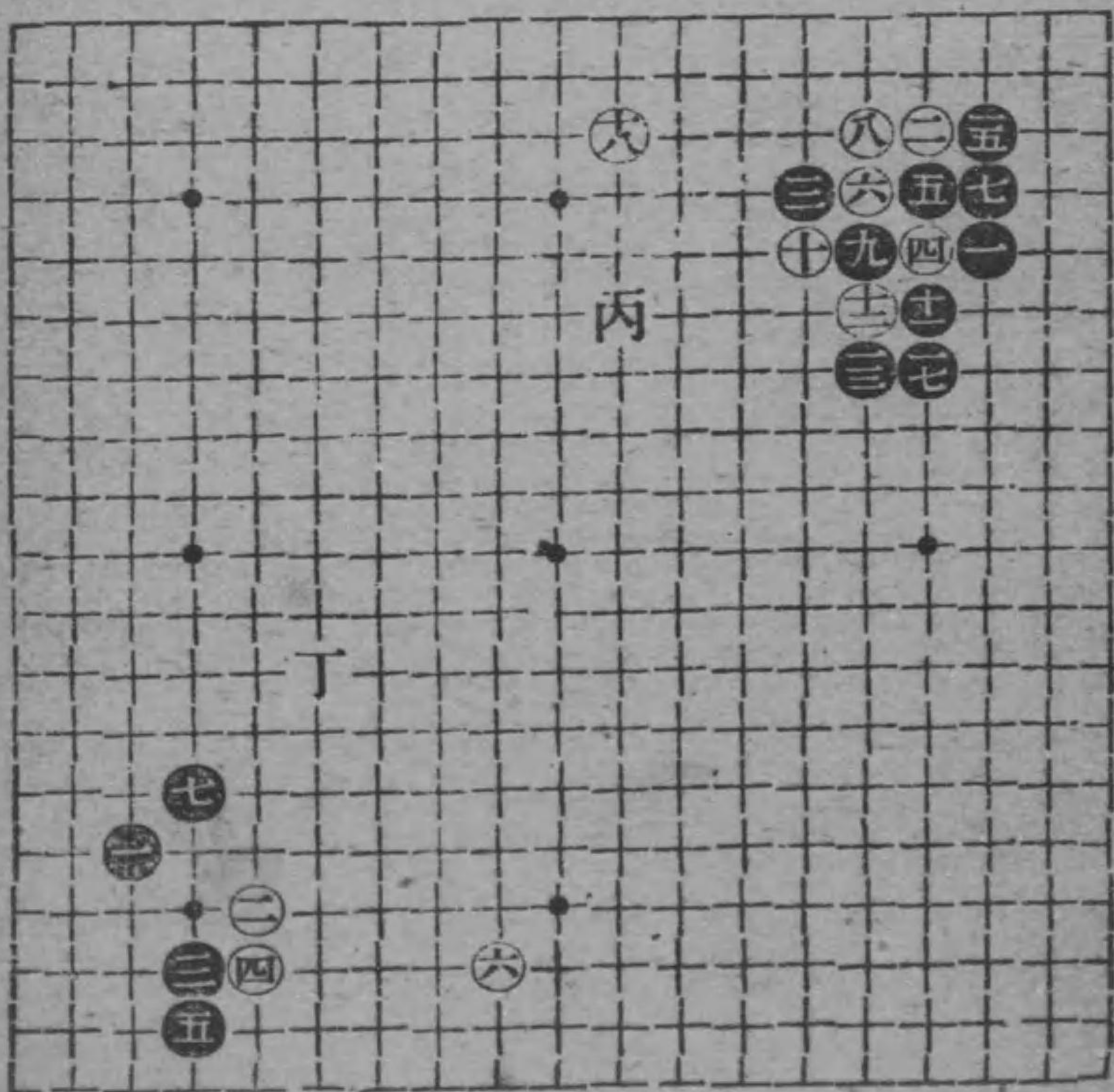
圖八十七第



(丙)圖白十四は劫を提る、即ち黒九を提る、十六は此所を粘ぐ、白十八と三間に大きく開くこと必要なり。

(丁)は白が二と淺く懸りたる場合にて、黒は三と受け五と下るこど此隅堅固になりて好し。

圖九十七第

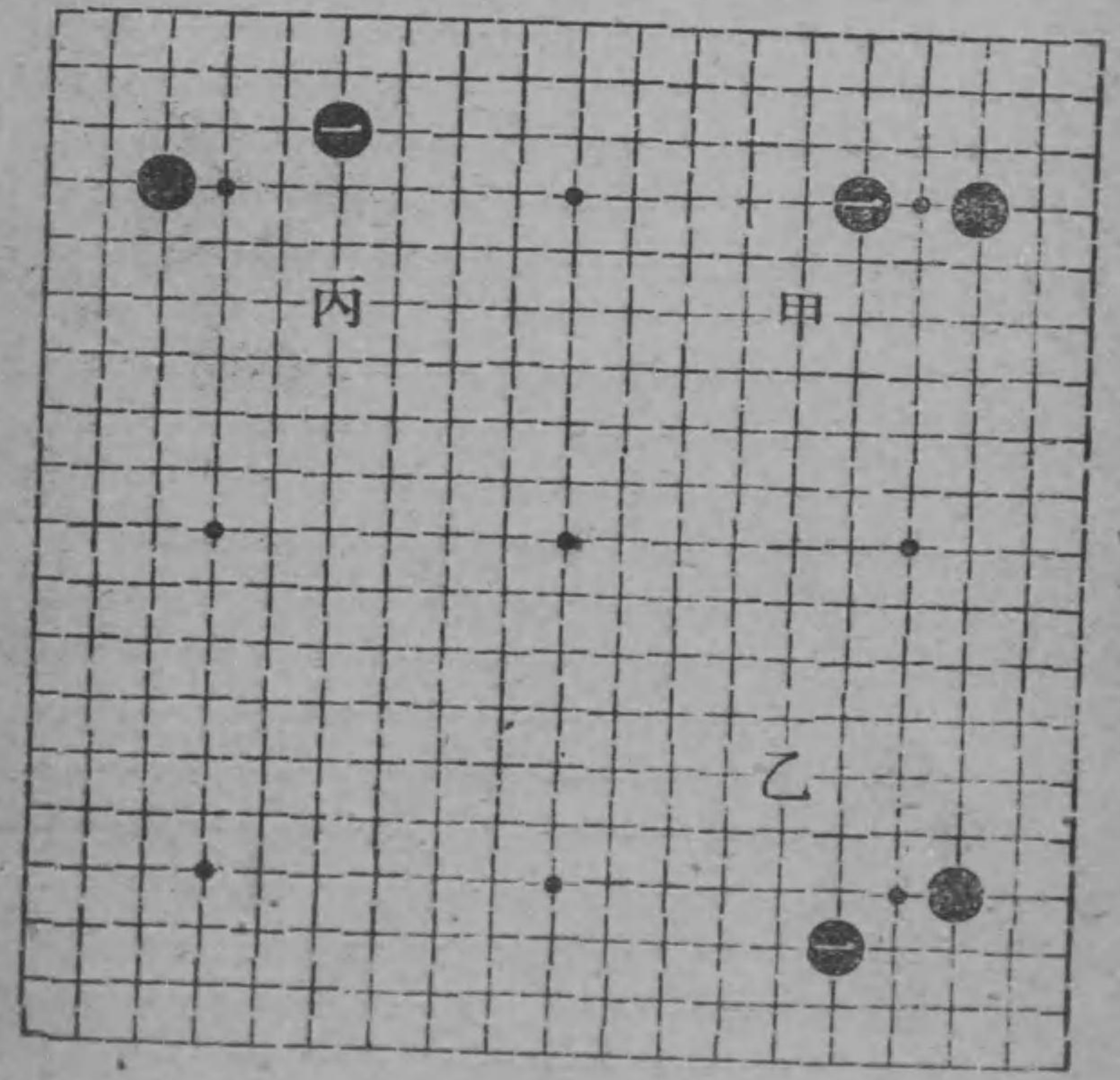


八、縮及縮へ懸方

縮りとは、敵が隅に懸つて来ない中に尙一目を打つて自己の勢力圏内におさめやうとするのである。

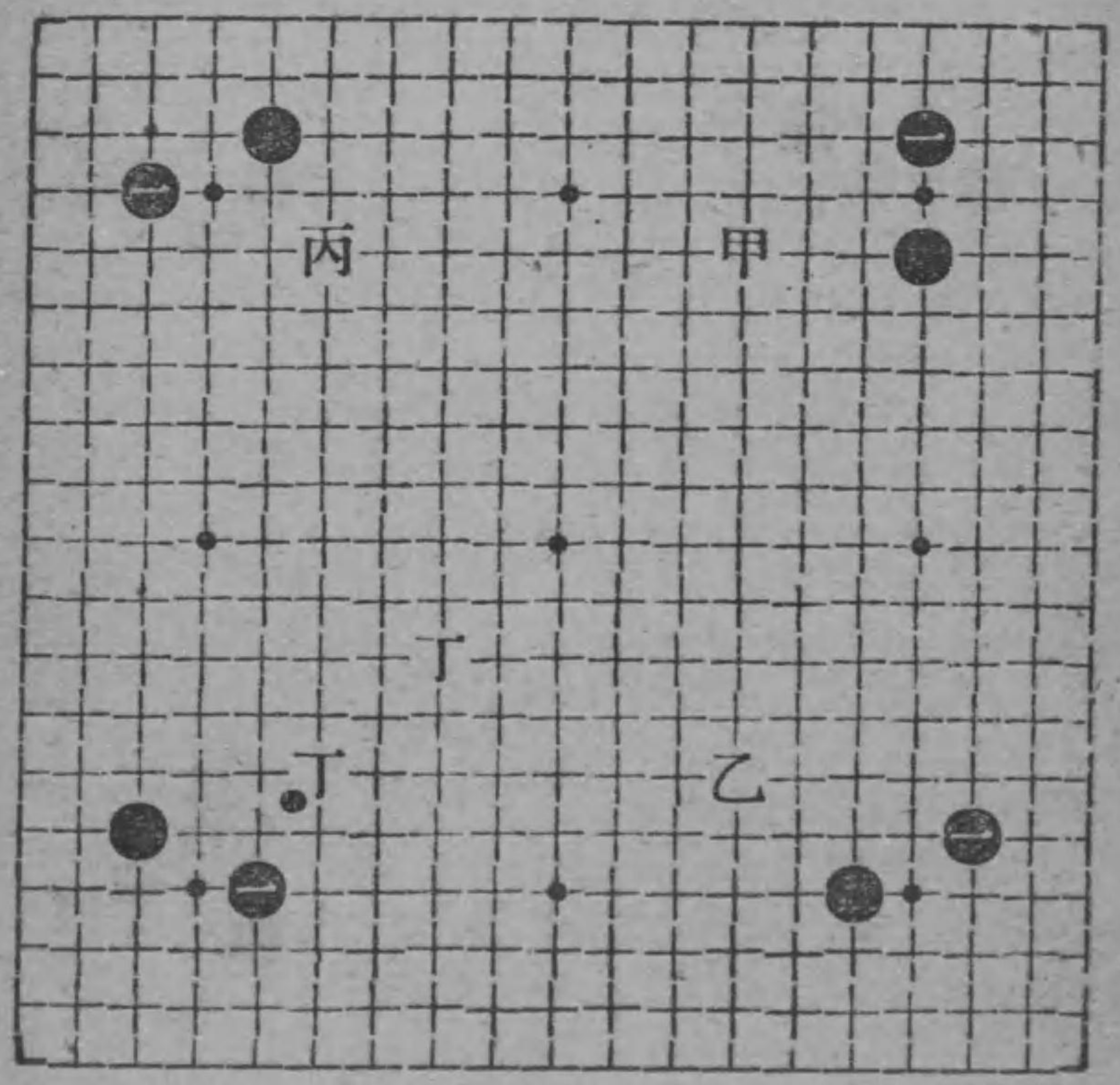
第八十圖は全部黒の小目に對する縮方を示したものである。
甲は高縮、乙は小縮、丙は大桂馬縮と稱し皆一般に用ひらる、右の

第八十圖



中乙は位は低いが最堅固にて打込まれる憂がない、而し甲及丙が位高く構へが大きいから多く行はれる。
第八十一圖甲及乙は高目、縮方を表はすものにて、甲の方堅實なれば使用されること多し。
丙及丁は自外の縮り方にて丙の方堅固にて隅を確實に領有することが出来る。

第八十一圖



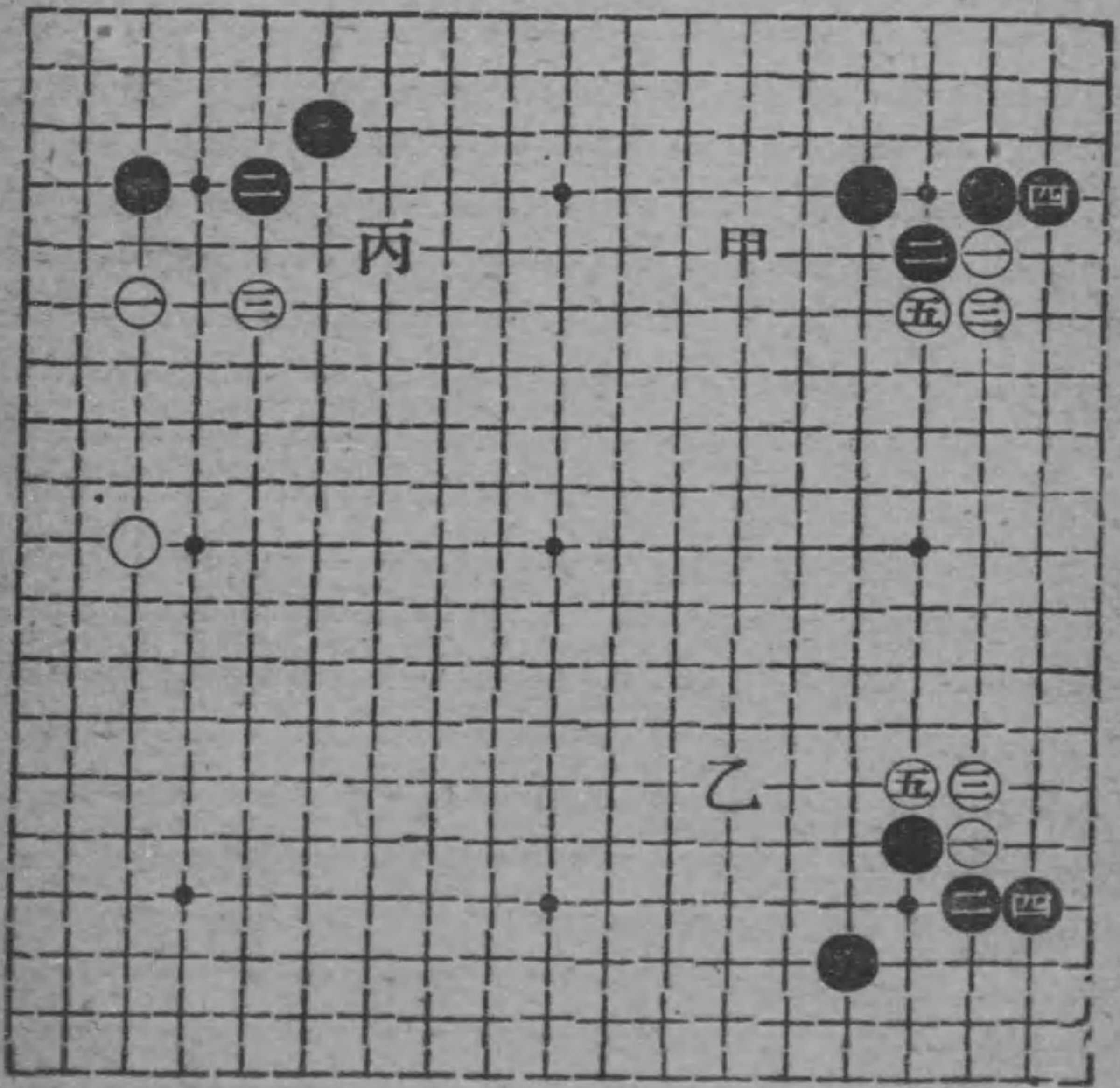
第八十二圖及第八十三圖は黒の締りに對して白の懸り方を示すものなり。

(甲) 黒四の下り白五の立ち要點なり。

(乙) 同様四及五の手肝要とす。

(丙) 黒大桂馬の締りに對し甲及乙の如く頂けて打つは面白からず圖の如くする方よし、黒二最も堅き守備にて之に對し白も三と一間

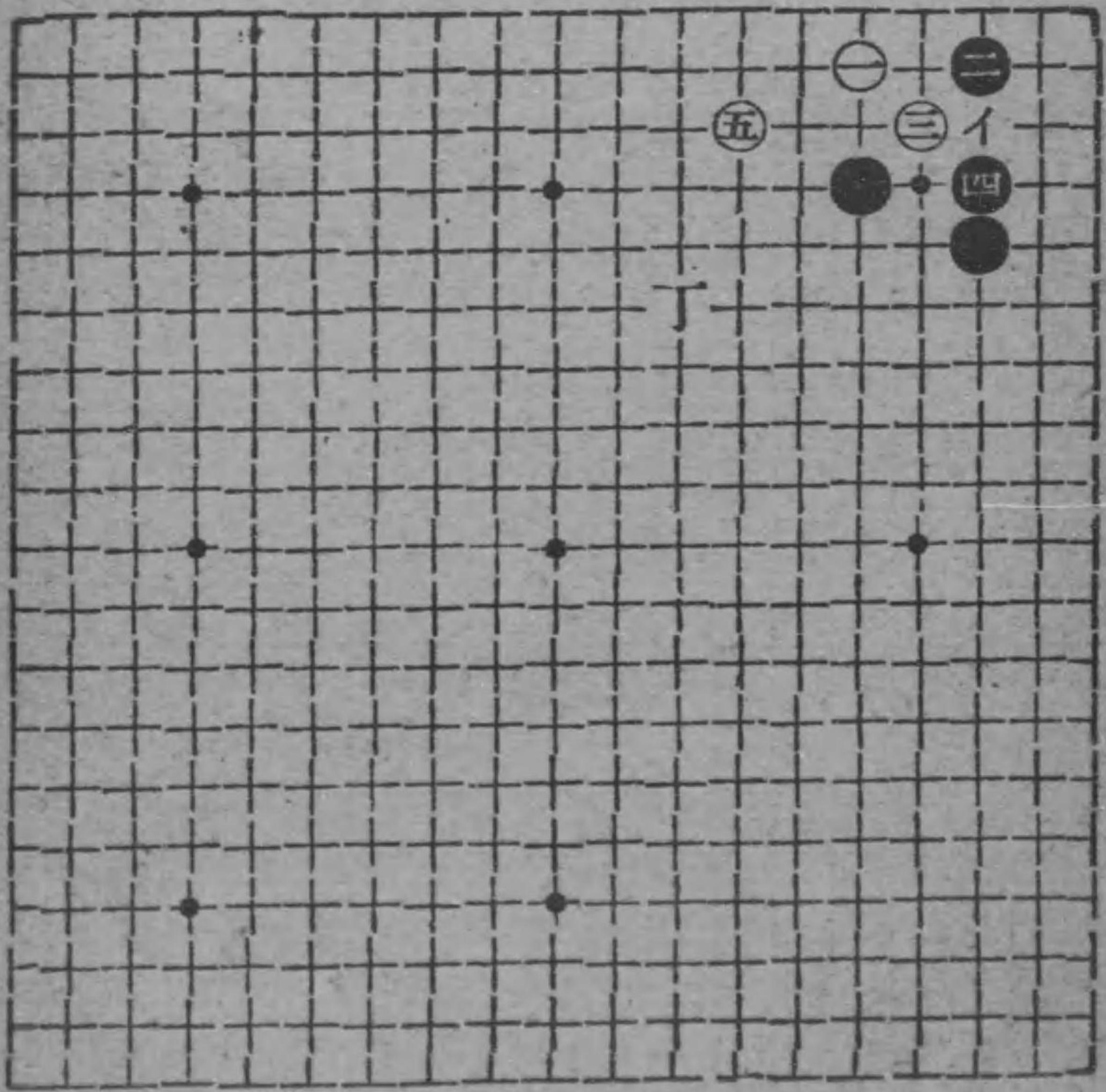
圖二十八第



トどたる應手順當なりとす。

第八十三圖一白一の懸に對して黒二と控へ白三と尖みし時黒四の應手よし、イに打つはよろしからず。

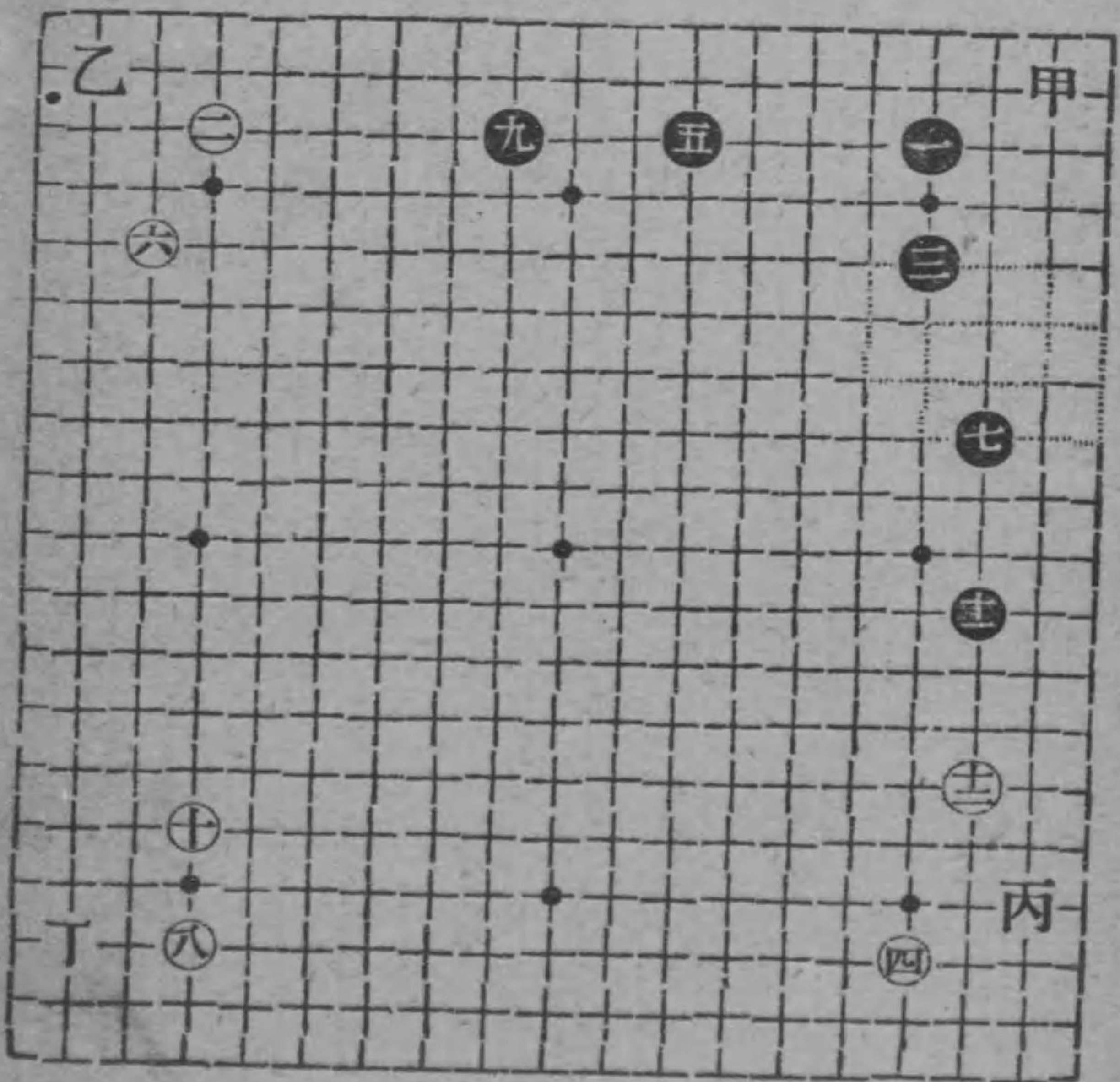
圖三十八第



互先石立の事

第八十四圖に於て黒は(甲)の隅を根據として發展策を講じ、白は他の(乙)(丙)(丁)の三隅に着目し此三隅を根據として三方より勢力を布かんと試みたり。扱右の優劣如何といふに之は互先石立即ち互先の對局に當り石を布く上に第一に着目し

圖 四 十 八 第



なければならぬ重大な要點である。

從來しばしば説いたことのある通り、隅は最も守り易くして且つ發展し易き好位置であるから、白の三つの隅は此の三隅を占領したばかりでなく邊及び中央に對しても響き多し、即ち山上の大砲の如く四方を見下して其威力を振ふに反し、黒の如く一根據地から漸次蠶食する方針をとるは隅の好位置を棄却することになり、恰も大きい饅頭を取らないで小さい饅頭を取ると同じ理になるのである。

今また第二の理由としては黒三と七とに就て觀るに黒三の下方に對する威力と黒七の上方に對する威力の一部が重複することになる、恰も池の中に同時に二つの石を投ずれば波が一部分混亂する所が出来ると同じであるから打始めに於ては散在して布石するが有利である、決して第八十四圖黒の如き打方をしてはならぬ。

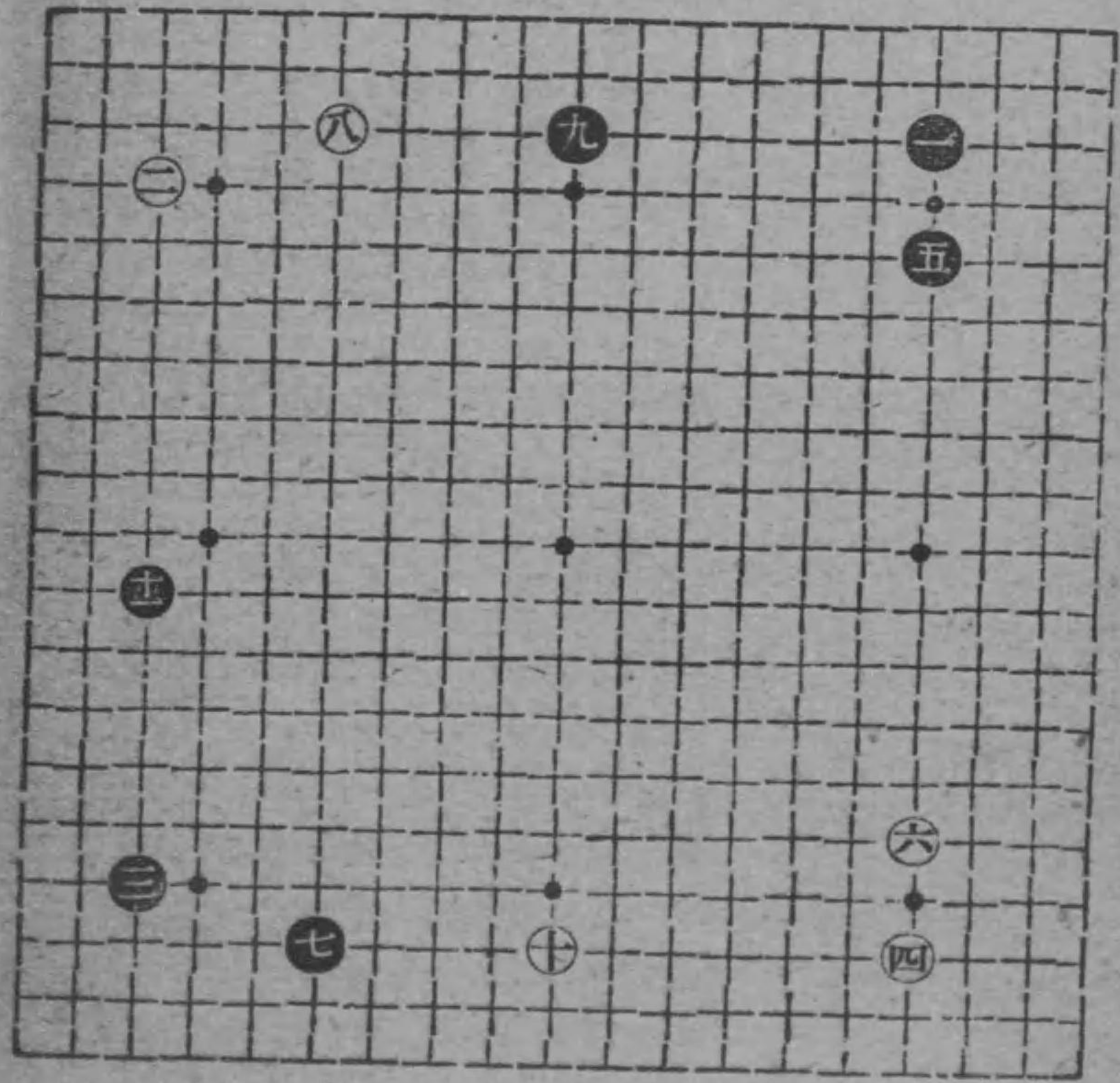
夫で數字的に此の優劣を表せば白が十の勢力ありとせば、黒は六か七位のものである。

諺に曰く

四隅取らせて碁を打つな

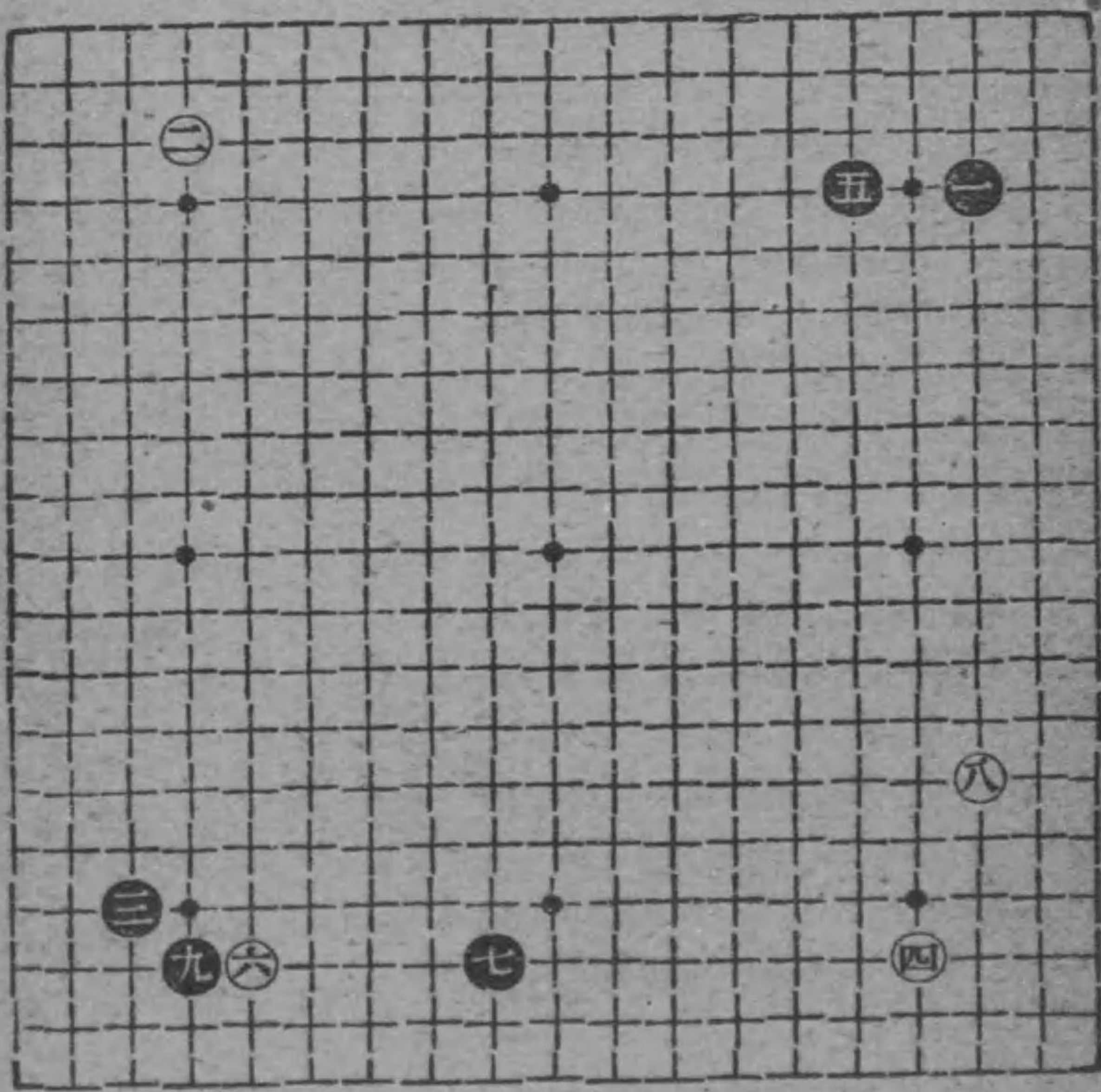
然らば次に第八十五圖の如く黑白各二隅を締りて邊に及べたりとせんに、黒は先手なるを以て一足先に好位置に布陣することになり必ず勝つが正當である即ち第八十五圖の如く白は黒のまねをして同じ様な石立に打つては當然敗北すべきものであるから此様な布石をしてはならぬ。

第八十五圖



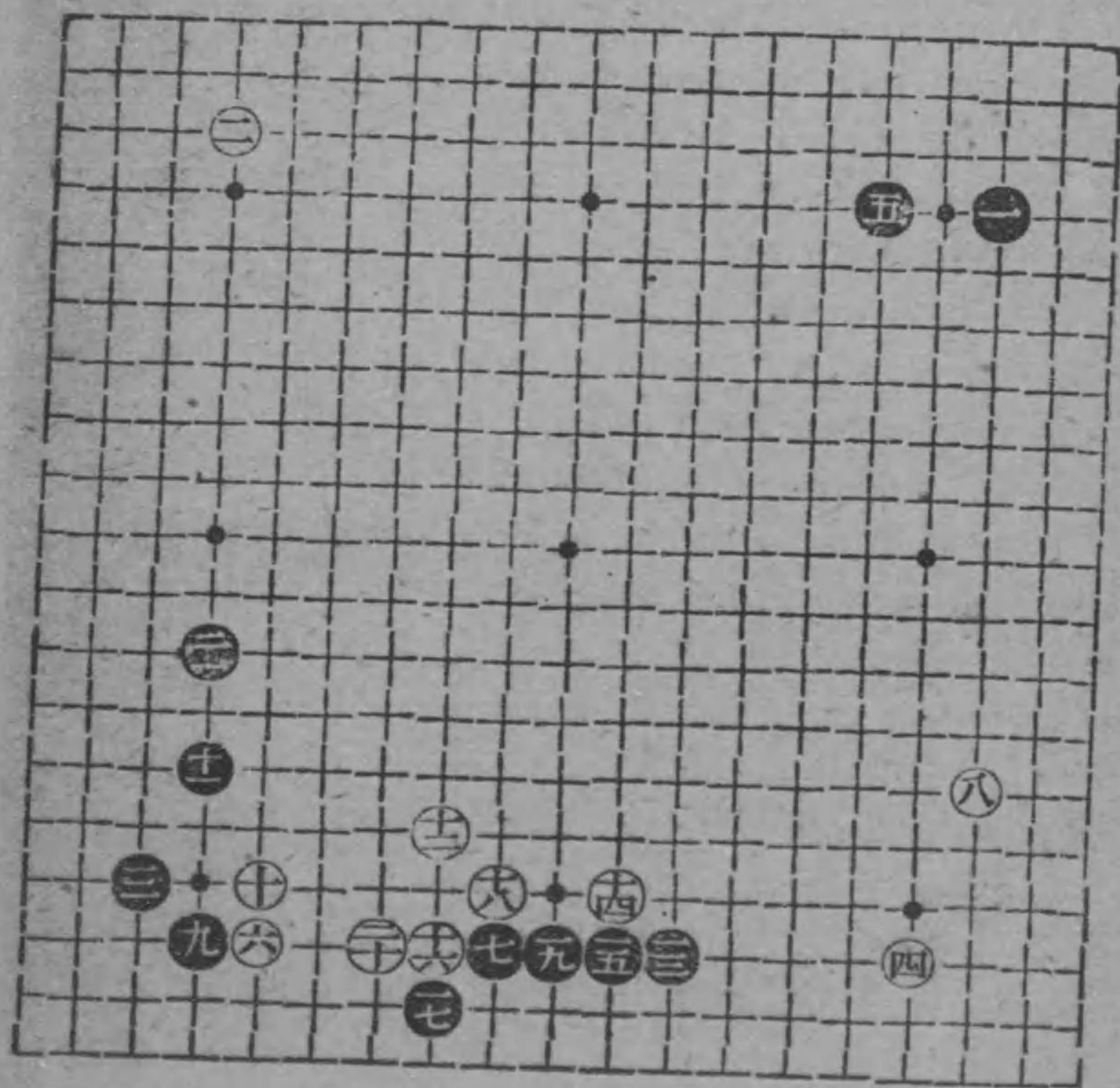
第八十六圖は模範的に石立の一般を示すものにて一より四までにて四隅二箇所づゝに着手することは定則といつて宜しい。次の第二の要件は黒五の如く隅を締るのであるが、白も二の所を締つて居ては黒に三の所を締られることになり同じ様な型に落ちて面白くない、それで六と小桂馬に懸つたので

第八十六圖



ある、此の如く縮る變りに懸るは決して不利ではない、白持つ方はかく進取的に向はねば勝目がないのである。黒がゆるく三間夾に來た時白は位大きく大桂馬に縮りたり。黒九と尖みて白六を攻め立つるに及びて此所普通の定石にて應手となり黒二十一に至る

圖七十八第

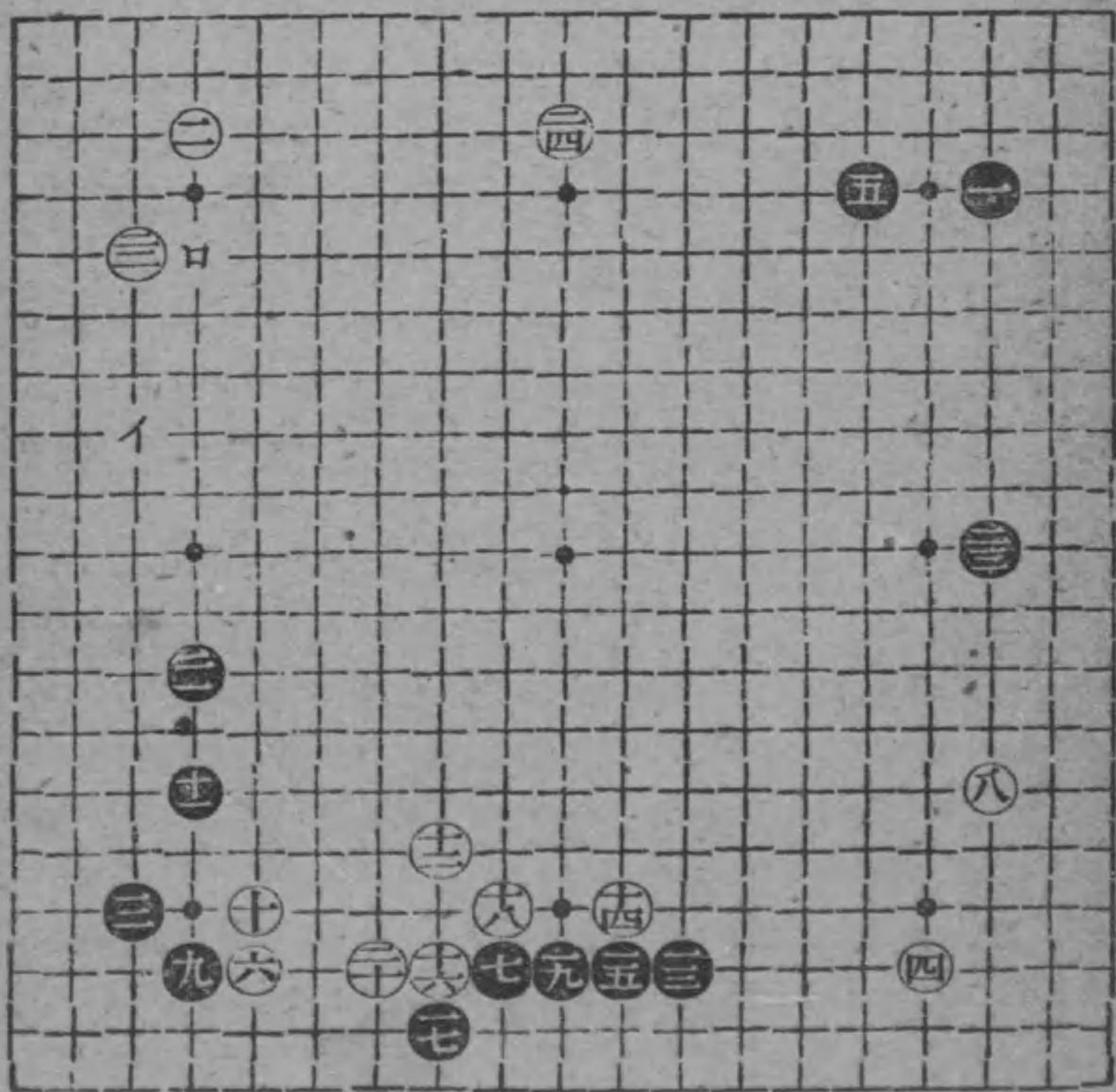


一〇八

第八十八圖は前圖の續きである。

黒二十一までにて此所手を抜いて白は二十と縮りたり、もし口に打てばイに黒に打たれると其所が黒の好着點になるからひかへて堅く縮りたるなり。次の好着點として黒は二十三と開きたるに對し白も大きく二十四とひらいたのである。

圖八十八第



一〇九

第七篇 雜

此篇では普通の碁打ちの知らない秘傳二三につき傳授することとした。

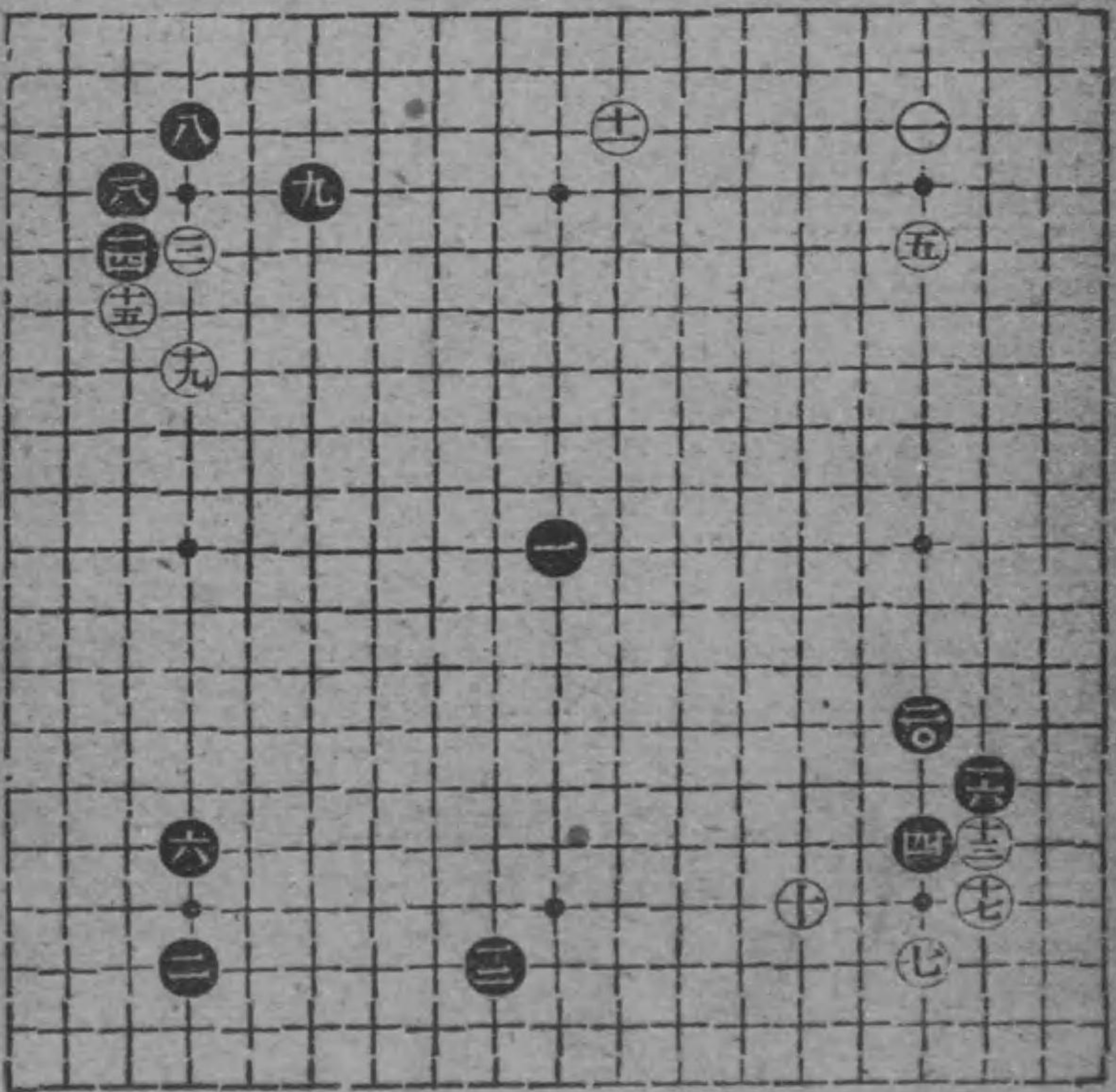
- 一、太閤碁
- 二、長生
- 三、角曲四の生死
- 四、缺眼生

一、太閤碁

此太閤碁といふは太閤秀吉公の發明か否かは明かでないが、此打方をすれば決して負けることはない、稀に勝つこともある、即ち市に終るのが普通であります。

先づ黒の先手を取り
第八十九圖の如く中央
に一と打つのである、
之が秘訣なのである。
後は圖の如く白の打
方と同じ様に打つてい
くのである。
つまり全く形が同じ
様に出来るから一目も
勝も負もない、然し中
央で相接して攻合ひに
なつた時注意すれば勝
となるのである。

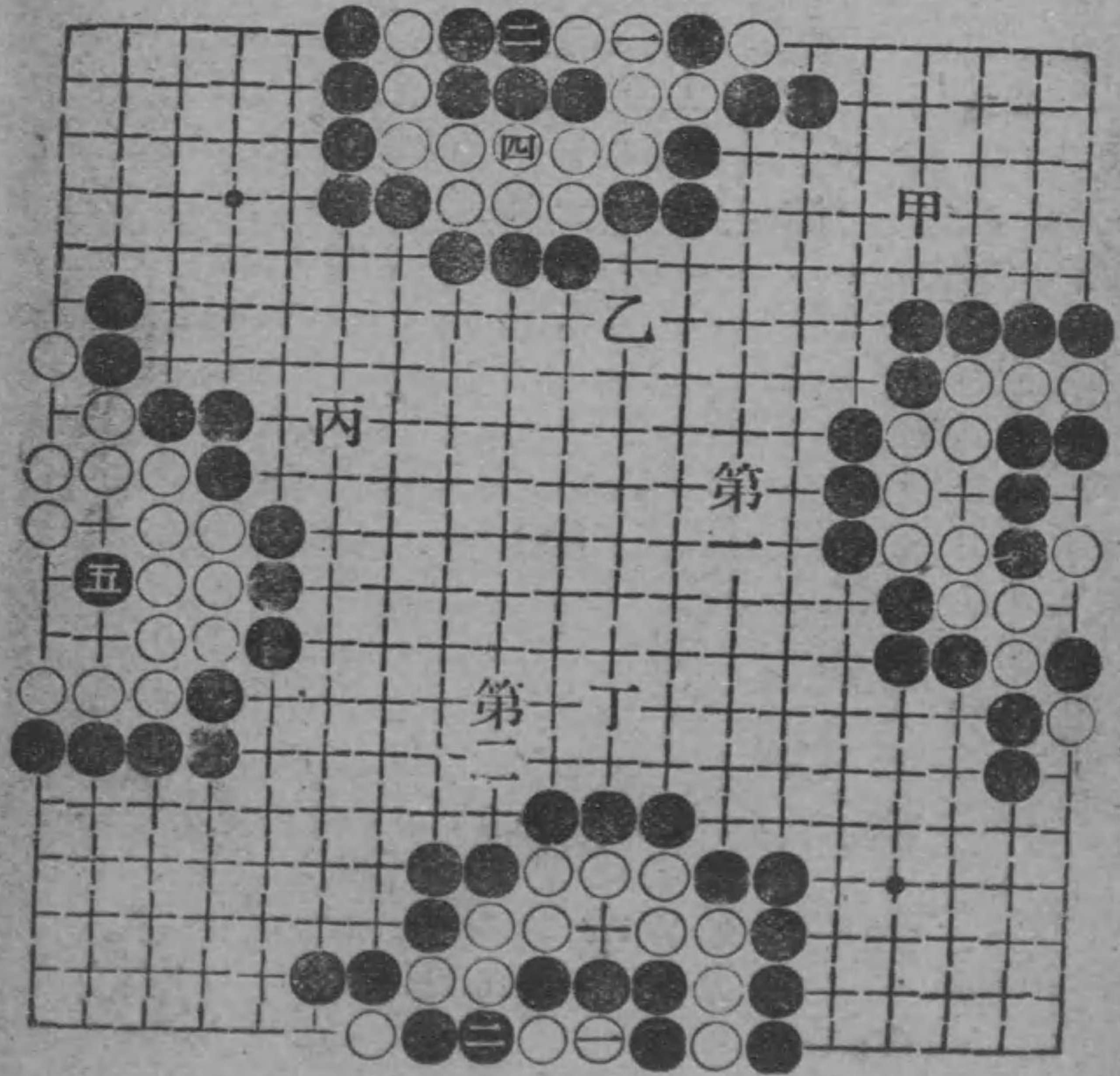
第八十九圖



二、長生

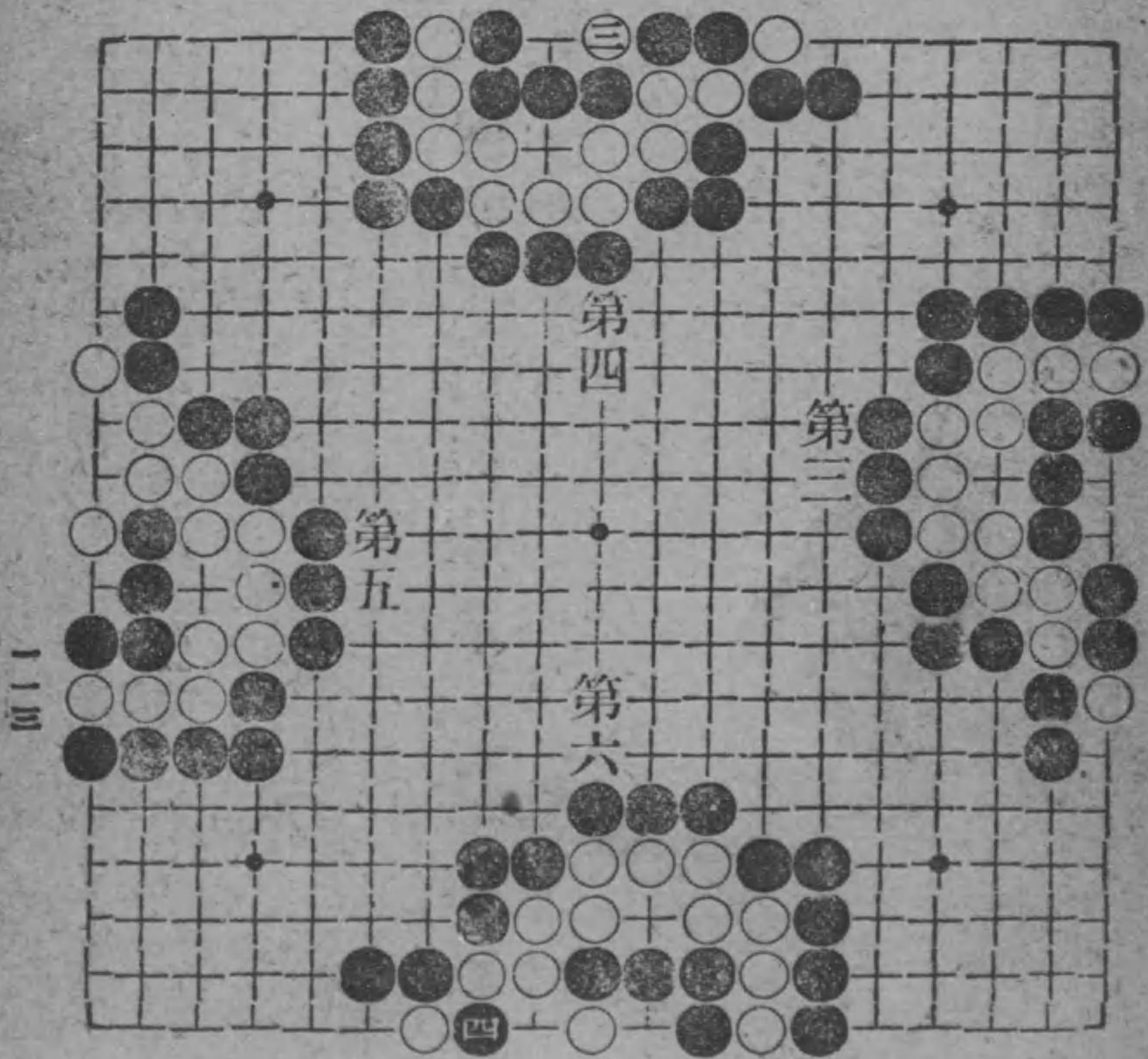
第九十圖(甲)に於て
 白の生死如何といふに
 (白を先手とす)乙圖の
 如く白は黒の一子を提
 りたる場合は黒は二と
 入れ黒手拔となり白四
 と五目提る、此時丙圖
 の如く黒は中手に五と
 一子を投ずれば白は明
 に死となるべし。
 次に第二の如く白一

第九十圖



と打たば黒は二と打ち
 第九十一圖第三の如く
 なる白は勢ひ第四の如
 く三と入れて黒の二目
 を提らねばならぬ、即
 ち第五の如き形となる
 此時黒が第六の如く一
 子を投ずれば其形は全
 く第一と同様になつて
 ゐる。
 之を要するに此白は
 第九十圖の乙の如くに
 黒の一子を提れば死と
 なるが、第二圖の如く

第九十一圖



打たずれば、何度でも繰り返してあれば決して提られることはない、猶語を替へて言へば白としては第二圖の如く打たなければ死となるのだから、第二圖の如く打ちて死をのがれるより外に策の施し様がないのであります。

劫は一目の奪ひ合ひに限りませんが、之は二目の奪ひ合ひになり恰も劫に似た状態になります。

夫れで此白は長生と名づけ、彼る場合になつた時は此一局は打ち直すより外に策がない、即ち勝負なしとして放棄するのであります。

見物は

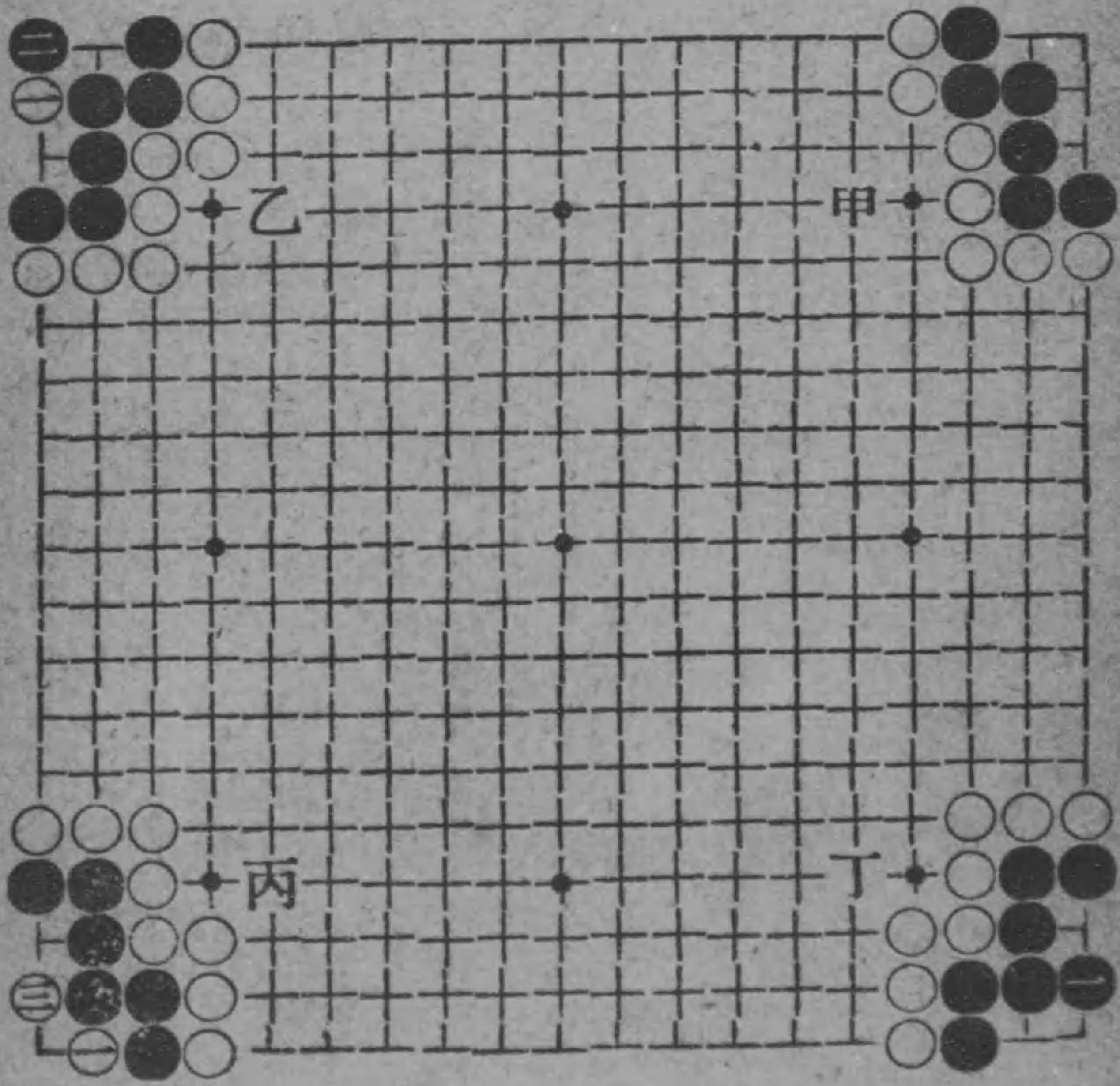
皆強さうな

口をきき

三、角曲四の生死

第九十二圖甲の角曲四目は乙圖の如く白に一と中手を打たれると黒二と打ち、丙圖の如く白三と提り劫になるから、碁の終局の場合黒に劫種がなくなると遂に死となるのである。依つて黒としては堅實に生を欲するときは丁圖の如く一子入れてお

圖二十九第

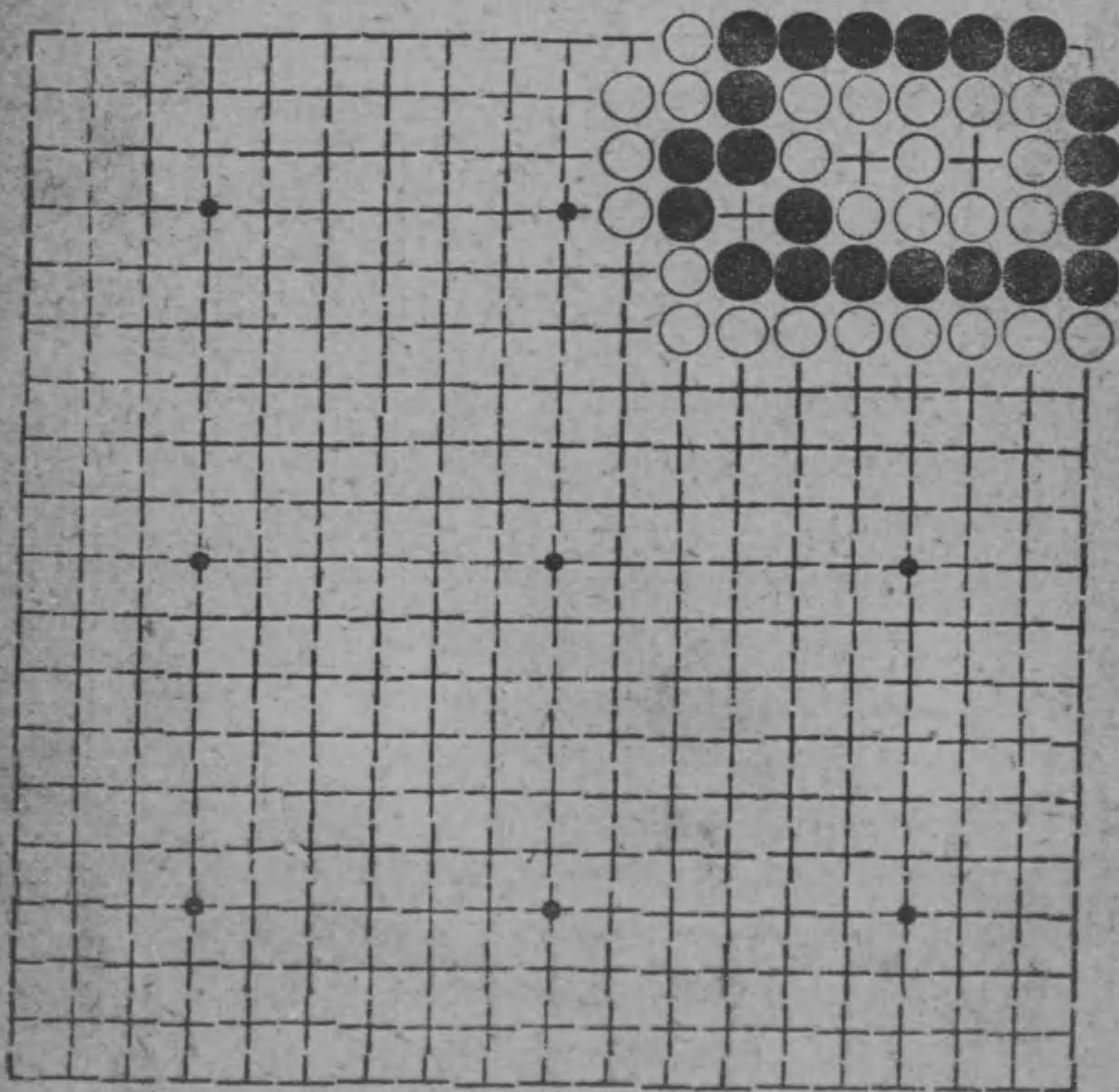


必要があるものであり
ります。

四、缺眼生

第九十三圖の黒は兩
眼とも缺眼であります
が連絡してゐるため完
全なる生であります、
面白い形ではありません
か。

第九十三圖

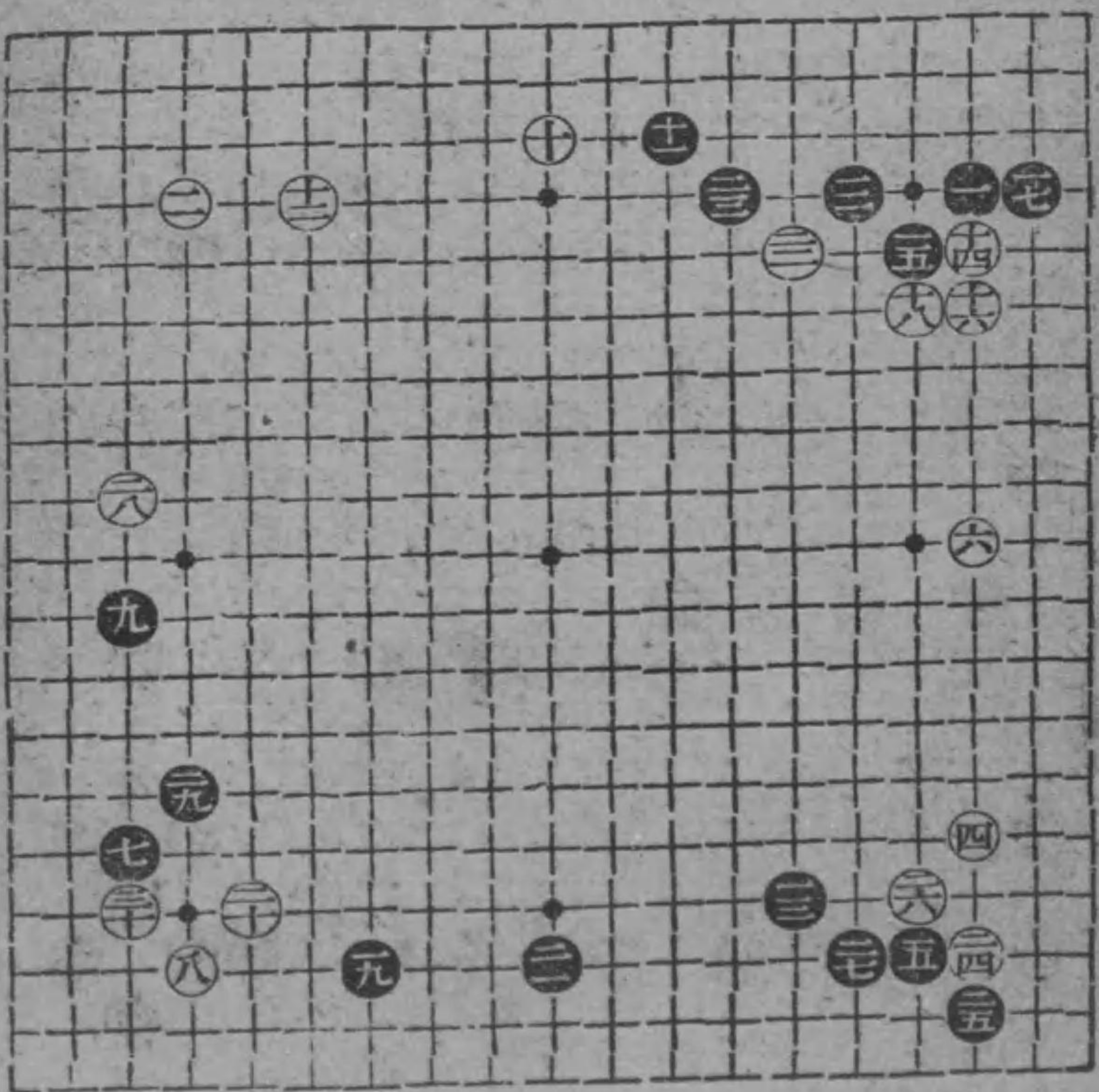


附
實戰

茲に掲げるのは五段
長野氏四段宮坂氏最近
の對局にて宮坂氏先の
手合である、第一圖よ
り四圖に分ちて寫せり
白四目外に打ちたるは
白六と廣くひらきて、
黒の此好着點に先んじ
たるなり。

白三十までにて配石
の大體が出来た。

第一圖

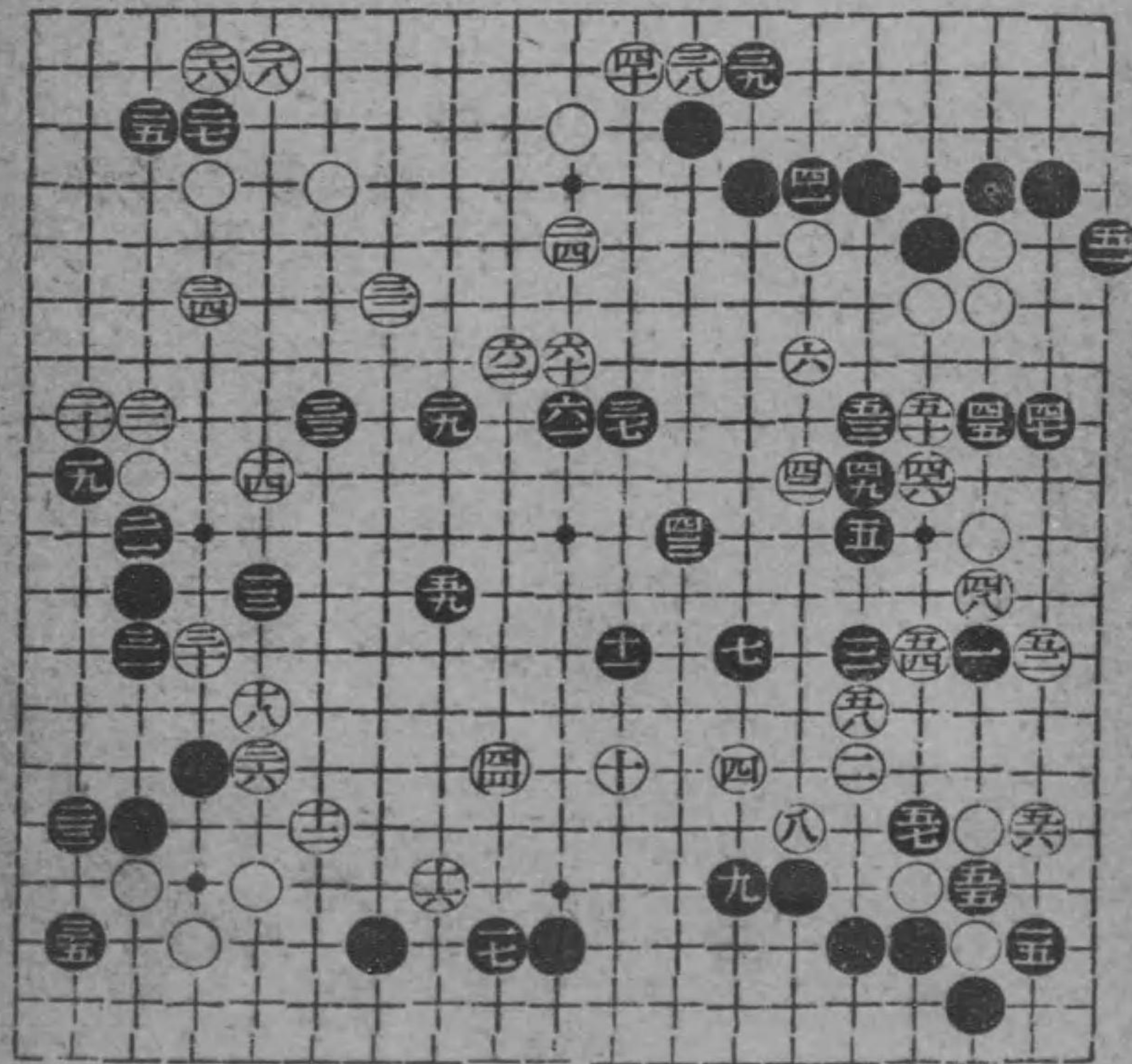


第二圖—黒一の打込ありて之より波瀾を生ずることになる。

白六及八は共に切手を防ぐ意味を保有してゐる。

黒二三はこの所の黒の生を確實にし、三五に打込の有る重要な着手とす。黒五及二七は此隅に生を得る望なけれど、白を牽制して白地を外郭より壓縮せんとする目的に出づ。

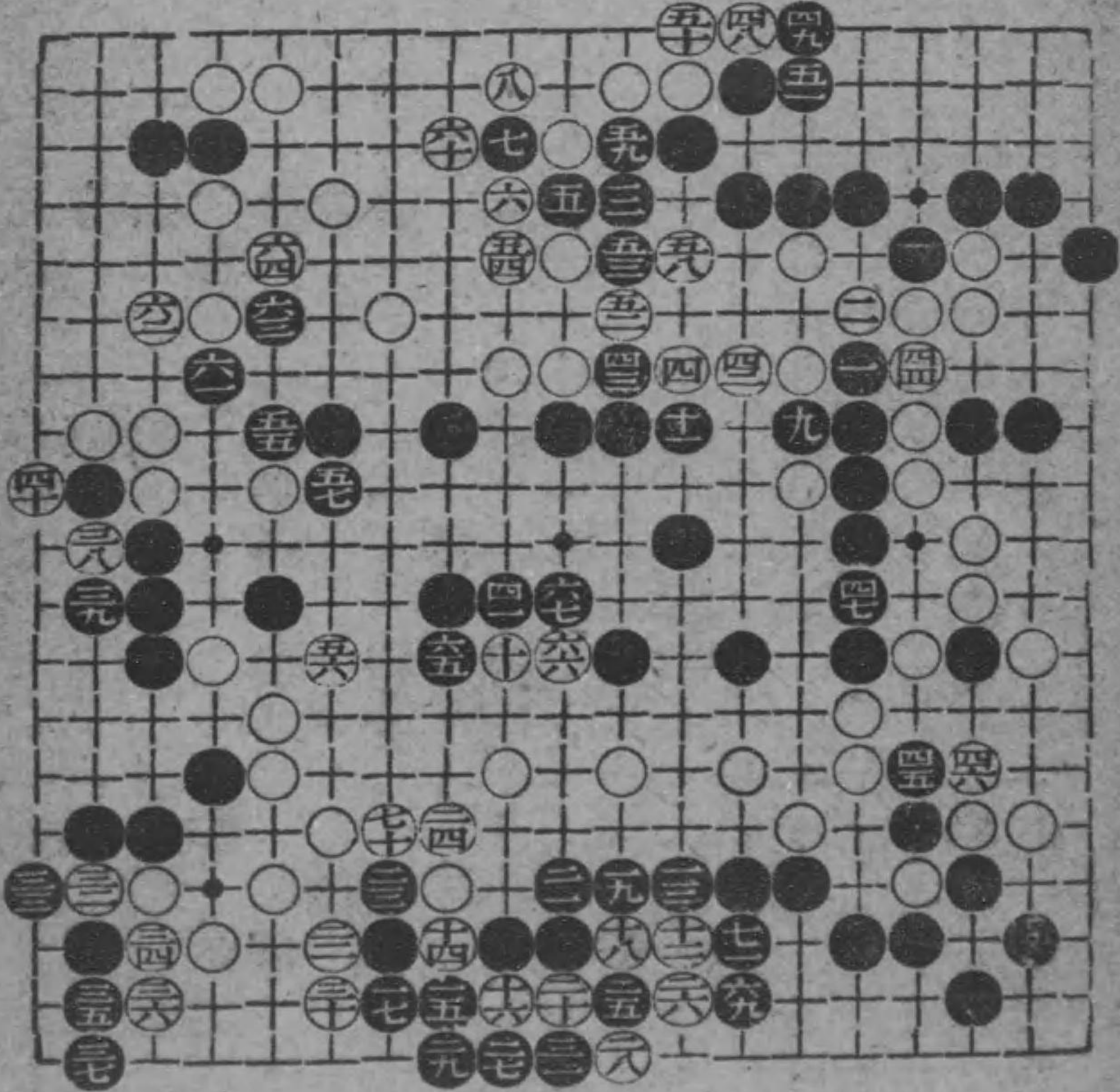
圖二第



第二圖六二手までに白黒共に陣容殆ど整ひ第三圖よりは専ら敵地に侵入所謂侵分の階梯に入つたものといつて宜しい。

第三圖白十二の打込は、やはり生を求める爲ではなく三十までの如くなりて白は左下隅に多少なりとも地をつくる事が出来た。白六八は黒二五を捉つた隙に粘ぐ。

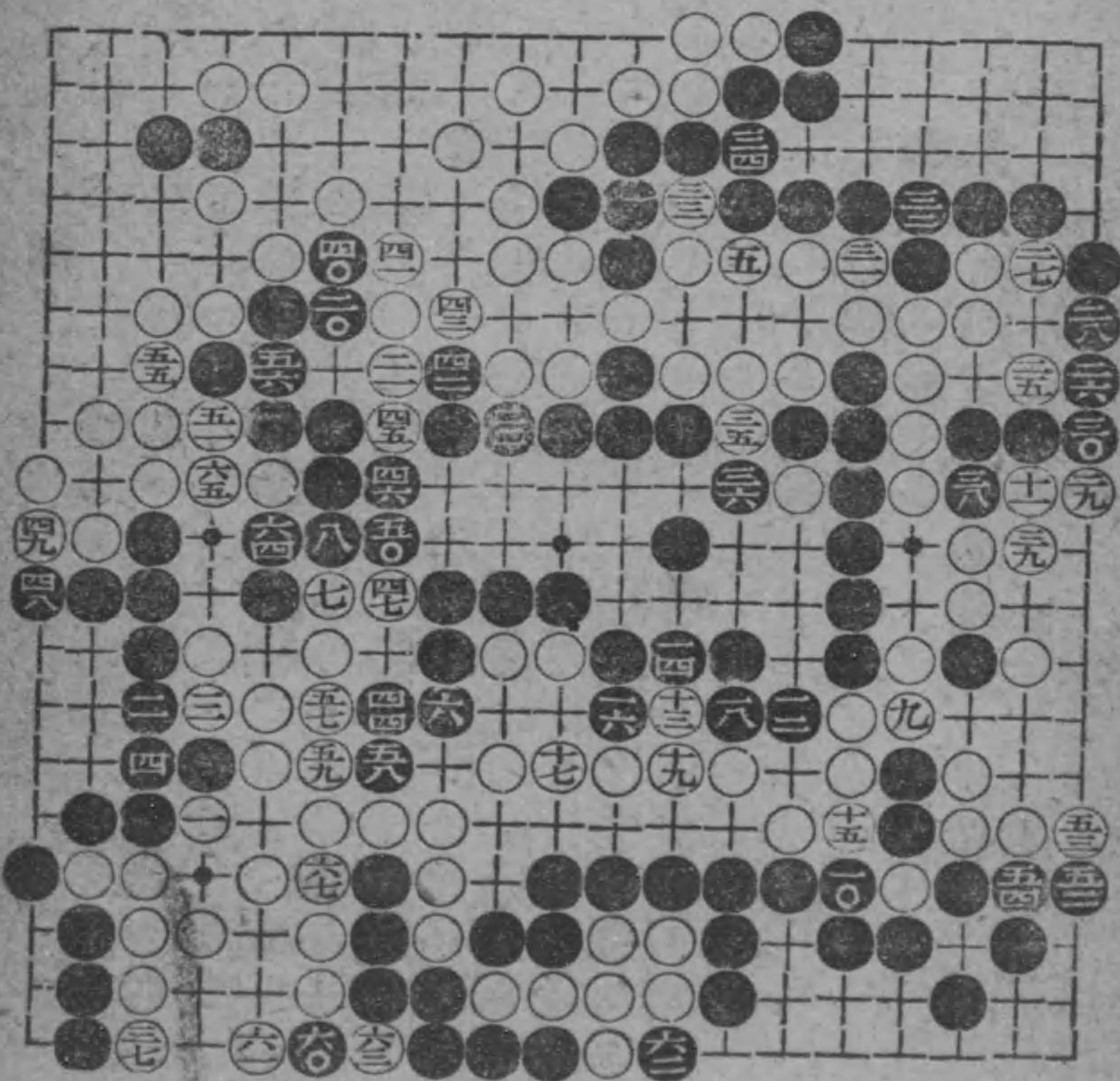
圖三第



第四圖—白二三三は右下隅黒二目提る黒二四で同所白一目を提る。黒六六は切を提り六八で粘ぐ。

黒六八までにて此局全く終りをつぐ、總計二百三十一手である、之からは駄目をつめて計算するだけである。計算の結果黒(宮坂氏)四目の勝となる。

第四圖



110

大正九年三月五日印刷
大正九年三月十日發行



圍碁研精會編

發行者

東京市麴町區山元町二丁目八番地
梅田 太一

印刷者

東京市京橋區本八丁堀町一丁目十五番地
秋場 熊太郎

印刷所

東京市京橋區本八丁堀町一丁目十五番地
秋場 印刷所

東京市麴町區山元町二丁目八番地

發行所

圍碁研精會

386

219

終

